

学 位 論 文

日本における中国出身長期滞在者の異文化適応に関する探索的研究

令和6年9月

趙 師哲

75501107

岡山大学大学院
社会文化科学研究科

目次

第1章 序論.....	4
1.1 本研究の社会背景.....	4
1.2 本研究における中国出身長期滞在者の定義.....	4
1.3 異文化適応と文化変容方略.....	5
1.3.1 異文化適応.....	5
1.3.2 文化変容方略.....	6
1.3.3 文化変容方略と異文化適応の関連.....	8
1.3.4 文化変容方略モデルの貢献と限界.....	9
1.3.5 二文化を越える志向性.....	10
1.3.6 二文化を越える志向性の適応上の意義.....	11
1.4 中国出身長期滞在者における異文化適応上の問題点.....	12
1.4.1 異文化適応において生じる問題の規定要因.....	12
1.4.2 日本における中国出身者の異文化適応上の問題点.....	13
1.5 異文化環境におけるウェルビーイング.....	14
1.5.1 ウェルビーイング.....	14
1.5.2 中国出身長期滞在者のウェルビーイング.....	14
1.6 本稿の目的と構成.....	15
第2章 日本在住の中国出身長期滞在者の主観的ウェルビーイング——文化変容方略との 関連——.....	19
第1節 研究の背景と目的.....	19
第2節 方法.....	20
2.1 調査対象者.....	20
2.2 質問紙の構成.....	22
2.3 調査の手続き.....	23
第3節 結果.....	24
3.1 文化的志向性.....	24
3.2 文化変容方略.....	25
3.3 主観的ウェルビーイング.....	26
3.4 下位尺度間の相関分析.....	27
3.5 文化変容方略の4分類における心理的適応.....	28
第4節 考察.....	29
4.1 中国出身長期滞在者の文化的志向性.....	29

4.2 中国出身長期滞在者の心理的適応と文化的志向性の関係.....	30
4.3 中国出身長期滞在者の心理的適応と文化変容方略の関連.....	30
第5節 まとめ.....	32
第3章 二文化を越える志向性の探索——中国出身長期滞在者の面接調査から——.....	33
第1節 研究の背景と目的.....	33
第2節 方法.....	34
2.1 調査対象者.....	34
2.2 調査の手続き.....	35
第3節 結果.....	36
3.1 自称カテゴリーの選択結果とその理由.....	36
3.2 超越志向に関する解釈.....	39
3.3 二文化との関わり方.....	40
第4節 考察.....	44
4.1 超越志向に関して.....	44
4.2 二文化との関わりに関して.....	45
第5節 今後の課題.....	45
第4章 中国出身元留学生の文化的志向性.....	46
第1節 研究の背景と目的.....	46
第2節 方法.....	47
2.1 調査対象者.....	47
2.2 調査の手続き.....	48
第3節 結果.....	49
3.1 回答の概要.....	49
3.2 自称カテゴリーの選択理由と超越志向の解釈.....	52
3.3 二文化への志向性.....	54
3.4 自らが認識している二文化度と自称カテゴリーとの関係.....	55
第4節 考察.....	56
4.1 自称カテゴリーの選択と二文化との関わり.....	56
4.2 超越志向についての解釈.....	57
第5節 今後の課題.....	58
第5章 越境者文化意識と主観的ウェルビーイング——日本在住中国出身長期滞在者の場合——.....	59
第1節 研究の背景と目的.....	59
第2節 研究1——越境者文化意識尺度の開発と妥当性・信頼性の検証.....	60

2.1 研究の目的.....	60
2.2 越境者文化意識尺度原案の作成.....	60
2.3 方法.....	65
2.4 結果.....	67
2.5 考察.....	73
第3節 研究2——越境者文化意識と主観的ウェルビーイング.....	74
3.1 研究の目的.....	74
3.2 方法.....	75
3.3 結果.....	76
3.4 考察.....	83
第4節 総合考察と今後への展望.....	85
第6章 結論.....	88
6.1 本研究で得られた知見のまとめ.....	88
6.2 本研究の限界と今後の課題.....	90
引用文献.....	93
付表1 調査1の質問紙（日本語版）.....	100
付表2 調査4の質問紙（日本語版）.....	104

第1章 序論

1.1 本研究の社会背景

日本に居住する外国人はこの数十年間、年々増加してきた。日中国交正常化を起点に、特に中国の改革開放政策及びその後の市場経済政策が打ち出されたことで、より多くの中国人の来日が可能となった。在日中国人は、2007年に在日コリアンを超えて在日エスニックグループの最多集団となった。コロナ禍で新規入国ができなかったため、滞日中国人の人口は一時減少したにもかかわらず、永住者数は増加した（出入国在留管理庁、2024a）。新型コロナウイルスの水際対策が緩和されるとともに、2023年6月末の時点で日本における在留外国人数は320万人を超え、過去最多となった（出入国在留管理庁、2024a）。そのうち、中国国籍の人は79万人近くで、そのうちの32万以上が永住者である。4割を超える人が永住資格を持っていることから、中国出身者の滞在が長期化してきたことがわかる。

在日中国人の増加とともに、彼らを対象とした研究が進んできた。その中でも、エスニックビジネスなど経済面の研究、大学や日本語学校の留学生の問題と支援策といった留学生教育の研究、及び在日中国人のコミュニティ形成など社会学的研究が特に盛んである（例えば、葛，2007；張，2013）。また、在日中国人の一般的な分類に、第二次世界大戦以前に渡日した老華僑、日中国交正常化後以降の新華僑という見方がある。このように華僑社会の多様化が進んでいったため、新華僑や老華僑のアイデンティティの変容、エスニックアイデンティティの維持や再構築といった、心理学的な観点を含んだ研究もみられるようになってきた（例えば、過，1999；朱，2013）。しかし、中国から国境を越えて来日し、社会の様々な所で生活する多様な人々の異文化適応に関する心理学的研究の蓄積は、十分とは言えない。近年では、在日中国人の日本社会における心理的適応を測定した実証研究が出てきたが、その対象は留学生・研修生など日本に来たばかりの中国人が主流で（例えば、吉，2003；葛，2007）、長期滞在者の研究は乏しい。僅かな研究結果によると、在日中国人住民の精神的健康度（尾ノ井・早川，2003）と身体的健康度（厳他，1989）は、母国にいる中国人や日本人と比較して、良くないことがわかった。このような結果があるにもかかわらず、長期滞在者を対象とする異文化適応研究が少ないため、彼らの異文化適応の実態は未解明の部分が多いという現状にある。

1.2 本研究における中国出身長期滞在者の定義

中国文化を持つ海外滞在者には、様々な呼称が用いられる。基本的に「華僑」は外国に定住している中国国籍保持者、「華人」は居住国の国籍を有する中国ルーツの人を指している。行政用語で厳密に表現すれば、過（1999）は「在日華僑」を、永住など20種類の居住資格

や就労資格を持つ者としている。そして「在日中国人」を、中国籍を持って日本に在留する人をみな含み、在日華僑のほかに留学生や外交官も包含するカテゴリとした。2024年現在では在留資格の定めにより若干の変更があるが、上記をもとに考えるなら、社会生活上は「在〇〇国華僑」といえば当該国に生活基盤を持って長期滞在している中国籍の人、「在〇〇国中国人」はそれに学業や労働などのための短期滞在者も加えた総称といえる。後者に属する「中国人留学生」は、近年増加が著しい。留学生は一時的に外国に滞在し学業を修めてから帰国する人とみなされる点で、生活基盤を持って暮らす中国人である「華僑」とは区別される(過, 2002)。

一方、漢字圏以外の国々では、「華僑」や「華人」を区別する意識が薄く、「Chinese overseas」として、国籍を問わず中国にルーツを持つ中華系であれば、この括りに入れられている(例えば、de Saissy, 2009)。日本でも、時代の変化とともに、中国出身者自身に呼び方の変化がみられた。日中国交正常化後に来日した新華僑は、自分たちの学歴や専門知識の高さを理由として、戦前に来日した老華僑と区別しようとする傾向があるため、自らを「華僑」、「華人」と呼びながらも、「在日中国人」や「旅日華人」と自称している(譚・劉, 2008)。しかし、これらの呼称は厳密な行政上の定義とは異なる。さらに帰化後でも「中国人」だとの自称を続ける人もいる。そこで、彼らのアイデンティティを尊重した上で、「Chinese overseas」の発想にならない、日本国籍を得て帰化したかどうかを問わず、本稿では彼らを「中国出身長期滞在者」と統一して称する。したがって、本研究の対象は、日中国交正常化後に来日し、且つ長期にわたって日本で生活基盤を持ち、中国にルーツを持つ人ということになる。

1.3 異文化適応と文化変容方略

1.3.1 異文化適応

異文化環境へ移行すると、適応過程における様々なチャレンジに付随して心理的負荷が生じる。この負荷をアカルチュレーションストレス (acculturation stress) といい(Berry, 1970)、不確実感、不安、抑うつなどを招き、個人の健康とウェルビーイングを低下させる(Berry, 2019)。この観点からみれば、異文化間移動は精神的健康が低下しやすい状況だといえる。ただし、アカルチュレーション(文化変容)自体は否定的な現象とは限らず、「二つあるいは二つ以上のグループ及びそのメンバーとの接触によって、文化的及び心理的な変化が起きる過程」と定義される(Berry, 2019)。Ward & Kennedy (1996)はこの文化的及び心理的な変化を「社会文化的適応」と「心理的適応」に分けて捉えている。具体的に、「社会文化的適応」と呼ばれるものは、ホスト文化に馴染む能力、またはホスト文化と交渉する能力であり、「心理的適応」と呼ばれるものは、個人の満足感と幸福感を指す(Ward & Kennedy, 1996)。

心理的適応を測定する主な次元を、幸福と心理的苦痛 (de Lindert et al., 2022) とみた場合、幸福の面では幸福感や満足感などのポジティブな感情の存在、心理的苦痛の面では精神的

健康の問題や孤独感、ネガティブな感情の少なさが心理的適応に含まれる（例えば、Ward et al., 2010）。さらに移民における成功（immigrants' success）を測る主な指標として、経済的な成功と主観的ウェルビーイング（subjective well-being）の良好さを挙げた研究がある（Kushnirovich & Youngmann, 2017）。移民における成功の証左を加味する観点からは、心理的適応の中でも、ウェルビーイングを反映する幸福感などのポジティブな感情の肯定的な評価が必要である。

しかし、異文化環境に移動することによって心理的負荷が生じており、ホストメンバーと比較して移民たちのウェルビーイングはより低いとする結果がしばしばみられる（例えば、de Saissy, 2009）。国境線を越えた越境者たちにとって、主観的ウェルビーイングが重要であるにもかかわらず、長期間日本に住んでいる中国人に関する適応研究ではまだ注目されていないようである。よって、在日中国出身長期滞在者の異文化適応の初期的探究として、主観的ウェルビーイングを心理的適応の測定指標として用いることが妥当だと判断する。

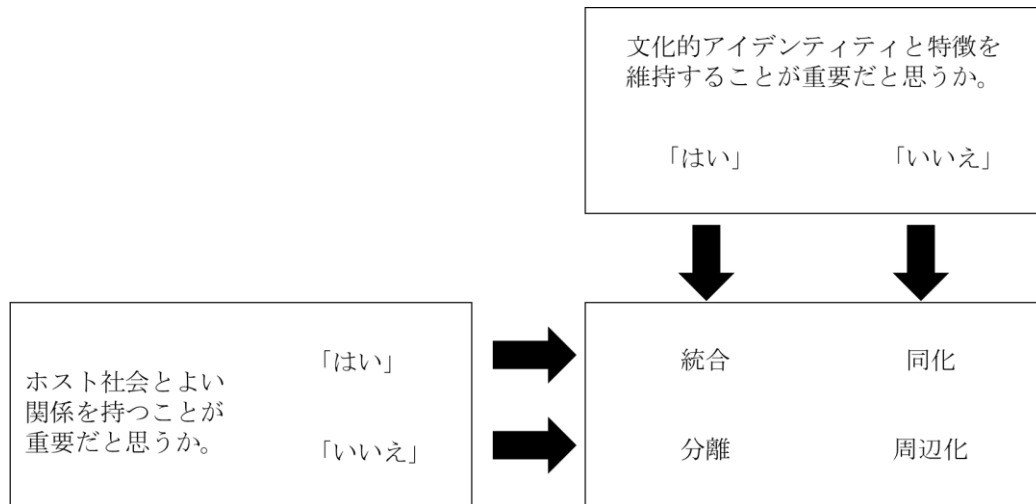
このように考えて、本研究では異文化環境での良好な心理的適応を「適応」と定義する。そして、新生活への満足や心理的安寧の維持に注目する意味で、異文化滞在者の心理的適応の測定としては、その良好さを示す指標として主観的ウェルビーイング尺度を用いる。

1.3.2 文化変容方略

海外の移民研究や異文化適応研究においては、文化変容方略（acculturation strategies）という概念がしばしば取り上げられている。文化変容方略は、人々がどのように文化変容（アカルチュレーション）していくかというその方略を指す言葉である。それはストレスや行動の変化、社会への適応に影響を与える重要な要因の一つと考えられている（Berry, 1992）。Berry et al. (1989) における文化変容方略の測定方法では、エスニック文化については「文化的アイデンティティと特徴を維持することが重要だと思うか」、ホストに対しては「ホスト社会とよい関係を持つことが重要だと思うか」と問われている。Berry et al. (1989) は「はい」と「いいえ」の答えを組み合わせる4つの文化変容方略、すなわち、ともに「はい」の「統合（integration）」、ホスト側のみ「はい」の「同化（assimilation）」、エスニック側のみ「はい」の「分離（separation）」、ともに「いいえ」の「周辺化（marginalization）」という類型を設けた（Figure 1.1）。

Figure 1.1

Berry et al. (1989) の概念図により作成



具体的には、Berry et al. (1989) の研究で、文化変容方略を判断するのに **Acculturation Attitude Scale** (Kim, 1984) が使われた。この質問紙では、友人関係、食の好み、子育て、結婚相手の選択、新聞購読、言語など、韓国・カナダ人が直面する問題を反映した 20 のトピックについて、「統合」、「同化」、「分離」、「周辺化」の各 4 つに該当する、合計 80 個の文章が、韓国語と英語で作成された。例えば、友人関係に関して、「韓国人とカナダ人の両方と親しい友人関係を築くことは貴重である」、「カナダ人の友人を持つことは大切だが、韓国人の友人を持つことは大切でない」、「親しい韓国人の友人を持つことは大切だが、カナダ人の友人を持つことは大切でない」、「最近、本当に共感できる人、自分の内面を共有できる人を見つけるのが難しい」が示された。それぞれの文章に対して、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の 5 段階で評価された。しかし、Rudmin (2003) はその測定方法に関して、例え両方の文化をマスターできていなくても、「韓国人とカナダ人の両方と親しい友人関係を築くことは貴重である」のような、統合の記述が魅力的だと考え、高く評価する可能性があることを弱点とした。つまり、「統合」のほうが社会的に望ましいと捉えて、回答を選ぶ可能性が否定できないという。

Ward & Kennedy (1994) は、Berry et al. (1989) の文化変容方略モデルをもとにしつつも、別の測定方法を使って **Acculturation Index** という尺度を開発した。この質問紙は、認知・行動に関する 21 項目 (例：食べ物、言語、世界観、社会習慣) から成る。具体的には、調査対象者の現在のライフスタイルについて、(1) あなたの経験や行動は、典型的なニュージー

ランド人とどれほど似ているか、及び (2) あなたの経験や行動は、あなたのオリジナル文化の典型的なメンバーとどれほど似ているか、と尋ね、評価してもらおう。回答から、「受入国民アイデンティティ (host national identification)」と「母国国民アイデンティティ (conational identification)」の2つのスコアを得て、研究者側で両文化の中央値を境に上下を分け、4 分類を設けるという手順である。

1.3.3 文化変容方略と異文化適応の関連

この文化変容方略モデルについては、異文化適応との関連を探った報告が多く、「統合」が最も適応が良好で、「周辺化」が最も適応が不良とした報告が目立つ (Berry, 1997 ; Berry et al., 2006)。例えば、心理的適応を抽出して文化変容方略との関連をみた研究では、「周辺化」よりも「統合」のほうが若者の自尊心スコアが高い例があった (Berry & Sabatier, 2010)。ウェルビーイングと文化変容方略の関連を論じる研究もある。カナダに移住した人を対象とした研究では、「統合」のウェルビーイングが最も高く、「周辺化」は有意に低いことがわかった (Berry & Hou, 2016)。

中国出身者に対する異文化適応の先行研究をみると、文化変容方略と心理的適応の関係は以下の通りである。

(1) 統合

「統合」が最も良い適応状態に繋がっていると、Berry (1997) の知見を支持する研究がみられる。de Saissy (2009) による、北アイルランドの中国系移民の調査では、「統合」においては、アカルチュレーションストレスが最小で、心理的ウェルビーイングが最も高いことが示された。

(2) 同化

オーストラリアの中国人留学生の主観的幸福感に対して、文化変容方略との関係が検討された。157名の中国人留学生から、「統合」の人たちは、「同化」、「分離」、「周辺化」の人たちよりも、有意に主観的ウェルビーイングが強かったとの報告があった (Zheng et al., 2004)。この結果は、Berry et al. (2006) でいう「同化」が「統合」と比べると中程度の適応であるとの結果を裏書きしている。

(3) 分離

オーストラリアにいる中国人留学生をみると、生活満足度や学業への適応という点で、「同化」よりも「分離」のほうが有利である可能性が示唆されている (Anderson & Guan, 2018)。しかし、海外で生活の基盤を持つ長期滞在者を対象とした場合には、「分離」が心理的適応上有利だとする報告は見当たらない。

(4) 周辺化

前出の北アイルランドの中国系移民の調査 (de Saissy, 2009) によると、「周辺化」は自己

効力感の低さと関連していることが確認された。しかし、Berry (1997) では、最も適応の悪い状態に繋がる文化変容方略は「周辺化」されたものの、場合によってそうとは限らない。在オーストラリアの中国人高度技術者においては、仕事の満足度は「分離」が最も低く、「周辺化」が中間に位置した (Lu et al., 2012)。職業人において、「周辺化」の適応は必ずしも最悪ではないことがわかる。

1.3.4 文化変容方略モデルの貢献と限界

Berry et al. (1989) の文化変容方略モデルは、文化変容の測定においては、ホスト文化にどれほど慣れてきているかを測定すると同時に、エスニック文化をどれほど維持しているかを測定する。言い換えれば、一方の文化が顕著な場合のみならず、両方とも顕著な場合や両方とも希薄な場合を想定できる。

一方、ホスト文化にどれほど同化しているかのみを測定する、一次元尺度を用いた測定方法もある。こうした一次元モデルでは、自文化とホスト文化のいずれかをとる二者択一を想定する。例えば心理臨床家に助けを求める状況を調べた研究では、アカルチュレーションレベルの高い人は、主流社会の心理的サービス機関に専門的な助言を求める願望が高かったとある (Zhang & Dixon, 2003; Liu et al., 1999)。このように、「アカルチュレーションの高い人」や「アカルチュレーションの低い人」という表現は、一次元尺度を用いる研究にみられる。このようにホスト文化の受容度のみを取り上げた一次元尺度による研究は多く (Gupta et al., 2013)、二次元の測定は推奨されながらも実際には少ない (Koneru et al., 2007) と言われる。二次元尺度がまだ普及しておらず、一次元でみる実態は海外だけではなく、日本でもみられた (例えば、箕口, 1996)。しかし、文化変容を文化的同化と同一視してしまうと、ステレオタイプを助長すると危惧する声がある (Gupta et al., 2013)。統合が注目される中で、同化はアカルチュレーションの唯一の形ではないとの見解 (Redfield et al., 1936) が裏書きされることも徐々に増えてきた。二次元モデルは、二文化への対応を別々に測定できることから、より立体的に把握できる点は利点といえる。この観点からみれば、Berry et al. (1989) の文化変容方略は異文化適応研究に貢献したのものとして評価できよう。

Berry et al. (1989) の文化変容方略は二次元尺度で文化変容を測定するため、同化主義からの脱却を図っている点で評価される一方、概念の再検討が必要だとの指摘もある。例えば「周辺化」について、Berry et al. (1989) のモデルでは単なる両文化への志向性が低いと定義されるに留まり、具体的にどのような状態かは説明されていないとの指摘がある (李・田中, 2010)。Leong & Chou (1994) は、アカルチュレーションを測定する Berry et al. (1989) 以外のモデル (例えば、Sue and Sue's model; Suinn-Lew's model; Cross's model) と比較し、「周辺化」という、ホストとエスニックの両文化ともに否定的な観点を設けたのは、Berry et al. (1989) のモデルのみだと述べている。また、韓国系とフィリピン系のアメリカ青年を

対象としたアカルチュレーションに関する調査では、「周辺化」はいずれのエスニックグループでも見出されなかった (Choi et al., 2018)。

Rudmin & Ahmadzadeh (2001) は、Berry et al. (1989) の文化変容方略モデルが世の中の文化を二つに限定しているため、多文化 (multicultural)、コスモポリタン、インターナショナル、グローバルという語で表される考え方には、「周辺化」という誤ったラベルが貼り付けられていると述べている。Rudmin & Ahmadzadeh (2001) の観点からみれば、「周辺化」の人は、単に母国もホスト社会も準拠集団になっていないだけで、二文化を越えた文化的志向性を持っている可能性のある人達でもある。したがって、「周辺化」の概念を含む文化変容方略モデル (Berry et al., 1989) 自体について、検討の余地が残されている。

1.3.5 二文化を越える志向性

日本に住んでいる中国出身者に関して、社会学の分野では、中国人や日本人といった国境を越えたアイデンティティについての議論がみられる。戦前にすでに来日した老華僑とその子孫たちのアイデンティティに関する研究では、若い世代の華僑華人ではアイデンティティの多様化が進み、国境を越えるアイデンティティがみられるようになってきたことは注目に値するとの指摘がある (過, 1999)。過 (1999) はこのような国境を越えるアイデンティティを「トランスナショナル・アイデンティティ (transnational identity)」と名付けた。しかし、二文化に依らないトランスナショナル・アイデンティティがあるという指摘に留まり、それが心理的にどのように機能しているかまでは言及されていない。また、日中国交正常化後に来日した新華僑たちが、同じようなトランスナショナル・アイデンティティを持っているかどうかにも言及がない。

日本で長期にわたって居住する、もう一つのエスニックグループ「在日コリアン」に関して、社会学の視点から生き方の多様性について議論が行われてきた (福岡, 1993)。そこでは、日本人や韓国人という既存のカテゴリから脱却しようとする傾向が見出されている。心理学領域でも、在日コリアンにおける「自由人」というアイデンティティのありようが確認され、このようなアイデンティティを有する人は、出身地や滞在地の文化への帰属を限定しない脱文化的な自己認識を持っており、日本人でも母国人でもなく自由人、個人などと自称していた (李・田中, 2010 ; Lee & Tanaka, 2017)。

さらに、オーストラリアで働く高度技術を持つ中国出身者を対象とした研究では、「周辺化」の立場を取っている人々から「第三の文化アイデンティティ」 (third cultural identity) がみられたという (Lu et al., 2012)。これは、中国人アイデンティティやオーストラリア人アイデンティティを越えたもの (beyond the Chinese identity and Australian identity) として定義されている (Lu et al., 2012)。また、この新しいアイデンティティは、適応に支障がない (which does not harm their adaptation) オーストラリアの職場に適しており、組織内の多数派グルー

プにも受け入れられやすいという (Lu et al., 2012)。

このような「トランスナショナル・アイデンティティ」、「自由人」、「第三の文化アイデンティティ」はエスニック文化とホスト文化を越えたもので、いずれも Berry et al. (1989) の文化変容方略では十分に説明できない。

1.3.6 二文化を越える志向性の適応上の意義

在日コリアン研究では、日本と韓国といった二文化の間でアイデンティティに関連する混乱を「葛藤」と呼び、ホスト社会で受けた差別は葛藤に有意な正の影響を及ぼし、葛藤は「自由人」スコアを有意に高めたという (Lee & Tanaka, 2017)。また、「自由人」は幸福感も抑うつとも相関がなかったが、葛藤は抑うつと有意な正の相関がみられた (Lee & Tanaka, 2017)。日本のようなホスト社会で生活する移民においては、二文化を越えた志向性「自由人」は、韓国人や日本人といった民族カテゴリから生じる葛藤を克服するための戦略として用いられる可能性が示唆されている (Lee & Tanaka, 2017)。

そして、「周辺化」は不健康・不適応に繋がると言われる傾向にある (例えば、Berry, 2007) が、オーストラリアで就労する中国出身高度人材において、「周辺化」の人たちの仕事の満足度は最下位ではなかった (Lu et al., 2012)。「周辺化」が最下位とならなかった理由としては、「周辺化」の人たちは「第三の文化アイデンティティ」を所持しているからであると Lu et al. (2012) は考察している。以上の在日コリアン研究も在豪中国人就労者の研究も、二文化を越える志向性の適応上に意義がある可能性を示しているに過ぎず、実証研究が求められる。

なお、「周辺化」の人たちが「第三の文化アイデンティティ」を所持しているとの推測は、Rudmin (2003) の文化変容方略への批判から得たものであるという (Lu et al., 2012)。Rudmin & Ahmadzadeh (2001) は、文化変容方略モデル (Berry et al., 1989) は世の中の文化を二つに限定しているため、多文化、コスモポリタン、インターナショナル、グローバルといった考え方には、「周辺化」というラベルを誤って付けたと指摘している。そのため、Lu et al. (2012) は、「周辺化」の人たちには「第三の文化アイデンティティ」があると解釈した可能性がある。

しかし、Rudmin & Ahmadzadeh (2001) の見解を読み解けば、インターナショナル、グローバルといった考え方は、ホスト文化とエスニック文化から独立した考え方になるはずである。言い換えれば、二文化を越える志向性は、「周辺化」のみではなく、「統合」、「同化」、「分離」、「周辺化」という4つの文化変容方略によらず、誰でも持てる志向性といえる。本稿は、「二文化を越える志向性」は文化変容方略と独立したものとみて、「周辺化」のみに存在するのではなく、全ての文化変容方略に存在するというスタンスを取る。

1.4 中国出身長期滞在者における異文化適応上の問題点

1.4.1 異文化適応において生じる問題の規定要因

日本に限らず世界中にいる中国出身長期滞在者が、異文化に適応する上で抱える問題点と規定要因について概観する。

(1) 滞在ステータスによる問題

1.3.3 節で記述した通り、好適応に繋がる文化変容方略に関する知見は調査地や調査対象によって異なり、一致していない。原因の一つは、対象者の滞在ステータスの多様性である。異文化滞在者は、滞在期間の観点から、短期的な留学・就労と長期的な移民を大別できる。これはホスト社会や同胞との間で、繋がりの有無に違いをもたらすと推測される。それが異文化適応にも影響することは十分に考えられる。

滞在国で生活の基盤を持つ中国出身長期滞在者を対象とした研究からは、「分離」が適応に有利であるという結果は見出されていない。だが、比較的短期滞在の留学生にとっては、「分離」が適応に有利な文化変容方略になるという報告がある (Anderson & Guan, 2018)。二つの文化と関わる人は、両方の基本的ルール、尊重すべき規範、教育機関の仕組み、普及しているテクノロジーの扱い方などを知らなければならないが、この学習には相当な時間を要する (Masgoret & Ward, 2006)。学習が不完全なうちは不自由や不都合が生じ、異文化ストレスが生じる。「分離」の文化変容方略をとって当該社会との接触を限定的にすれば、当座のストレスは軽減されるので、心理的適応上の利点が生まれる。この意味で留学生という期間限定の異文化滞在者には、「分離」が機能しやすい方略になる可能性を考えることができるだろう。

(2) 中国文化と滞在国の文化の類似性による問題

Berry et al. (1987) はカナダで、異なる文化背景を持つ複数のグループのアカルチュレーションストレスに関する研究を行った。オリジナル文化とカナダ文化との類似性が高いほど、行動的な変容が少なく、アカルチュレーションストレスも少なかったという。このことから、中国文化と滞在国の文化との類似性が低いほど、ホスト文化を受容することが難しいと予想される。

西洋の文化と中国の文化は類似性が低いため、アカルチュレーションストレスが増加し、統合するのが難しいと述べている研究がある (Anderson & Guan, 2018)。また、文化間の類似性が低いからこそ、オリジナル文化を維持しようとするのだと考察している研究もある。例えば、オーストラリアで生活している複数のエスニック集団を比較したところでは、ニュージーランド出身の移民より、中国系やベトナム系の移民のほうが、自分たちのオリジナル文化を維持する意志が強かったという (Nesdale & Mak, 2000)。

(3) ホスト社会の政策・態度による問題

移民自身の要因だけではなく、社会システム全般に関わる構造的要因 (例えば、歴史的な

人種差別など）も異文化適応に影響を与えている（Alegria et al., 2007）。ここでいうシステム全般に関わる構造的要因の一つに、次のように区分されるホスト社会の特質が考えられる。ホスト社会には、比較的「移民を歓迎する」移民社会（settler societies）と、相対的に「恵まれない人々への支援だと考えている」非移民社会（nonsettler societies）に区分される見方がある（Sam & Berry, 2010）。前者は、オーストラリア、カナダ、アメリカのような国、後者は、フランス、ドイツ、スウェーデン、イギリスといった国が例に挙げられる。さらに、Berry et al. (2006) も、「統合」は「非移民社会」より「移民社会」によくみられることを指摘した。日本社会は「移民」という言葉を使わず、日本に來ている外国人は、短期滞在で、専門技術を持つ人のみとの行政上の立場をとっている（Vogt, 2014）ことから、非移民社会に近いだろう。ホスト社会がとっている多文化共生政策は、文化的マイノリティがいかなる文化変容方略を選択するかに影響を与える（Berry, 2006; Kirmayer & Minas, 2000）。

1.4.2 日本における中国出身者の異文化適応上の問題点

日本では、在日中国人が最大のエスニックグループであるにもかかわらず、日本に居住する中国出身者の異文化適応に関する研究では、留学生や実習研修生を対象とする研究がほとんどであり、長期滞在者に焦点を当てた研究が少ない。

僅かな研究では、中国出身者の精神的健康が良好ではないことが示されている。その一つは、GHQ 総合得点に関して、在日中国人は中国にいる中国人や日本人より得点が高い、すなわち、より精神的健康状態が悪いというものである（尾ノ井・早川, 2003）。また、在日中国人住民の身体的健康度と精神的健康度を調べた研究では、これらの間に有意な正の相関がみられ、健康的な生活習慣の実施度は中年期で特に低く、日本人より健康状態が良くなかったという（厳他, 1989）。日本語能力及び日本人との関係性が移民のメンタルヘルスを向上させる効果があるとの報告もある（長松, 2022）。また、就労者においては、心の充足の側面からみた調査がある。職場では日本語表現の理解に困難を覚え、中国より対人的な距離感が遠いことに違和感を覚えていたり（ト, 2017）、任せられる仕事がポジションと一致せず、職業アイデンティティが損なわれたりしている（龔, 2018）。また、家庭文化が異なる国際結婚の夫婦において、中国人の妻は日本人の夫との教育方針が異なり、子どもも離れていき、うつ病と診断された事例もみられた（呉, 2014）。一方で、国際結婚における子育てが思考に良い変化や柔軟性を生み出し、個人の成長に繋がることを示された報告もある（一條, 2015）。

上記の通り、精神的健康の問題や抑うつなどの指標が低下するとの結果を用いて、心理的適応を評価する研究が中心である。異文化圏で長期的に暮らす人の心の次元をみつめ、ポジティブな側面に注目した研究は僅かである（例えば、一條, 2015）。

1.5 異文化環境におけるウェルビーイング

1.5.1 ウェルビーイング

異文化環境に移行することに伴い、個人の健康とウェルビーイングが低下するリスクが増えると言われる一方 (Berry, 2019)、主観的ウェルビーイングが、移民における成功を判断する重要な指標として挙げられた (Kushnirovich & Youngmann, 2017)。この節で、ウェルビーイングの定義と測定指標について詳述する。

ウェルビーイングとは、人間の幸せや健康を包括する適応を反映した概念であり (大竹, 2020)、主観的ウェルビーイングと心理的ウェルビーイングから成る (Keyes et al., 2002)。Diener et al. (2003) は、主観的ウェルビーイングを、日常のポジティブ感情の高さとネガティブ感情の低さ、一般的な人生満足度を融合させたものであると論じている。それに対して、心理的ウェルビーイングは、自己受容、積極的対人関係、自己成長、人生目的、環境制御、自律心という 6 つの次元から構成されると考えられている (Ryff & Singer, 2008)。

主観的ウェルビーイングの測定尺度として、Diener et al. (1985) は、人生満足尺度 (SWLS: Satisfaction with Life Scale) という 5 項目から成る尺度を開発した。この尺度は、ウェルビーイング研究の中で最も使用される尺度といわれている (堀毛, 2019)。日本では、WHO が開発した SUBI (Subjective Well-Being Inventory) を元に作成された「主観的幸福感尺度」(伊藤他, 2003) がよく使われている。心理的ウェルビーイングの測定尺度は、Ryff & Keyes (1995) の 18 項目尺度がよく用いられる (例えば、Chan et al., 2022)。本稿では、移民における成功を測定する指標として挙げられる主観的ウェルビーイングを異文化適応の状態を表す指標とみて、日本という社会文脈でよく使われる伊藤他 (2003) の「主観的幸福感尺度」を用いる。

1.5.2 中国出身長期滞在者のウェルビーイング

異文化適応研究の重要な一部を成す主題として、中国出身長期滞在者の心理的適応、特にポジティブな側面からみるウェルビーイングに関する日本で行われた研究の数は少なく、十分とは言えない。よって、この節では、他の国で行われた中国出身者のウェルビーイングの研究を概観した上で、日本で行った研究の課題を考えてみたい。なお、中国出身者のウェルビーイングと文化変容方略との関連は 1.3.3 節に記述してある。ここでは、Berry et al. (1989) の文化変容方略モデルに限定せず、ウェルビーイングとアカルチュレーションとの関連に言及した研究について整理する。

Chen et al. (2008) では、香港在住の中国大陸出身者とフィリピン人を比較して、二言語の能力と二文化のアイデンティティを共に持つことが、心理的に良好な状態の規定要因だと結論づけた。そして、カナダにいる中国系大学生を対象とした、文化変容に関するクラスター分析の結果をもとに、中国系大学生たちの文化変容の方略は 5 群に分けられたと報告

している (Chia & Costigan, 2006)。そこでは、「統合」は他の4群よりも、自尊感情が有意に高かった。また、中国文化やカナダ文化に強く帰属していないが多くの中国的行動を実践しており、中国的習慣を維持している「周辺化」の人々は、「統合」より自尊感情が低かった (Chia & Costigan, 2006)。また、ニューヨークで働く中国出身料理人の勤務地をチャイナタウンとチャイナタウン以外の地域で分け、彼らの文化変容と仕事の満足度について調べた研究がある (Au et al., 1998)。そこでは、チャイナタウン以外の地域で働く料理人はチャイナタウンで働く料理人よりもホスト文化を受け入れており、仕事に対する満足度も高いことが示されていた。ホスト文化の受容と仕事満足度が肯定的に関連することが示されたといえる。さらに、オーストラリアに移民する人の生活満足度は、最初の数年間において、宗教に代表される出身国の文化的背景とオーストラリアの文化との差に影響されることが示された。具体的には、キリスト教を信仰する国からの移民の生活満足度は、他の国からの移民よりも高い。この差はオーストラリアで20年以上滞在すると消えていく一方で、中国系及びキリスト教を主要な宗教としない出身国からの移民の生活満足度は依然として低水準にあった (Gatina, 2016)。中国大陸からの移民の長期的な幸福度が低いのは、英語力の低い移民の割合が高いためだと考察されている (Gatina, 2016)。日本とは異なるホスト社会での現象であり、且つウェルビーイングとアカルチュレーションを測る際に使用した尺度が様々であるため簡易に比較はできないが、ホスト文化を受容しているほうがウェルビーイングは良い状態にあるという傾向が読み取れる。

中国出身長期滞在者を対象とした、日本で行われたウェルビーイングに関する研究は僅かである。前節で紹介した通り、日本文化を受け入れることによって、日本での子育てを通して個人の成長と柔軟性が生み出されている事例の報告がある (一條, 2015)。なお、高い日本語能力及び日本人との良好な関係性が移民の良いメンタルヘルスと繋がるとされるならば (長松, 2022)、日本文化を受容しているほうが、ウェルビーイングがより良好といえるかもしれない。しかし、エスニック文化の維持はどのように個人に影響するのかは不明のままである。日本にいる中国出身長期滞在者に関して、彼らの文化変容方略 (Berry et al., 1989) とウェルビーイングとの関連は十分な証左が得られているとは言い難い。具体的に、在日中国出身長期滞在者のうち、先行研究の裏書となった、Berry et al. (1989) でいう「統合」の人々がより幸福を感じているのだろうか。そして、日本では、日本文化を受容するほうがウェルビーイングが良好なら、「統合」と「同化」の差が、エスニック文化の維持によって、出るのだろうか。さらに、両文化とも希薄な「周辺化」の人々は、日本での生活における幸福感が比較的に低いのかについての究明が待たれる。

1.6 本稿の目的と構成

本稿の目的は、日本で暮らす中国出身長期滞在者の異文化適応に関する探索的研究を行

うことである。日本に住む中国出身長期滞在者を対象とした異文化適応に関する先行研究が少ないことから、彼らの異文化適応の状況を様々な角度からみていきたい。これまでの議論を踏まえ、具体的な研究目的を3つ挙げる。

まず、中国出身長期滞在者の異文化適応について、文化変容方略モデルと異文化適応の関連から検討する。先行研究では「統合」が最も好適応で、「周辺化」が最も不適応だと言われているが、非移民社会である日本では、ホスト文化を受容することが異文化適応に有益かもしれない。だが、日本で暮らす中国出身者に関しては、4つの文化変容方略がいかに主観的ウェルビーイングと関連するかはきちんと調べられていない。したがって、1つ目の研究目的は、日本にいる中国出身長期滞在者における文化変容方略と主観的ウェルビーイングとの関連を確かめることである。

Berry et al. (1989) の文化変容方略モデルは、ホスト文化とエスニック文化という二元論の中での討論であった。しかし、在日コリアンでは、「自由人」(李・田中, 2010) という韓国人や日本人といったカテゴリを越える自己認識を見つけたが、文化変容方略モデルで捉えると、二文化を越える部分は見落とされることになる。さらに、Rudmin & Ahmadzadeh (2001) は、Berry et al. (1989) の文化変容方略モデルが世の中の文化を二つに限定しており、ホスト文化とエスニック文化以外のものは考えられていないと批判している。Rudmin & Ahmadzadeh (2001) の見解に沿って考えると、日本で暮らす中国出身長期滞在者が、二文化を越える文化的志向性を持っていると想定できるが、実際にあるかどうかについて、確認する必要がある。確認できた場合は、それはどのようなものなのかを調べる必要がある。よって、2つ目の研究目的を、日本にいる中国出身長期滞在者における二文化を越える文化的志向性及びその様相を探ることとする。

さらに、二文化を越える文化的志向が先行研究(例えば、Lee & Tanaka, 2017; Lu et al., 2012) では、適応にポジティブな機能を果たしているようだとする指摘が注目されている。例えば、在豪中国出身就労者に関しては、「周辺化」の人々の仕事満足度が最下位ではなく、その理由を「第三の文化的アイデンティティ」の陰だと推測している(Lu et al., 2012)。日本にいる中国出身長期滞在者においては、二文化を越える文化的志向が彼らの心理的適応に対して、どのように機能するかを探究する必要がある。よって、二文化を越える文化的志向性を獲得すれば、ウェルビーイングは高くなるのかを明らかにすることを3つ目の研究目的とする。Lee & Tanaka (2017) と Lu et al. (2012) は、二文化を越える志向性が、心理的適応の高さに繋がる可能性として提示したのみにとどまっているため、二文化を越える志向性の獲得が、異文化適応を改善する機能を有するのかを実証的な手法で探索したい。また、二文化を越える志向性が「周辺化」のみにみられる現象なのかを調査する必要がある。よって、二文化を越える文化的志向性を獲得すれば、ウェルビーイングは高くなるのか、そして、二文化を越える志向性と文化変容方略には関連があるのか、を明らかにすることを3つ目の

研究目的とする。

本稿の構成をFigure 1.2 に示す。第1章の序論では、研究の背景を示し、文化変容方略の貢献と限界、二文化を越える文化的志向、在日中国出身者の異文化適応上の問題点、主観的ウェルビーイングに着目する意義について論じた。

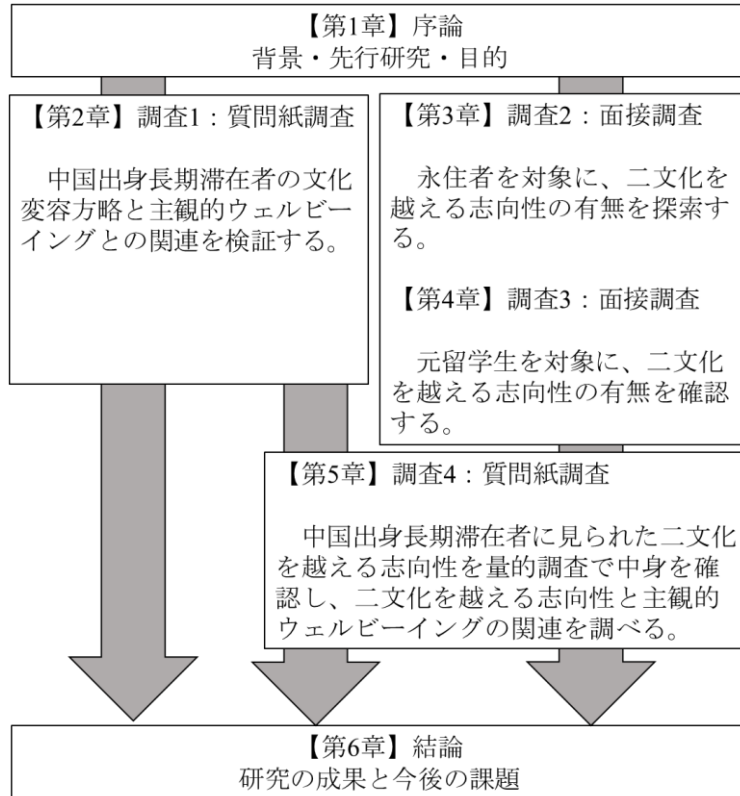
第2章では、日本で暮らす中国出身長期滞在者の文化変容方略と主観的ウェルビーイングの関連を明らかにする。具体的には、在日中国出身者において、文化変容方略が「統合」と「同化」の人は主観的ウェルビーイングが他よりも高いという仮説のもと、質問紙調査（調査1）を実施し、検証する。

第3章と第4章では半構造化面接を実施し、中国出身長期滞在者がBerry et al. (1989) の枠組みの外にある、二文化を越える文化的志向性を有しているかを明らかにする。具体的に、調査2では、永住資格を持ち、日本に長期滞在している中国出身者へ面接調査を行う。まず彼らの二文化を越える文化的志向性への見解を尋ねる。調査3では視点を換え、永住の予備軍と言われる高度外国人材となった元留学生を調査対象者とする。その理由は、日本政府が「高度専門職」という新しい在留資格を設置したように、留学生の日本就職は重要な課題として注目されており、今後元留学生の外国人材がますます増加すると予測されるからである。これから日本で長く暮らす彼らに、二文化を越える文化的志向性への見解を尋ねる必要があるだろう。

第5章では、二文化を越える志向性と文化変容方略との関連をみる上で、二文化を越える文化的志向性の適応上の意義を探究する。在日中国出身者において、二文化を越える文化的志向性を有する人の主観的ウェルビーイングが高いと仮説を立て、質問紙調査（調査4）の結果を検証する。それによって、二文化を越える文化的志向性を獲得すれば、主観的ウェルビーイングが高く、すなわち日本での心理的適応が良好であるのかを確認できる。

最終章である第6章では、本稿で得られた結果を総括する。各章で得られた知見を簡潔に振り返り、最後に本稿の限界と今後の課題を述べる。

Figure 1.2
研究の全体像 (1)



第2章 日本在住の中国出身長期滞在者の主観的ウェルビーイング——文化変容方略との関連——

第1節 研究の背景と目的

中国帰国者及びその家族を対象とした心理的適応において、ホスト文化への受容度が高いほうが、精神的に安定して適応が進むと述べられている（江畑他，1992）。しかし調査対象が中国帰国者及びその家族に限られており、より一般的な中国出身長期滞在者にも同じことがいえるかどうかは未詳である。中国出身長期滞在者が増加の一途にある現在、日本における異文化適応研究は、調査対象者を広げ、より多角的な視点からの研究が望まれる。

異文化間移動において文化変容が求められるとともに、精神的健康が低下しやすい（尾ノ井・早川，2003）状況になることから、今回の研究では、文化変容の視点から心理的健康を維持して異文化適応するために望ましい文化変容方略を検討する。日本で暮らす中国出身長期滞在者を対象とした質問紙調査の結果をもとに検証し、日本社会の適応における示唆を得るものとする。前章で述べたように、文化変容方略と異文化適応の関連に関する先行研究は、日本はまだ盛んでないが、諸外国の異文化適応研究で広く取り入れられている。よって、海外の先行研究と比較検討しながら考察したい。

本研究は、現在日本に住んでいる中国出身長期滞在者の文化変容方略と心理的適応の関連に焦点を当てた初期的研究に位置づけられる。また、移民における成功を測る主な指標として挙げられた主観的ウェルビーイング（Kushnirovich & Youngmann, 2017）を考えてみると、本研究では主観的ウェルビーイングを異文化適応の状態を測るための指標として注目する。文化変容方略はBerry et al. (1989) の概念モデルを用いて、ホスト文化及びエスニック文化の志向性の高低により、調査対象者を4つ分類（「分離」、「統合」、「同化」、「周辺化」）に分け、主観的ウェルビーイングとの関連を検証する。

心理的適応は「統合」が有利としてきた従来からの知見（例えば、Berry, 1997）は、日本社会の中国出身者に単純に裏書きされない可能性が考えられる。ホスト社会には、比較的「移民を歓迎する」移民社会と、相対的に「恵まれない人々への支援だと考えている」非移民社会がある（Sam & Berry, 2010）。日本社会では外国出身居住者に「移民」という言葉を使わず、日本で暮らしている外国出身の人は、一時的に日本に滞在し、且つ高度な技術を持つ人のみであると唱えている（Vogt, 2014）ため、後者に近いだろう。移民に対するホスト社会の態度は、どの文化変容方略が異文化適応に有利かに影響を与えるものと推測されるが、先行研究の多くは前者で行われてきている。なお「統合」は、「非移民社会」と比べて「移民社会」でのほうがよくみられるという（Berry et al., 2006）。もし「非移民社会」の日本では「統合」に至ることが難しく、その達成が不十分なうちは好適応の度合いが突出することも難しくなるなら、「統合」は必ずしも有利ではないかもしれない。在日外国人留学生や在日外国人

社員を対象とした先行研究（小泉，2021；郷司，2018）では、日本社会は同化圧力が強いことが指摘されていることも、その推測を後押しする。

社会環境を考えると、「統合」がより好ましい適応状態に繋がることや、「周辺化」が最も適応が悪いとの見解（例えば、Berry, 1997）は、日本では当てはまらないかもしれない。その代わりに、ホスト文化寄りの文化変容方略が社会との軋轢を減らし、心理的適応の良好さに繋がるとみれば、「統合」と「同化」は他より心理的適応が良好であることが予想される。在日コリアンの研究によると、日本人意識と抑うつ、韓国人意識と抑うつの間には有意な負の相関関係が示され、加えて韓国人意識と幸福の間では有意な正の相関関係が見いだされている（李・田中，2017）。またフィリピン出身の在日実習生の研究によると、日本文化を重視する程度が低いことは、メンタルヘルスを悪化させるリスクになり得るといふ（前田，2018）。これらの先行研究からは、日本社会ではホスト文化に馴染むことが重視されるであろうことが示唆される。エスニック文化が心理的適応と繋がるとの部分的な指摘はあるが（李・田中，2017）、母国文化や意識を保持することの適応上の意義はさほど目立たないと予想する。すなわち両文化を高く持つ「統合」が有利とは限らず、ホスト文化を色濃く持つかどうか、肯定的側面においても否定的側面においても、適応を分けるのではないか。

以上をもとに、本研究では文化変容方略と心理的適応の関連について、以下の仮説を検証する。

仮説1：日本で暮らす中国出身長期滞在者においては、「統合」及び「同化」の主観的ウェルビーイングが、「分離」及び「周辺化」より高い。

第2節 方法

2.1 調査対象者

滞日期間が3年以上の中国出身者を対象に、オンラインによる質問紙調査を行った。何年以上の滞在が長期滞在なのか厳密な定義は存在しないものの、本研究では、在留資格の滞在可能期間の行政面と留学生を対象とする異文化適応研究上でよく使われる滞在期間の区切りを参考に、3年間と設定した。ほとんどの在留資格には、5年、3年、1年、または6か月と4つの分類の在留期間が設定されている（出入国在留管理庁，2024b）。また、留学生の異文化適応に関する研究をみると、来日当初の数年間に変化が大きいとして特に注目されており、例えば1年未満、1-2年、2-3年、3年以上のように区切って比較する研究がある（例えば、田中，2000；Okunishi&Tanaka, 2011）。しかし、縦断研究となると2年間程度までとなる（例えば、中野他, 2017）。すなわち比較的短期の変化を中心に研究が蓄積されてきている。本研究は、留学生研究との違いを際立たせるため、滞在期間を3年以上と設定した。

質問紙への回答を依頼して 337 名の回答を得たが、本稿では研究が乏しい一般社会人に焦点を当てる意図から、留学生（30 名）・技能実習生（0 名）を省いた 307 名の回答を分析の対象とした。調査対象者の属性を Table 2.1 に示した。内訳は、男性 69 名（22.5%）、女性 237 名（77.2%）、他 1 名（0.3%）であった。年齢は 18 歳から 69 歳の範囲で平均年齢は 39.6 歳（ $SD=9.5$ ）であった。滞日年数は 17 名が「30 年以上」であったほかは、3 年以上から 30 年未満の範囲にあり、最多は「10 年以上 15 年未満」91 名（29.6%）で、日本国籍に帰化した人は 27 名（8.8%）であった。中国国籍の保持者 280 名（91.2%）においては、在留資格は 12 種類に及ぶが、多いほうから挙げると永住（149 名、53.2%）、技術・人文知識・国際業務（67 名、23.9%）、家族滞在（22 名、7.9%）の 3 種類で 85%を占める。他は日本人の配偶者、高度専門職、教授、技能、経営・管理、特定活動、永住者の配偶者等、定住、医療であった。属性に関しては上記以外に来日年齢、婚姻状況と配偶者の国籍、学歴、日本語レベルについて尋ねた。

Table 2.1

調査対象者の属性 (N=307)

性別		婚姻状況	
男性	22.5%	結婚していない	19.5%
女性	77.2%	結婚している	73.9%
その他	0.3%	その他	6.5%
年齢 (歳) : 平均値 (SD)	39.6 (9.5)	配偶者	
日本滞在期間		中国人	63.9%
3年以上～5年未満	5.9%	日本人	30.8%
5年以上～10年未満	20.8%	帰化華人	4.4%
10年以上～15年未満	29.6%	その他	0.9%
15年以上～20年未満	19.2%	最終学歴	
20年以上～30年未満	18.9%	小学校、中学校	2.3%
30年以上	5.5%	高等学校	7.2%
来日年齢 (歳) : 平均値 (SD)	25.1 (7.2)	専門学校・短大	16.0%
国籍		大学	34.5%
中国	91.2%	修士	34.2%
日本	8.8%	博士	5.9%
在留資格		日本語のレベル	
永住	53.2%	どのような場面でもまったく不自由はない	18.2%
技術・人文知識・国際業務	23.9%	どのような場面でもだいたい不自由はない	53.1%
家族滞在	7.9%	日常生活には不自由ない	27.7%
その他	15.0%	日常生活にも不自由がある	1.0%
		全く使えない	0%

2.2 質問紙の構成

2.2.1 文化的志向性

文化変容と心理的適応の関連を調べた研究では、居住地の安全性、人種差別や民族差別の程度などホスト社会の文脈要素が大きく影響するとされる (Alegria et al., 2007)。そこで文化変容を測定するための文化的志向性の評価には、対象となるエスニックグループが持っている文化的ユニークさを反映した尺度が求められる (Kim & Alamilla, 2017)。だが日本では米国のような、エスニックグループの特徴に特化した尺度、例えば、東アジア系向けの尺度 East Asian Acculturation Measure (EAAM) (Barry, 2001)、ラテン系向けの尺度 Bidimensional Acculturation Scale (BAS) (Marin & Gamba, 1996) などの尺度は、まだ開発されていない。

本研究では、日本社会の文脈的要素を含む尺度として、先行した在日コリアンの文化変容方略研究における文化的志向性の尺度 (Lee & Tanaka, 2019) を適用し、ホストとエスニックに関して各 13 項目で測定することとした。

この尺度は、Ward & Kennedy (1994) の Acculturation Index を発展したものである。具体的に、ホスト文化を受容する尺度とエスニック文化を維持する尺度を測定する項目について、どの程度普段実践しているかを答えてもらう。その後、研究者側で両文化の平均値で上下を分け 4 分類にする。なお、在日コリアン研究 (Lee & Tanaka, 2019) での α 係数は、ホスト志向 $\alpha=.78$ 、エスニック志向 $\alpha=.70$ で、ある程度高い信頼性を備えていた。

今回の尺度の適用に際しては、中国出身長期滞在者に合わせて、「韓国の祝日や記念日を祝っている」を「中国の祝日や記念日を祝っている」にするなど、表現を調整した。ほか「日本人との集まりに、積極的に参加している」、「中国風の生活習慣を守って暮らしている」などがある。教示文を「日本におけるあなたの日常生活について、お尋ねします。答えの中から、最も近いものを 1 つだけ選んでください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、思った通りにお答えください。」とした。「まったく当てはまらない」から「とても当てはまる」までの 5 件法を用いた。これは数値が大きいほど当てはまることを意味する。

2.2.2 主観的ウェルビーイング

心理的適応に関しては、伊藤他 (2003) の 15 項目の「主観的幸福感尺度 (Subjective Well-being Scale)」を用いた。この尺度には「至福感」という下位領域を測定する項目として、「まわりの環境と一体化していて欠かせない一部である」や「人類という大きな家族の一員だと感じる」といった項目があり、異文化滞在外者における環境の影響を反映させやすいと考えられた。教示文を「以下は日本での日常生活における、あなたの幸福度についての質問です。答えの中から、最も近いものを 1 つだけ選んでください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、思った通りにお答えください。」とした。全ての質問に対して、4 件法で測定した。数値が大きいほど当てはまることを意味する。なお、選択肢の表現は質問によって異なる。例えば、「あなたは人生が面白いと思いますか」という問いには、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの 4 件法で、「過去と比較して、現在の生活は幸せか」という質問に対しては、「全く幸せでない」から「とても幸せ」で答えてもらった。

2.3 調査の手続き

2021 年 1~2 月に中国の「問巻星」社が提供しているサービスを用い、調査者の知人を通じて WeChat で URL を配布した。本研究の実施にあたり、データの厳重な管理や匿名性を守ることを約束した上で、参加・中断の自由について説明をした。研究と倫理的配慮の説明

を読んで協力を承諾した人から回答を得た。調査当時の筆者の所属大学で倫理審査を受けた（承認番号：グロウコム申第 2019-2）。

教示と回答の使用言語は、筆者と調査対象者の母語である中国語であった。質問紙は日本語で作成してから筆者が中国語に翻訳し、日本語専攻の中国人留学生 1 名と確認して中国語版の原案を作成した。その後、中日実務翻訳家の中国人 1 名と筆者が、中国語版から日本語版にさらに訳し、確認して表現を調整するという、バックトランスレーションの手続きを経て作成された。調査対象者には謝礼として人民元 30 元（約 500 円）を渡した。統計解析には SPSS（Ver. 28）を用いた。

第 3 節 結果

3.1 文化的志向性

天井効果が生じた「家では、他の料理より中国の食べ物をよく食べる」、「自分はやっぱり中国人だと感じる」、「中国人の親友がいる」、「中国語で不自由なく会話ができる」、「中国の国籍を守り続けるのは良いことだと思う」、「周囲の人に、自分は中国人だと伝えている」の 6 項目を分析から除外し、計 20 項目に対して最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。

固有値の減衰状況（4.18→2.88→1.49→1.19→1.06→0.96）からは 5 因子解とすることも可能であったが、4 因子目を構成する項目が 2 項目のみ、及び 5 因子目を構成する項目が 1 項目のみだったことから 3 因子解とし、再度因子分析を行った。その結果、どの因子にも負荷量が.40 に満たない項目があった。因子分析を繰り返し、負荷量が.40 に満たない 9 項目（「日本の祝日や記念日を祝っている」、「中国の祝日や記念日を祝っている」、「一人で外食をする時は、中華料理以外の様々な食事がしたい」、「日本人と付き合うときに、ありのままの自分でいられる」、「日本に住んでいるので、日本に帰化してもかまわないと思う」、「家では、日本の一般の家庭と同じように和食、洋食、中華を食べる」、「在日中国人が日本人と結婚するのは望ましい」、「日本のテレビや新聞・雑誌を通じて、日本の政治や社会のことをよく知っている」、「日本人の親友がいる」）を削除した。そこで得た第 3 因子が 2 項目しかなかったため、因子数を 2 に固定した。「日本人との集まりに、積極的に参加している」、「中国人の集まりに、積極的に参加している」は、どの因子にも負荷量が.40 に満たないため、削除した。もう一度、2 因子に固定して因子分析を行った。最終的な各項目の因子負荷量を Table 2.2 に示す。

Table 2.2

文化的志向性の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転， $N=307$ ）

	F1	F2	共通性
エスニック志向 ($\alpha = .71$)			
中国風の生活習慣を守って暮らしている	.71	-.08	.52
中国人と付き合いときに、ありのままの自分でいられる	.69	.05	.48
在日中国人は中国人との結婚が望ましいと思う	.60	.00	.36
一人で外食する時は、中華料理を食べたい	.49	.00	.24
テレビ・インターネットや中国人からの情報で、中国の政治や社会のことをよく知っている	.42	.13	.18
ホスト志向 ($\alpha = .73$)			
周りから見れば、私は日本人と区別が付かないと思う	-.02	.79	.63
自分は日本人とほとんど変わらないと感じる	-.09	.69	.49
日本の生活習慣に馴染んで暮らしている	.07	.55	.31
読み書きも含めて日本語を不自由なく使える	.12	.52	.28
累計説明率 (%)	19.59	38.72	
$\chi^2(19) = 40.09 (p = .003)$			
因子間相関		-.06	

第1因子は5項目で構成され、オリジナル文化である中国の習慣を保持したり、同胞との結婚を大事に思ったりする意識から成る。そのため、「エスニック志向」と命名した。第2因子は4項目で構成され、ホスト国である日本で身についた慣習やスキル、日本人との差がないとの認識から成る。そのため、「ホスト志向」と命名した。

いずれの下位尺度においても信頼性係数に問題がなかったことから、下位尺度ごとに平均点を算出して分析に用いた（エスニック志向 $M=3.60, SD=0.68$ ；ホスト志向 $M=3.25, SD=0.75$ ）

3.2 文化変容方略

Ward & Kennedy (1994) にならい、ホスト志向とエスニック志向のスコアを用いて、文化変容方略の4分類に分けた。具体的に、二文化の志向性の平均値（エスニック志向 $M=3.60$ ；ホスト志向 $M=3.25$ ）でそれぞれ高群と低群に分け、文化変容方略（Berry et al., 1989）の4分類へ調査対象者を割り当てた。エスニック志向及びホスト志向両方とも高い「統合」に当

てはまる人数は 61 人 (19.9%) で、両方のスコアとも低い「周辺化」に分類されたのは 89 人 (29.0%) であった。エスニック志向が高くホスト志向が低い「分離」は 77 人 (25.1%) であり、一方ホスト志向が高くエスニック志向が低い「同化」は 80 人 (26.1%) であった。

3.3 主観的ウェルビーイング

15 項目に対して最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況 (5.84→1.32→1.21→1.02→0.93) からは 4 因子解とすることも可能であったが、4 因子目を構成する項目が 2 項目のみだったことから 3 因子解とし、再度因子分析を行った。その結果、3 因子目を構成する項目が 2 項目のみだったことから 2 因子解とし、もう一度因子分析を行った。その後、どの因子にも負荷量が.40 に満たない項目として、「ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか」、「将来のことが心配ですか」、「自分がまわりの環境と一体化していて、欠かせない一部であるという所属感を感じるがありますか」という 3 項目を削除した。

最終的に 2 因子構造と解釈された。第 1 因子は 9 項目で、至福感、充実感、自信、人生に対する前向きな気持ちや、失望感の無さから成る。幸せで満たされた感覚があることから、「幸福実感」と命名した。第 2 因子は 3 項目で構成され、目標到達、成功や出世、生活水準や社会的地位の度合いを意味する。到達地点に至った自覚や手応えを持っていることから、「達成実感」と命名した。各項目の因子負荷量を Table 2.3 に示す。なお、「幸福実感」の平均値は 3.06、標準偏差は 0.45 となり、「達成実感」の平均値は 2.54、標準偏差は 0.59 であった。

Table 2.3

主観的ウェルビーイングの因子分析結果（最尤法，プロマックス回転， $N=307$ ）

	F1	F2	共通性
幸福実感 ($\alpha = .84$)			
過去と比較して、現在の生活は（幸せ）	.76	-.02	.57
自分の人生には意味がないと感じていますか	.73	-.09	.46
あなたは人生が面白いと思いますか	.72	-.06	.47
ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか	.68	.06	.51
自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか	.63	.05	.44
非常に強い幸福感を感じる時間がありますか	.61	.06	.42
今の調子でやっていけば、これから起きることにでも対応できる自信がありますか	.44	.15	.30
危機的な状況（人生を狂わせるようなこと）に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか	.43	.08	.23
自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じることはありますか	.40	.09	.21
達成実感 ($\alpha = .80$)			
これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか	-.11	.95	.79
期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか	.08	.68	.54
自分がやろうとしたことはやりとげていますか	.20	.55	.46
累計説明率 (%)	36.99	45.10	
$\chi^2(43) = 311.24 (p < .001)$			
因子間相関		.58	

3.4 下位尺度間の相関分析

心理的適応と有意な相関を示したのは、ホスト志向であった。ホスト志向は幸福実感 ($r = .27, p < .01$) 及び達成実感 ($r = .26, p < .01$) と有意な正の相関を示した。エスニック志向

は心理的適応と有意な相関関係を示さなかった。なお幸福実感と達成実感の間には有意な正の相関が示された ($r = .55, p < .01$)。各下位尺度の記述統計量と相関係数を Table 2.4 に示す。

Table 2.4

文化的志向性と主観的ウェルビーイングの下位尺度の記述統計量と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3
1 エスニック志向	3.60	0.68			
2 ホスト志向	3.25	0.75	-.01		
3 幸福実感	3.06	0.45	-.01	.27**	
4 達成実感	2.54	0.59	.03	.26**	.55**

** $p < .01$

3.5 文化変容方略の4分類における心理的適応

文化変容方略の4分類を独立変数とし、主観的ウェルビーイングを従属変数として、一元配置分散分析を行った。その結果、いずれの主効果も有意となった(幸福実感, $F(3, 303) = 6.00, p < .001$; 達成実感, $F(3, 303) = 8.92, p < .001$)。続いて多重比較(Bonferroni法)を実施したところ、幸福実感については、「統合」と「同化」が「分離」より有意に高かった(Figure 2.1)。そして、達成実感については、「統合」と「同化」が、「分離」と「周辺化」より有意に高かった(Figure 2.2)。

Figure 2.1

幸福実感の群間比較

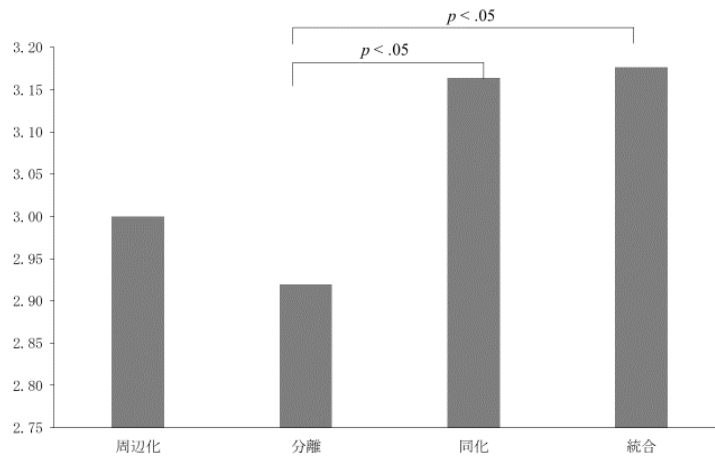
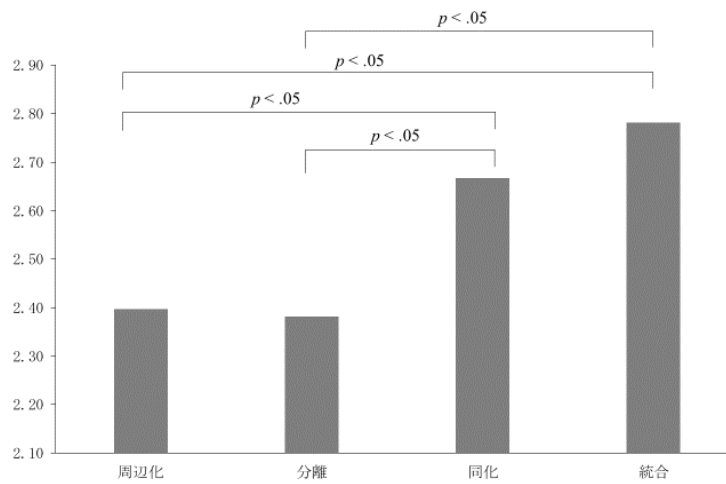


Figure 2.2

達成実感の群間比較



第4節 考察

4.1 中国出身長期滞在者の文化的志向性

文化変容方略を判断するもとなる文化的志向性については、2因子が確認され、測定に用いられる構成項目が明らかになった。エスニック志向に関しては、生活習慣の維持、結婚

相手、エスニック食、母国の社会知識などが挙げられた。ホスト志向に関しては、自分も周りからも違和感なく日本に馴染んでいることや、生活習慣の取り入れ、日本語力があることなどが挙げられた。両文化の評価項目の数は均一ではなかったが、それぞれの文化に関して重視される観点が異なっていることがわかる。

また、人付き合いに関する項目が、因子分析の結果には採択されなかった。これは、ホスト国の人と仲良くなったり友達になったりすることは、異文化に適応することとは別のものであることを示唆している。Berry et al. (1989) で提案された文化変容方略を構築する二つの質問には「ホスト社会と良い関係を持つことが重要だと思うか」があった。しかし、本研究の文化変容方略尺度構成をみると、異文化に適応するということは、良好な人間関係よりも、それぞれの文化集団の生活習慣や社会の仕組みを知ること、さらに、それらに沿って実践し、違和感なく暮らすことといえよう。なお、今回の尺度によって日本に滞在する中国出身長期滞在者の文化的志向性を測定する方法と文化変容方略の4分類への分け方が示されたことは、後続研究に資するものと思われる。

4.2 中国出身長期滞在者の心理的適応と文化的志向性の関係

主観的ウェルビーイングと文化変容方略の二軸であるエスニック志向とホスト志向との相関関係をみたところでは、ホスト志向が高ければ、幸福実感と達成実感も高くなることがわかった。これは、ホスト社会の生活習慣や言語を身につけて、マジョリティの人々と違和感なく付き合うこと、日本社会に馴染んでいることが、幸福実感や達成実感を促進する可能性を示唆している。チャイナタウン以外の地域で働く中華料理人は、チャイナタウンで働く人よりもホスト文化を受け入れており、仕事に対する満足度も高い (Au et al., 1998) という結果と一致している。今回の研究では、ホスト志向を測定する項目には、日本の生活習慣に馴染んでいるかどうかや、日本語を不自由なく使えるかどうかを尋ねる項目が採択されており、これらの点でホスト志向の高さが主観的ウェルビーイングの高さに関わっていた。

一方、エスニック志向には心理的適応との有意な相関関係がみられなかった。これは、エスニックの生活習慣、食習慣の維持や、結婚相手を同胞に限定するといった、エスニック志向の堅持は、心理的適応との関わりが希薄である可能性を示唆する。Berry (1997) は、エスニックアイデンティティを保持すると適応が良好になると結論しているが、今回の結果はそれとは異なる。今回の調査対象者である日本で暮らす中国出身長期滞在者においては、彼らの主観的ウェルビーイングには、エスニック志向が重要な役割をはたしているとはいえない。

4.3 中国出身長期滞在者の心理的適応と文化変容方略の関連

上記はホストとエスニック志向をそれぞれにみた場合の傾向だが、二軸を組み合わせて

文化変容方略と心理的適応の関連をみた場合はどうか。幸福実感の評定は、「統合」・「同化」は「分離」より有意に高かったが、達成実感の評定は、「統合」・「同化」は「分離」・「周辺化」より有意に高かった。よって、仮説 1 の「日本で暮らす中国出身長期滞在者においては、『統合』、『同化』の主観的ウェルビーイングが、『分離』及び『周辺化』より高い、は部分的に支持された。達成実感では仮説が支持されたものの、幸福実感では「統合」・「同化」が「分離」より有意に高かったが、「周辺化」との有意差はみられなかった。幸福実感においては、両文化とも希薄より、エスニック文化に傾くほうが主観的ウェルビーイングの低さと関わっていた。

日本以外の外国に住んでいる華僑華人に対する心理的適応の先行研究をみると、「統合」の適応が最も良いとした Berry (1997) の知見を支持する一連の研究報告がある（例えば、Chia & Costigan, 2006 ; Chen et al., 2008）。こうした「統合」の有益さが目立つ結果は、いわゆる移民社会で得られている。一方、非移民社会では、文化変容方略を直接測定したのではないが、側面的な情報から異なる示唆が得られている。ドイツで暮らす、中国人を含む東アジア出身の留学生と東アジア系の移民二世の学生を対象にした調査がある（Shim et al., 2014）。その研究では、ホスト文化への接近を志向する留学生の抑うつ症状はより弱く、オリジナル文化の維持を志向する留学生の抑うつ症状はより強かった。さらに、日本で技能実習生として働いているフィリピン人に対する調査によると、日本の文化を重視する方略は、仕事の満足度と家庭の満足度にポジティブに関連するが、フィリピン文化を重視する方略は、仕事の満足度とネガティブな関連が示された（前田, 2018）。用いている尺度が異なるので一概には言えないが、ホスト社会の文脈によって、移住者にとって異文化適応に有利な文化変容方略が異なる可能性を考えることができる。

なお今回の研究結果は、海外の知見とは異なり、「周辺化」の人々の主観的ウェルビーイングが最も低かったのではないことも、注目に値する。幸福実感の評定においては、ホストの文化を拒絶したり、距離を置いたりする「分離」の場合、長期滞在者は幸福感を感じにくくなることが示唆された。ホスト文化とエスニック文化の両方が希薄な状態よりも、日本にいながらエスニック文化である中国文化へ執着するほうが、幸せを感じにくくなるということになる。ホスト文化が希薄なままエスニック文化に傾くと、幸福になりにくいという結果は、日本社会の文化的同化圧力や排他性を背景に解釈できるかもしれない。短期滞在者を対象とした研究（江・野島, 2012）では、同国人と繋がりを持ち、エスニック文化を保持することは、メンタルヘルスの安定にとって重要であり、異文化と接触する際に起こりうる混乱を防ぐことができるという見解がみられた。日本語学校の中国人就学生を対象とした調査では、日本社会や文化との接触を回避して、自国文化を中心にした態度を取る学生は、日中両文化を融合する学生と同程度にメンタルヘルスが良好だったという（江・野島, 2012）。しかし、日本に長期滞在する中国人を対象とした今回の研究では、日本の文化や習慣に馴染

んだほうが主観的ウェルビーイングは良かった。長期滞在者には学業を終了したら国に帰る留学生のような滞在期間の限定はないため、母国文化のみで、あるいは同胞との付き合いだけで暮らすことは難しいだろう。そのため長く住むに伴い、ホスト寄りの志向性の持つ意味合いが重くなったと推測される。

第5節 まとめ

本研究では、日本で長年就労ないしは生活する中国出身者における異文化適応の心理的解明の端緒として、異文化適応研究で広く用いられる文化変容方略について、日本の文脈に即した尺度で測定を行い、主観的ウェルビーイングとの関連を検討した。

心理的適応を文化変容方略4分類からみると、「統合がより有利」という Berry (1997) の見解は裏書きされなかった。本研究では、「統合」と並んで「同化」も幸福実感や達成実感からみた心理的適応が比較的良好であった。海外で多く検証されてきた、「統合」が有利との定説は、日本の最大エスニックグループでは支持されなかった。日本社会では、ホスト文化と馴染む関わり方ができるかどうかは心理的適応に重要であり、エスニック文化の維持は大きな違いをもたらさず、エスニック志向に傾くことが、むしろ主観的ウェルビーイングの低さに繋がっていた。エスニック文化の扱いや機能はホスト社会によると思われるが、今回の結果からは、ホスト文化の受容が好適応に繋がる肯定的な心理的機能を伴う可能性が考えられる。

ホスト文化寄りの文化変容方略が良好な心理的適応に繋がる可能性を示唆する結果は、ホスト文化の受容が必須であることを意味するものではない。翻ってホスト社会の課題を反映するものでもある。現実的には、文化受容が難しい場合や時間がかかる場合の対応を考えておく必要があるし、ホスト文化の受容を必ずしも要さない、多様性を高めた社会環境の構築についても考えていく必要がある。現時点での結果は、現在の社会を反映したものとして、我々が受け止めるべき現実の鏡のようなものといえるだろう。

この章では、日本に住んでいる中国出身長期滞在者の主観的ウェルビーイングと文化変容方略との関連が初歩的にわかってきたが、序章で言及した二文化を越えた文化的志向性の有無は依然として未知である。これからの研究では、日本で暮らす中国出身長期滞在者においては、二文化を越えた文化的志向性の有無を解明し、もしそのような文化的志向があれば、どのようなものなのかを探究する。最終的に、二文化を越えた文化的志向性の機能を探る。

第3章 二文化を越える志向性の探索——中国出身長期滞在者の面接調査から——

第1節 研究の背景と目的

2006年から永住許可に関するガイドラインが変更された。それはまで10年間日本に滞在することが永住資格の申請の大前提であったが、ガイドラインが変更された後に、滞在が10年未満の特例が許されてきた。このような方針の改定により、永住という在留資格を取得しやすくなった。それから19年経過した2024年現在、永住資格を保有する人口は84万人を超え、2006年当時の39万人より倍以上になった（出入国在留管理庁, 2024a）。中国人グループは2007年から在日外国人の最大集団となっている。さらに、永住資格を保有する人口は84万人中、中国籍の人が32.5万人近くを占めている。しかし、中国人グループの異文化適応調査に関しては、留学生を対象とした調査が中心であり、様々な滞在資格の中で、人口が最も多い永住者について、社会学的研究はあるものの、心理学的解明は比較的に明らかになっていない。

前章では日本で暮らす中国出身長期滞在者の文化変容方略と主観的ウェルビーイングの関連について検討したが、それはBerry et al. (1989) の文化変容方略の枠組み中での試みであった。一方、序章にも挙げたが、この文化変容方略は二文化に限定し、二文化以外のことを想定していない。だが、戦前から日本に住み続ける中国出身者、いわゆる老華僑の三世、四世には、トランスナショナル・アイデンティティがみられた（過, 1999）。しかし、このトランスナショナル・アイデンティティがどのように心理的適応に影響するのかは未詳である。したがって、日本には多くの中国国籍の永住者がいるが、彼らの二文化を越える志向性に関する研究は待たれる。先行研究が不足しており、日本にいる他のエスニックグループや他地域の研究を参考にする必要がある。

序章でも述べたが、Berry et al. (1989) の文化変容方略の限界を指摘する際に、多文化、コスモポリタン、インターナショナル、グローバルな態度には、「周辺化」という誤ったラベルが貼り付けられていると述べられた（Rudmin & Ahmadzadeh, 2001）。これらの二文化を越える志向性は、決して文化がない空虚な状態や疎外される状態ではないと考えられる。在日コリアンにおいては、日本人、韓国人という既存のカテゴリから脱出しようとする、「自由人」というアイデンティティが確認された（李・田中, 2010 ; Lee & Tanaka, 2017）。社会的な背景に起因してこのアイデンティティを持つ人は、自分のことを「日本人」、「韓国人」との呼称で限定されることを好まず、「自由人」、「個人」などと自分自身を捉えている。さらに、オーストラリアにいる中国出身高度技術者には「第三の文化アイデンティティ」が確認された。この「第三の文化アイデンティティ」は中国人アイデンティティやオーストラリア人アイデンティティを越えたものとされている（Lu et al., 2012）。具体的な中身は未詳だが、組織内のマジョリティグループに受け入れられやすいアイデンティティであるという（Lu

et al., 2012)。

老華僑にみられた「トランスナショナル・アイデンティティ」を含め、これらの二文化を越える志向性を本研究では「超越志向」と呼ぶ。まだ中国の改革開放政策以降で来日した新華僑では確認されていないため、概念自体の存在や解釈についての研究が必要となる。「超越志向」を「ホスト文化とエスニック文化を越える志向性」と定義するなら、「超越志向」の有無や様相を説明してもらう際に、ホスト文化の受容やエスニック文化の維持の言及は避けて通れないと予測される。したがって、本研究では日本に長年滞在する中国出身者の二文化を越える志向性「超越志向」の存在、加えて彼らの文化変容の実態を確認する。

本研究は新しい概念を探究するための研究であるため、面接調査という手法が適切であると判断した。「超越志向」の有無を確認する際に、調査対象者が自ら「超越志向」を持っていると述べる、あるいは、自分のことを「二文化を越えている」と述べる場合は、「超越志向」が確認できたとする。

口頭で尋ねる際に便宜上、文化変容方略の「分離」、「同化」、「統合」のそれぞれを、中国人、日本人、統合人と言い換える。「周辺化」に関しては、Berry らの早期の研究によれば、パイロット調査で示されたように、「周辺化」は誰にも選ばれなかったという (Berry, 1976 ; Berry, Kalin & Taylor, 1977)。「周辺化」が主観的に選ばれるカテゴリでないなら、「周辺化」を文化変容方略から除外することは妥当であろう。よって、文化変容方略の3分類に併せて「超越志向」を追加し、4カテゴリを想定する。「超越志向」は一般的な概念ではないため、先行研究 (李・田中, 2010 ; Rudmin & Ahmadzadeh, 2001) から「自由人」、「個人」、「地球人」、「国際人」、「宇宙人」の発想を得て、「超越志向」のイメージを具体化させる。「超越志向」に関する認識及び能動的な選択があるかについて、聞き取り調査を実施する。そして、「超越志向」の解釈を探索するため、ホスト文化の受容度とエスニック文化の維持度を尋ねる。

具体的なりサーチクエスチョンとして、以下の3点を挙げる。1) 日本における中国出身永住者たちは、自分自身を4カテゴリからどのように選択するか。2) 日本における中国出身永住者たちにおいて、超越志向が認められるか。3) 日本における中国出身永住者たちの、中国文化と日本文化への志向性はどのようなものか。

第2節 方法

2.1 調査対象者

調査対象者は、中部地方に在住する永住ビザまたは永住ビザと同様の長期滞在できるビザ (内訳、経営管理1名、高度専門職1名 ; 以下、永住者などと呼ぶ) を取得した中国人10名である。まず、縁故法で集められた10名の調査対象者に、本研究の趣旨の説明とプライバシー保護の確約をし、10名から協力依頼への承諾を得た。調査対象者の概要を Table 3.1 に示す。

Table 3.1

調査対象者の概要（永住者など 10 名）

記号	NO.1	NO.2	NO.3	NO.4	NO.5	NO.6	NO.7	NO.8	NO.9	NO.10
性別	女	女	女	女	女	女	男	男	女	男
年齢	46	34	36	38	42	39	50	42	40	43
滞日年数	28年	8年	14年	19年	24年	9年	26年	22年	16年	19年
在留資格	永住	永住	永住	永住	永住	永住	永住	永住	高度専門職	経営管理
職業	大学非常勤講師	語学学校講師	大学教員	自営業	自営業	パートタイム	自営業	自営業	大学教員	自営業
配偶者	日本人	日本人	中国人	独身	日本人	日本人	帰化華人	中国人	中国人	中国人
子どもの有無	1人	なし	2人	1人	3人	2人	3人	3人	2人	3人

2.2 調査の手続き

2019年9月から2020年3月に、1人あたり約1時間半の半構造化面接を実施した。面接は調査対象者と1対1で行った。倫理的配慮としては、データの厳重な管理や匿名性を守ることを約束した上で、調査対象者に参加・中断の自由について説明をした。調査時の筆者の所属大学で倫理審査を受けた（承認番号：グロウコム申第2018-3）。

その後、文化変容方略に関する Berry et al. (1989) の2つの質問項目「文化的アイデンティティと特徴を維持することが重要だと思うか」、「ホスト社会と良い関係を持つことが重要だと思うか」を示し、その答えを聞いてから「統合」について説明した。続いて、その答えの背景をさらに詳しく知るために、以下の質問をした。

1) 日本人とはどのような場面でどれくらい付き合っているか、付き合い方が中国人と付き合う時と同じか、2) 中国文化の維持や継承の意志があるか、3) 自らが認識している中国人らしさと日本人らしさはどのように日常生活に反映されているか、4) 「統合」について説明した上で、自分は「統合人」だと思うか、なぜそう思うか、5) 超越志向について説明し

た上で、自分のことを「自由人」、「個人」、「地球人」、「国際人」、「宇宙人」などと捉えたいか、6)「中国人」、「日本人」、「統合人」、「地球人等」の4つのうち最も自分にふさわしいものはどれか、4つの選択肢から1つ選んでもらった。そして自分が該当すると思うものとその理由を尋ねた。

上記の質問項目を設けるそれぞれの理由は、1) 文化変容方略の概念モデル (Berry et al., 1989) では、ホストメンバーと付き合うことが大事かどうかに関して、「はい」か「いいえ」で答えてもらうだけで、実際にどういうレベルで付き合うか、付き合い方に対して、どのような工夫があるかまで言及されていないからである。また、滞在国にいる同胞との交友についても言及されていないため、上記の質問項目を追加した。この項目は、李・田中 (2010) の在日コリアン研究で使われた質問項目を在日中国人にアレンジしたものである。2) 在日コリアンは、母文化の継承とホスト文化の受容という二重の課題を抱える (李・佐野, 2009) との指摘をもとに、中国出身長期滞在者にも尋ねた。3) 中国文化及び日本文化との関わりを測定するため、中国人意識と日本人意識の表出の仕方を尋ねた。4) Berry et al. (1989) の文化変容方略の概念モデルに基づき、日本にいる中国出身長期滞在者は二文化を統合する状態に到達しているかどうかを尋ねた。5) 在日コリアンの研究における「自由人」の概念 (李・田中, 2010 ; Lee & Tanaka, 2017)、及び老華僑の研究から「トランスナショナル・アイデンティティ」の概念 (過, 1999) を参考にし、日中国交正常化後に来日した中国出身長期滞在者において、ホスト文化及びエスニック文化を越える文化的志向性、「超越志向」という概念があるかどうかを聞いた。6) 問3で中国人意識や日本人意識について、問4で統合人について、問5で超越志向への志向性を尋ねた後、4つの選択肢の中で1つを選ぶなら、どれを選ぶかを尋ねることで、文化的志向性を探求する。本稿では、自ら選んだ自分を描写するカテゴリを「自称カテゴリ」と呼ぶ。

これらの質問は、答えを詳しく聞くために補足的な質問を適宜加えていくという、半構造化面接で尋ねた。使用言語は中国語及び日本語であった。語りはICレコーダーに録音し、逐語録を作成して分析に用いた。上記の6つの質問項目に関する語りを抜き出して、回答を整理し、適宜引用しながら解釈を試みた。

第3節 結果

3.1 自称カテゴリの選択結果とその理由

リサーチクエスションの1つ目に関しては「自称カテゴリ」として、統合人、中国人、日本人、超越志向の中から選ばせた。回答として、中国人を選択した人が7名で、統合人が2名、超越志向が (具体的には、地球人) 1名、日本人は選択されていなかった。なお、問3と問4以外の概要を Table 3.2 に示す。

Table 3.2

永住者など 10 名による答えの概要

	NO. 1	NO. 2	NO. 3	NO. 4	NO. 5	NO. 6	NO. 7	NO. 8	NO. 9	NO. 10
日本人とはどれくらい付き合い合っているか。	中国人の友人が多い。	仕事の関係で中国人友人が多い。	日本人の友人が多い。	日本人の友人が多い。	中国人とあまりつきあいたくない。	同僚やママ友の日本人友人がいる。	基本的に中国人と付き合い合う。	日本人の友人が多い。	同胞より、日本人を含む外国人からたくさんのサポートをもらった。	日本人の友人が 5、6 人いる。
日本人との付き合い方は中国人との付き合い方と同じか	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる	異なる
中国文化を維持したいか	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい
中国文化を子どもに教えたいか	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい
地球人などに対する願望	いいえ	いいえ	地球人	いいえ	いいえ	国際人	いいえ	どうでも良い	地球人	いいえ
自称カテゴリ	統合人	統合人	中国人	中国人	中国人	中国人	中国人	中国人	地球人	中国人

3.1.1 中国人を選んだ理由

自称カテゴリーの選択理由を聞いたところで、中国人を選ぶ人たちは、血統を重視する、子どもの頃の生活環境や中国で受けた教育を重視する、また 「『根』が中国にある」と述べていた。

(中国) パスポートなので、(海外へ行く時に) ビザを取るのはちょっと面倒だけど、(日本に住む限り) 永住権を取ればいいや、という感じ。日本国籍を取りたくないのは、たぶん、今でも骨の髄までそう (中国人だと) 思っているからだと思う。どんなに日本にいるのが好きでも、どんなに長く住んでいても、自分は中国人だと思う。(No. 3)

私は 100 パーセント、純粋な中国人だと思う。人からどう思われようと、私の振る舞いや日本語能力、あるいは見た目も含めて、もともと中国でも日本人に似ていると言われることもあるが、私の内面の状態、精神状態は、100 パーセント中国人。(No. 4)

来世があるとしたら、また中国人になりたい。中国の情緒というか、うまく言えないけど、中国人として生まれるのが本当に良いことだと思う。時には、中国人に対して賛同できない部分があるけど、基本的に良いと思う。(No. 5)

生まれも育ちも中国だったため、中国的な側面は今でもかなり強く、中国への愛着はかなり深いと思う。(No. 6)

3.1.2 統合人を選んだ理由

統合人を選んだ 2 人は日本で長年滞在することを大事にしており、日中文化と上手く協調する能力を評価していた。

自分のことを中国人だと言いたかったが、やはり統合人のほうがもっとふさわしい。統合人はただ中国文化と日本文化両方マスターするだけではなく、統合人は複数の文化と協調する能力、そして複数の文化の間でバランスを取ることができる。もし、みんながこのような協調する能力を備えるなら、世の中が上手くいく。(No. 1)

もし、ずっと中国で暮らすなら、余儀なく中国人を選ぶ。しかし、中国生まれだけど、中国育ちだけど、今まで長年日本で暮らしてきて、家族にも日本人がいるし、だから 100 パーセントの中国人だと言えない。(No. 2)

統合に関しては、上記に挙げた No. 1 と No. 2 の理由以外の理解は以下のようなものがあ

った。

中国文化に対して誇りを持って、さらにはそれを広げていきたい、伝えていきたいという気持ちがある。一方、私は日本社会で生活しているので、日本の文化を理解し、社会のルールに合わせなければと思っている。日本人の友達を作ることに積極的。
(No. 3)

統合人のことは考えたことがないが、ポジティブな言葉だと思うし、だいたい日本に長く住んでいる人はその能力を持っていると思う。(No. 5)

また、統合人になる条件も述べられた。

日本語を勉強してからの来日だったので、比較的日本文化に詳しいと感じているから、異文化ストレスを感じなかった。(No. 6)

国を出る時の年齢と関係するよね。若い人は柔軟性あって、新しい物事を受け入れやすい、包容力がある。国を出る年齢が早いほど、統合人になりやすい。(No. 1)

来日期間、来日年齢、日本語能力などが統合人になる条件として挙げられ、これらの条件から見れば、願望だけではなく、実際に一定の素質や能力を揃わないと、統合人になれないことがわかるだろう。

3.1.3 超越志向を選んだ理由

超越志向を選んだ人は二文化に制約されたがらず、普段から積極的に地球人を使って問題を解決する。

(仕事や日常生活では、日本人に、日本の) 伝統的な考え方でみられたことがあり、要求されることがある。このような状況がある場合、私は冗談で「私は地球人だ、私は国際人だ」という。このような呼称で気まずいことを解決する。私はこのような呼び方が好き。時々、国籍が異なることで喧嘩の元になる。それなら、事前にリスクを避ければ良いと思う。(No. 9)

3.2 超越志向に関する解釈

超越志向を自称カテゴリとして選んだ No.9 以外に、この概念に賛同する人もいた (No.3、

No.6)。

私たちは皆地球上の一員であるという共通性を強調している。私が地球から来たことは、私が中国人から来た人、あるいは私が〇〇省から来た人と同じような感覚がする。

(中略) みんなが実は地球上の人だ。(No. 3)

私は自分のことを国際人だと呼びたい。日本人でもない、中国人でもない、この考え方はとても良いと思う。(中略) (国際人であれば)、将来子供たちがアイデンティティを形成する際に、特に心配しなくても済むから。(No. 6)

一方、超越志向に関しては、消極的な態度も示された。

そういう考え方を持っている人は、心理的に帰属感がないことに違いない。帰属感がはっきりしている人はそうは思わないだろう。帰属感がある人は普通自由であることを強調しないと思う。だからそういう考え方を持つ彼らは実は孤独を感じている。どうせどこの文化にも「根」がないから、いっそ自由になったほうが良いという考え方だろう。

(No.1)

3.3 二文化との関わり方

調査対象者に尋ねた問1「日本人とはどのような場面でどれくらい付き合っているか、付き合い方が中国人と付き合う時と同じか」、問2「中国文化の維持や継承の意思があるか」、問3「自らが認識している中国人らしさと日本人らしさはどのように日常生活に反映されているか」に関しては回答の中では交差する部分があるため、まとめて報告する。

3.3.1 エスニック文化の維持とホスト文化の学習

10名全員が中国文化や社会に対して、賛同できる部分と賛同できない部分があった。日本の文化や社会に対しても同様である。実際に二文化に対して、どのような行動を取っているかという点、中国の文化、中国風の暮らし方に対しては「維持している」と全員が述べている。さらに、中国文化は「維持する」ものではなく、「変えられないもの」と強調する人もいた。

長年ここにいるので、日本の習慣もだいぶ身についたと思う。しかし、やはり私たちは中国人だから、伝統はやはり中国のほうが多いね。やはり習慣を変えるのは難しいね。

(No. 7)

日本で生活しても、習慣や好きなものがすでにあるわけだから、年を取ってから急に変わることはないでしょう。仮に明日から日本国籍になったとしても、中国料理を食べるのが好き、中国の本を読むのが好きかもしれない。こういうことは大きな変化がないでしょう。(No. 8)

しかし、このように中国風の暮らし方を維持しているにもかかわらず、中国に帰国する頻度が低いため、帰るたびに実際の中国との距離を感じることを言及した人もいた。

中国文化を外国文化とっていないけど、ちょっと遠い存在に感じている。長い間日本で暮らしていて、中国にあまり帰っていないので、ちょっと距離を感じてしまうよね。(No. 2)

一方、日本の文化や社会的規範については異なるレベルでの習得が言及された。表情や身振り手振りなど、表層的なことを日本人のまねすることで、ホスト社会に排除されないという。

ずっとお辞儀をするとか、お辞儀しながらお部屋を出るとか。後は、首が傾くという仕草に対して、中国人の友人に日本人っぽいと言われたことがあるよ。(中略) こういうことができると、ホスト社会に溶け込みやすく分離されない。(No. 4)

また、滞日年数が長くなるにつれ、日本人の考え方を理解できるようになり、社会的なルールを身につけることができた。

滞在の年数が長くなって、やはり郷に入っては郷に従うことが大事だろう。例えば、家を出たら、礼儀やマナーを日本人っぽくする。(No. 2)

中国に帰った時や、訪日中国人観光客をみるたびに、(自分は)日本にかなり同化していると感じる。日本人は、他人に迷惑をかけることを恐れているのではないのでしょうか？ 中国人は外食して騒ぐことが多いけど、日本人は気を遣っている。この点に関しては、私はよく日本人らしく振る舞う気がする (No. 6)。

日本人の習慣について、半分以上慣れた。(中略) われわれは育ちの環境は中国だったので、やはり中国人の考え方が多い。しかし、日本人とよく接するので、多少日本人の言い方、考え方を理解できるようになった。時々彼らに習って仕事をする。(中略) こ

んなに長く日本に滞在しているので、慣れなくてもしょうがないよね。(No.7)

さらに、日本人の価値観など深層的なところまで習得できていると述べた。

日本に長くいることで、他人の気持ちを配慮しなければならないことに気づいた。例えば、休みを取りたい時に、他の人も同じ日に休みを取りたいかどうかを聞く。そして、自分の親に子守りをしてもらうのが中国では普通だけど、私は日本文化の影響で比較的自立ができる。人の立場に立って考える。(No. 2)

しかし、以上のように日本風のやり方や価値観を習得できているにも関わらず、日本人と異なる考え方を持つ時もある。ただ、最終的に日本風のやり方で実際に行動するという。

私は社会的規則に慣れるようにするけど、心の中では時々そんなに厳しく守る必要がないと思う。もちろんルールを守るが、例えば燃えるゴミを指定のビニール袋に入れるけど、心の中ではゴミステーションに入れば良いのに、別に指定されたビニール袋じゃなくても良いと思う。とりあえず、こういう考え方の違いがある。このホスト社会を尊重するので、ルールを理解するが、やはり心の中では、もっと柔軟性があってほしい。(No. 3)

また、行動が日本人に同化されても、考え方は中国人式のままである例もみられた。

例えば、最近新しいアパートを探しているけど、空いている物件だけど、なぜもう少し早く入居させてくれないの。私は、理解できると言葉で表した。それは、日本社会に対する敬意。実は、今でも心の中では、考え方をもう少し中国式で、もう少し柔軟にできないのか、と思っている。そうすると、会社側に多くの家賃が入っていいんじゃないか。(No. 3)

以上の例は仕事上、あるいは日本社会という大きな背景の下での日本人との接し方は日本風だといえよう。また、行動は日本風、考え方は中国のままであるという、考えた方と実際の行動とのずれもみられた。

3.3.2 領域による文化変容方略の使い分け

以上のように、仕事領域または社会規則に関しては、日中両文化の間で不一致が発生する場合は、中国人長期滞在者は日本風のやり方に従うことを好むことがわかった。ただ、全て

の領域で「同化」したわけではなく、二文化への志向性と行動についての質問に対しては、飲食領域において「分離」を選ぶケースがみられた (No. 3、No. 8)。

日本にどれだけ長く滞在しても、飲食の習慣、日本人が冷たいお水が好きということは、この十何年の間でも慣れなかったこと。やはり常温の、または温かいのが好き。(No. 3)

領域によって異なる文化変容方略を取ることは、日常生活だけで反映されているわけではなく、交友の領域でもみられた。相手によって、付き合い方が異なることを10人全員が述べていた。友達になるまでの時間、会う頻度、距離感、金銭の付き合いの有無、話し方、話題などの点で、違いがあるという。

中国人はもっとカジュアルで、何でも聞ける。そして、例えば夢や理想、国際関係などの質問についても話すことができる。日本の友人との話題がもっと狭い。(中略) 日本人に直接、どこに住んでいるかと聞いても、あまり快く答えてくれないかもしれない。(中略) 例え近所の人でも、お家に遊びに行くため事前にアポを取る必要がある。直接ドアをノックして入るというわけにはいかない。やはり中国人よりも距離感があるね。(No.1)

日本人と接する時は、より注意を払う必要がある。例えば、食事に行こうと思ったら、日本人とは事前に日にちを約束しなければならない。中国人の場合は、例えば、明日暇なら明日でも行けるよね。でも、日本人の場合は、例えば次に会うのはいつにしようとか、1~2ヵ月前に約束をしないといけない。(中略) 深い話や自分の観点などは、やはり中国人の友人と話したい。日本人の友人とあまり話さない。特に家族のこととか、プライベートのこととか、やはり中国人と友達と話すね。(No. 2)

日本人とはやはり建前を言わないとならないね。中国人の場合は、どちらかというところと正直に話すことが多いかもしれない。日本人の多くは、会社では、家族のこととかを話すだけ。(No. 6)

調査対象者の話から、日本人と付き合う時に「距離を感じる」、「気をつけないといけないことが多い」、「話題が限られている」などの発言があった。一方、中国人と付き合う時に、「本音を言える」、「気楽」、「金銭に伴う交流が多い」などのコメントが挙げられた。

日本人と会うのは年に2、3回で十分。日本人の友人はたくさんいるが、1週間に2回

も会うことはまずないね。中国人だと2週間から1ヶ月のようにスパンが短くなる。日本人と会うのは確かにスパンが長い。(中略)言語が違うので、人は第二言語が母国語を越えることはできないので、中国語を話すのは確かに一番リラックスできるね。考えなくてもいい。日本人と話す時は絶対に考えないといけない。(No. 4)

中国人と日本人、どちらの友達が多いとは言えないが、特に仲が良いのは中国人のほうが多い。困っている時に助けられるとしたら、中国人のほうが多いね。ただ、もっと一般的な、一緒に食事に行ったり、子どもを連れて遊びに行ったりということであれば、日本人のほうが多いね。(中略)日本人が自宅に食事に来ることはほとんどない。中国人はよく自宅に来る。中国人同士のほうが物質的な交流が多い。例えば、誰かが美味しいものを作っているとか、ソーセージや肉まんを作っているとか、電話して取りに来て呼ばれるの。そういうことを日本人はしない。(中略)子どもの幼稚園の友達と一緒に遊びに行った。向こうは子ども2人とお母さん、こっちは子ども3人と私たち夫婦。俺がみんなの分のアイスを買ったんだけど、向こうはすごく細かくお金を計算したよ。(No. 8)

要するに、日本人と付き合う時と中国人と付き合う時の仕方が異なること、また、日本人より同胞と付き合うことがより付き合いやすいことがわかった。しかし、自称カテゴリ選択との関係性はみられなかった。

第4節 考察

本研究では、日中国交正常化後に来日した中国出身長期滞在者に、二文化を越える「超越志向」という概念の存在を確認し、その解釈を探索した。

4.1 超越志向に関して

リサーチクエスションの1つ目「日本における中国出身永住者たちは、自分のことを4カテゴリからどのように選択するか」と2つ目「日本における中国出身永住者たちにおいて、超越志向が認められるか」に重複する部分があるため、併せて考察する。

今回の永住ビザ及び永住ビザと同様に長く滞在できる在留資格を保有する10名の中国人に聞いたところ、中国人を選んだのは7名、統合人を選んだのは2名、超越志向を選んだのは1名であった。超越志向という概念に賛同する人(No. 3、No. 6、No. 9)がみられ、自称カテゴリに選択する人(No. 9)がいたという意味では、超越志向の概念が日本に住んでいる中国出身長期滞在者においては存在するということが認められる。

自称カテゴリで超越志向を選んだ1名(No. 9)と、超越志向に関して歓迎的な態度を示

した2名 (No. 3, No. 6) は、地球人や国際人としてのアイデンティティを肯定し、自己を拘束する文化や国籍の枠組みを越えて、より広い視野や共通性を持つことを目指していることがうかがえる。また、日常生活や仕事においても、伝統的なホスト文化やエスニック文化の枠組みに囚われることなく、異なる文化間での交流を重視する。この超越志向を「二文化を拡張した志向性」として見て良いといえよう。李・田中 (2010) は Berry et al. (1989) の文化変容方略の中の「周辺化」を「自由人的態度」として再定義し、在日コリアンが既存カテゴリに抵抗感を持っており、そこから脱出したいという思いから自由人を目指しているのだと解釈した。中国出身長期滞在者にみられた超越志向は、在日コリアンでみられた脱カテゴリ的な超越とは異なるだろう。

4.2 二文化との関わりに関して

リサーチクエストの3つ目として、「日本における中国出身永住者たちは、中国文化と日本文化への志向性はどのようなものか」を挙げた。今回の調査から、仕事上あるいは公的な場面において、日中のやり方が異なる時に、日本式のやり方に準じると述べた人がいた。それは、短期間で社会的規則を学ぶことでストレスをもたらす留学生 (Anderson & Guan, 2018) と違い、長期滞在者は時間をかけて日本文化、社会の規則を学習するからこそ、ホスト社会に適応できると考えられる。

そして、二文化との関わりにおいて、領域によって日本文化に同化するか、中国文化を強く維持するかが異なる。さらに、相手が中国人か日本人かによって、接し方を変えていることが明らかになった。したがって、領域や相手によって、二文化への関わり方を自由に切り替えたり、スイッチングしたり (福岡, 1993 ; 李・田中, 2017 ; Boski, 2008) するのが、日本に長期滞在する中国人のやり方だといえよう。

第5節 今後の課題

文化変容方略概念モデル (Berry et al., 1989) の限界として、世の中の文化を二つに限定していることが指摘されている (Rudmin & Ahmadzadeh, 2001)。二文化を越える志向性「超越志向」に関しては、中国出身長期滞在者においては、その存在が確認され、「二文化を拡張した超越志向」の形として存在している。これは、日本にいるもう一つのエスニックグループ、在日コリアンにみられた自由人とはまた異なる形となる。本章では、在日中国出身永住者の語りの分析から、以上のような知見が得られた。次章では、調査対象者を広げて、本章と同様に日本社会における超越志向の存在とその様相の探索を行う。対象者を広げることにより、超越志向の解釈がより多岐にわたると予想され、バラエティーに富んだ解釈を検討することにより、多くの在日中国出身者に適用可能な定義の産出が期待される。

第4章 中国出身元留学生の文化的志向性

第1節 研究の背景と目的

2008年から日本では留学生30万人計画が導入され、より多くの留学生を招くことを目指してきた。新型コロナウイルスの流行で、留学生の日本への入国が困難だった時期もあったが、パンデミックの前の2018年末に、在日留学生数は33万人を超えた（出入国在留管理庁, 2024a）。留学生の招致に力を入れると同時に、2019年から日本における元留学生の雇用方針も拡大され、当該年度から企業等への就職を目的とした在留資格変更許可申請数も許可された数も前年度より大幅に増加した（出入国在留管理庁, 2024c）。

「高度外国人材」は留学生と関連する概念である。「高度外国人材」は一つの在留資格ではなく、高い技術を持つ外国人のことを指し、「技術・人文知識・国際業務」、「高度専門職」、「研究」、「経営・管理」、「法律・会計業務」といった5つの在留資格からなっている（日本貿易振興機構, 2024）。日本の大学、大学院を卒業して、そのまま日本で就職する人が、これまで「技術・人文知識・国際業務」というビザを取得することが多かったが、日本政府がさらに元留学生に日本に残り続けてもらうため、「高度専門職」を2015年に新たに設置した（法務省, 2015）。この新しい在留資格にはポイント制が導入され、日本語、出身大学のレベル、収入、年齢などで認定が判断される。つまり、日本語能力試験の等級が高いほど、出身大学の知名度が高いほど、収入が高いほど、年齢が若いほど、ポイントが高くなり、認定されやすい。また、この在留資格の魅力は、当該ビザを持って1年間以上日本で働き続けると、永住が取りやすくなる。本来は永住資格を申請するのに、10年間日本にいないといけないが、「高度専門職」を持つと永住の申請が10年以下でも可能となる。

2023年6月時点で「高度外国人材」に該当する人は日本全国で40万人を超えてあったが、うち3割を中国人が占める。中国人高度外国人材の内訳は「技術・人文知識・国際業務」90,386人、「高度専門職」13,601人、「研究」271人、「経営・管理」17,862人、「法律・会計業務」29人、計122,149人である（出入国在留管理庁, 2024a）。

永住者に焦点を当てた前章に対し、本章では膨大な人口数を有する中国国籍高度外国人材を対象とする。彼らは様々な背景を持って来日した永住者と異なり、ほとんどの人が日本の大学・大学院を卒業したとみられる。高度外国人材が対象に含まれる研究としては、在日元留学生の多文化就労場面での文化間葛藤と解決方略は何か（岡村他, 2016）、職場でどのように日本流のやり方に慣れていき、同時に異質性を保持するか（郷司, 2018）といった研究がみられるが、二文化を越える志向性に関しては十分解明されているとは言い難い。よって、本章では彼らの二文化との関わりを明らかにした上で、超越志向の有無を検討する。

社会学研究では、中国に帰国する意志をなくしていないが、帰国プランが曖昧な者は『永続的ソジョナー』中国人」と呼ばれる（坪谷, 2008）。元留学生たちにおいても、中国に帰

国する意思があるかどうか、そして、帰国プランがはっきりしているかどうかは、人によって異なる。しかし、日本で「高度外国人材」と見なされるスキルがあれば、中国に帰国しても生活が困らないと想像できる。永住の在留資格を持っていない彼らは、ある程度の『永続的ソジョナー』中国人」と重なる部分があると考えられる。

第3章で多様な職種の長期滞在者に超越志向が確認できたと述べた。元留学生たちは両言語を武器に、両文化に馴染み、両国とも生活できそうなイメージがある。本章は第3章の継続研究として、日本で働く高度外国人材になった中国人元留学生の二文化を越える志向性「超越志向」の存在、加えて、彼らの文化変容の実態を明らかにすることを調査目的とする。前章と同様に質的調査の手法を用いて、元留学生の文化的志向性を事例的に検討する。

具体的なりサーチクエスションは以下4点である。1) 自称カテゴリの選択：4カテゴリのどれをどのような理由で、主観的に選ぶか。2) 文化変容方略の判断：二文化への関わり観点からみると、4カテゴリのいずれに該当するか。3) 超越志向の選択：超越志向は、主体的に選択される概念として確認できるか。4) 超越志向の理由：超越志向が選択される場合は、どのような解釈で、どのような二文化への関わり方がみられるか。なお、ここでの4カテゴリが第3章と同様の立場で、「周辺化」は主観的に選ぶカテゴリではないため、文化変容方略から除外した。事実上3分類となり、中国人、日本人、統合人と言い換えた。なお、文化変容方略の3分類と別に、超越志向を追加し、併せて4カテゴリを想定した。

第2節 方法

2.1 調査対象者

調査対象者は、首都圏及び中部地方に在住する在日中国人で、高度外国人材に該当する在留資格者9名である。内訳は「高度専門職」2名、「技術・人文知識・国際業務」（以下「技人国」）7名であった（Table 4.1）。3年から4年間日本の高等教育機関に在籍し、日本で大学院を修了した30歳前後の人であり、大手企業を含む日系企業に勤務している。

Table 4.1

調査対象者の概要（高度外国人材 9 名）

記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I
性別	男	女	女	女	女	男	女	男	女
年齢	33	32	28	31	30	31	30	30	30
職業	会社員	私学職員	会社員	会社員	会社員	会社員	会社員	会社員	会社員
滞日年数	11	7	6	11	8	10	9	8	7
日本での 学習年数	3	4	3	4	3	3	3	3.5	3
在留資格	技人国	技人国	技人国	技人国	技人国	高度専門職	技人国	高度専門職	技人国
婚姻状況	既婚	未婚	未婚	未婚	未婚	未婚	既婚	既婚	既婚

2.2 調査の手続き

2019年5月から2020年3月に、縁故法により9名の調査対象者を募集した。調査対象者と1対1で1人あたり約1時間半の半構造化面接を実施した。研究の趣旨と倫理的配慮を説明し、データの厳重な管理と匿名性を守ることを約束した。調査対象者に参加と中断の自由があることを説明し、全員から研究協力依頼への承諾を得た。倫理審査は筆者の調査時に所属していた大学で受けた（承認番号：グロウコム申第2018-3）。

面接調査においては、基本的に第3章と同様の質問を尋ねた。まず文化変容方略に関するBerry et al. (1989) の2つの質問項目を示し、「はい」か「いいえ」を答えてもらった。次に、超越志向の確認及び二文化への志向性を反映する以下7つの質問項目を示しながら行い、さらに答えを詳しく聞くために補足的な質問を適宜加えていく半構造化面接を行った。

1)日本人とはどのような場面でどれくらい付き合っているか、付き合い方は中国人と同じか。2)中国文化の維持や継承の意志があるか。3)自らが認識している中国人らしさと日本人らしさはどれくらいで、それぞれ10点満点中何点か、その点数を付けた理由は何か。4)「統合」について説明した上で、自分はどれほど「統合人」だと思うか、10点満点中何点か。5)超越志向について説明した上で、自分のことを「自由人」、「個人」、「地球人」、「国際人」、「宇宙人」などと捉えたいか、6)「中国人、日本人、統合人、地球人など」の4つのうち最も自分にふさわしいものはどれか、その理由は何か。7)現時点ではどのようなライフプランを持っているか。

第3章と異なる部分は、問3と問4で、ホスト文化の受容とエスニック文化の維持に関して、自己評価をさせ、点数をつけてもらったところである。また、永住者の手前の段階にいる高度外国人材によくみられるライフプランの悩みを問7として追加した。

使用言語は基本的に中国語であったが、時には日本語も混ざっていた。語りを録音し、その後逐語録を作成して分析に用いた。上記の7つの質問項目の答えになる語りを抜き出し、質問ごとに整理し、適宜引用しながら解釈を試みた。

第3節 結果

3.1 回答の概要

まず、上記の問6に関して、自分にふさわしいカテゴリを主観的に選択してもらった結果として、「中国人」3名、「統合人」3名、「超越志向」3名（全員地球人）、「日本人」0名であった。9名の選択とその理由、二文化への志向性、統合人の度合いと超越志向への願望に関する語りの要点をTable 4.2に示した。

Table 4.2

高度外国人材 9 名による語りの概要

		A	B	C	D	E	F	G	H	I
自称カ テゴリ	自称カテ ゴリ	地球人	統合人	中国人	統合人	地球人	中国人	統合人	地球人	中国人
の選 択と その 理由	選択理 由	平和志向	日本人と中国 人の間でバラ ンスを取って いる	出身を大事に する	越境者は自 らずと統合人	英語能力	中国で教育を 受けた	二つの文化しか 経験していない	インターネッ ト活用	出身を大事 にする
二文化 への志 向性	日本人との交 流 中国文化の継 承	私生活で日 本人との付 き合いはな い 日本まで中 国文化を広 げたい。	友人は中国人 のほうが多 い。プライベ ートの話は中 子どもには中 国文化を教え たい	日本人は自分 の家庭にこも り、誘わない と誘ってくれ もっと勉強し たい	中国人の友 人が多い 内容による	日本人の友達 が少なく、ほ とんどは職場 の人 賛同できない 部分もある	仕事上で必要 だが、プライ ベートでの交 流は必要では 時々中国の発 展に追いつか ないと感じる	深い話題があま りない、表層に 留まる 中国の文化を維 持することが大 事	日本人の知り 合いはたくさ んいるが、友 達が少ない 日・中のやり 方が衝突する 場合、日本風	友達になり にくい、話 題が限られ ている ひどく同化 させられた わけではな
	中国人らしさ: 日本人らしさ	9:6	7:5	5:1	6:6	3.5:8.5	7:5	6:5	8:4	9:4

ライフプラン	永住資格を取りたい 中国に帰国することは一つの選択	中国に帰る予定はない	しばらく日本にいる	まず永住を申請して、親を説得してから帰化する	帰化することを考えている	永住資格を取りたい 良い仕事があれば中国に帰国する	永住資格を取りたい いずれ帰国すると思っていたが、現実には困難	永住資格を取りたい 中国に帰国することは一つの選択肢	およそ2年後に中国に帰国することを希望	
統合人度	7	7.5	3	8	9	7	8	6	8	
二文化を越える志向性	超越志向に対する願望	はい	はい、自由人	はい、地球人	いいえ	はい	いいえ	はい	はい	特に気にしない

3.2 自称カテゴリーの選択理由と超越志向の解釈

自称カテゴリー選択の理由やカテゴリーに関する解釈の語りを以下に示す。以下、語りの引用では、[] 内は筆者による補足であり、日本語の文法的な間違いは修正し、中国語部分は日本語にして記し、プライバシーに関わる箇所は伏せた。

3.2.1 中国人

中国人を選択した人のうち、C は中国人としての誇りを、F は日本人と感ぜない理由を述べていた。

中国人であることをかなり誇りに感じるだろう。例えば、軍事パレードがあったり、中国が何かを打ち上げて、それが全世界に報道されたりすると、中国はとても強い国だと感じる。その時は中国人でよかったと思う。(中略) 例えば、ある国が中国に対して友好的でなかったとしたら、その時はとても腹が立った。(C)

日本人と感ぜることは、たとえ日本国籍を変えたとしても、そうなる人はほとんどいないと思う。なぜなら、どこの国の人であるかは、その人の文化によって定義されると思うから。在日韓国人・朝鮮人であっても、日本で育ったのであれば、日本人として定義できると思う。彼らのような者は長い間日本に留まっていた、そう「日本人だと」感ぜるかもしれない。しかし、中国人はまだそのレベルに達していないと思う。まだ十分な時間が経っていないと思う。(F)

3.2.2 統合人

統合人を選択した人のうち、B はその理由を「日本人と中国人の間にバランスを取っているから」と答え、D は「越境者は自ずと統合人になるから」と答えている。

日本に住んでいる数年間は、仕事で日本人と接することが多く、生活の中で中国人の友人と出かけることが多いと思う。でも、日本人の友達とも買い物、食事、旅行した。その中間のバランスがとれていて、とても幸せで居心地がよいと感ぜている。(B)

そのような人「統合人」に定義しようとは思わなかった。というのも、実際、海外に住んでいる人のほとんどは、生きていくために、現地の人たちとも、もちろん自分の国の人たちともお付き合いをしなければならない。だから、あまり気にしたことはない。(D)

3.2.3 超越志向

超越志向を選んだ人をみると、「超越志向」は優れた個人的能力とホスト社会における異質な人への寛容性が必要だと捉えられている。A は平和志向、E は英語能力を、H はインタ

ーネット活用を理由に挙げた。

最近は、国同士で競争することに飽きてしまった。[地球人といえば]みんな紛争を捨てて、平和的な感じ。(A)

私はボーダレスにより近い。中国と日本だけではなく、私は英語ができるから、私にとっての世界は制限がない。(E)

われわれはインターネットの時代に生きているから、他の国、他の文化にも影響されていると思う。仕事上で何か問題がある場合、これまでの二十何年間の経験に基づいて、国籍と関係なく一人の人間としてどう解決すべきかが重要。(H)

さらに、母文化の欠如、及び地球人は誰でもなれるからだという理由もみられた。

統合人になるためには、二つの文化でハイブリッドにならないといけないね。しかし私は中国人の部分の経験が足りないよ。うまく統合できていない。(中略)地球人は制限がないから、地球上にいれば地球人になる。(E)

一方、2つの文化しか経験していないから、地球人のレベルに達していないという能力的に難しいとみて選択していなかった。

地球人や国際人として、もっと外国の文化に触れるべきだったし、もっといろいろなことを経験すべきだったと思っている。私の人生の主戦場は中国と日本で、それ以外はあまり経験していないような気がする。(G)

さらに、日本社会では超越志向は困難だと考えていた人もいた。

自由人などなれないと思う。自らなろうとしても、周りの日本人は国籍を大切にしているから、そう認めてくれないから。(D)

3.2.4 日本人

自称「日本人」の選択者はおらず、十分に日本語や日本文化に馴染んでいても日本人にはなれないとの語りがあった。

時々中国語を思い出せなくなって、代わりに日本語を使っている。しかし日本人だと思う時は本当にないね。恐らく日本はそんなに包摂性がないかもしれない。もしアメリカ

にいるなら、アメリカ人だと言うかもしれない。(A)

3.3 二文化への志向性

3.3.1 母文化の維持とホスト文化の受容

統合人と超越志向を選択した人における母文化維持の姿勢は、内容によって異なる。ジェンダー、子どもの教育、ビジネスモデルにおいて、現代中国の傾向に疑問を持つ様子がみられた。日本滞在を通じて、日本文化や日本社会のあり方を受容している様子がうかがえる。

女性に対する考え方、[中国の]女性は結婚または出産しないといけないなどに対して、私は認めない。(D)

[中国の]興味のあるところは勉強したい。中国文化の現状について、企業文化など賛同できない部分もある。(E)

特に仕事領域では中国でのやり方と比較しつつ、文化によってやり方が異なる時に日本のやり方に準じている。

会社で何か仕事がある時に、頭の中で中国式のやり方を一度考えるが、実際に行動する時に日本風のやり方に従う。(F)

なお滞在期間の経過に伴って、次のような考え方や行動の仕方の変化が意識されていた。

横断歩道を渡る時、車が自分に道を譲ることに最初はストレスを感じたが、現在は当たり前のことだと思うようになり、逆に中国での荒っぽい運転の仕方の方を怖く感じる。(A)

20歳という若い年齢で来日したため、現在の考え方は日本寄りになっていると思う。(D)

長年の日本滞在中、物事を遂行するのに、中国人が好きな「近道」を選ばなくなった。(B)

3.3.2 ホスト社会との関わり

ホスト社会との付き合いは場面限定的であり、対人関係においては中国人同士の付き合いよりも気を遣うという。

日本人の友達はあまり多くないね。私生活では日本人の友達がいない。(中略)日本人

のサークルに入るのは難しい。(A)

日本人と一緒にいる時に、生活習慣や考え方について気をつけることが多い。中国人と付き合う時は日本人のように遠慮しなくてよい。(D)

日本人は多少上の目線から人を見ている。(中略)生活習慣、やり方、言い方が全部異なるので友達になりにくい。(E)

またFは、日本人とプライベートで付き合うことに消極的である。Iは滞り期間が長くなるにつれ、ホストとの交友意欲が下がったと述べた。

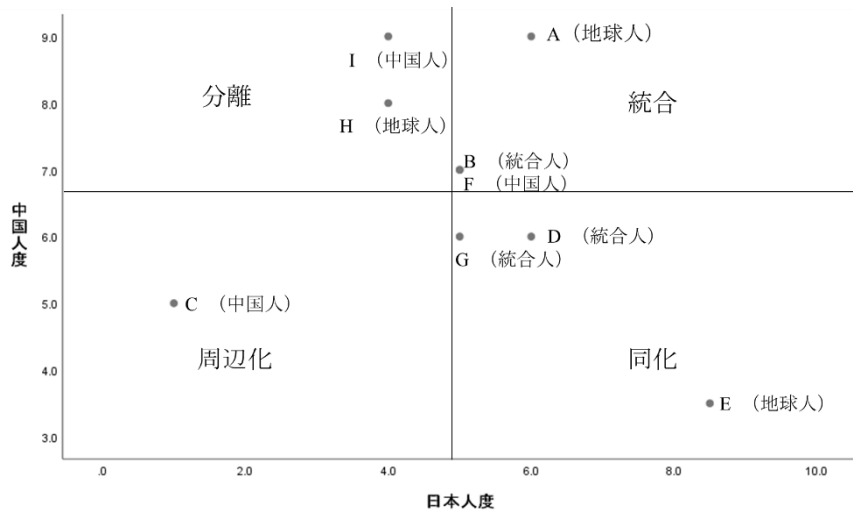
[日本人と付き合うことは]あまり重要だと思わない。仕事以外では日本人と重なる部分がないね。(F)

日本人と付き合う意欲は滞り年数の増加につれ、減ってきた。(中略)もし将来子どもができれば、せいぜい日本に在住する子どもがいる中国人と付き合うかな。(I)

3.4 自らが認識している二文化度と自称カテゴリとの関係

以上で9名の中国籍高度外国人材の自称カテゴリ選択とその理由、また二文化への志向性に関する結果を述べた。インタビューにおいては、彼らが認識している中国人らしさと日本人らしさはどれくらいで、それぞれ10点満点中何点かも尋ねた。そしてWard & Kennedy (1994)にならい、9名の調査対象者を平均値で4類型に分類してみた(Figure 4.1)。9名の調査対象者の中国人度は3.5点から9点に分布し、平均値は6.72点であった。日本人度は1点から8.5点に分布し、平均値は4.94点であった。これらから判断されるカテゴリは、両文化とも高い「統合」が図の右上、両文化とも低い「周辺化」は左下、母文化のみ高い「分離」は左上、ホスト文化のみ高い「同化」は右下となる。

Figure 4.1
 中国人度及び日本人度の自己認識による文化変容方略の分類



注) 括弧内は自称カテゴリ。中国人度の平均値 (6.72 点) と日本人度の平均値 (4.94 点) で 4 類型に分けられた。

自称カテゴリと付き合わせてみると、自称統合人の 3 人は、数値では B が「統合」、D と G は「同化」に分類される。自称地球人の 3 人は、数値では A が「統合」、E が「同化」、H が「分離」である。自称中国人の 3 人は、数値では C が「周辺化」、F が「統合」、I が「分離」となる。一貫した対応関係は見出されなかった。

語りを吟味してみると、二文化との関わりで自称カテゴリを選択しているわけではないことがわかる。選択の背景には、出身を大事にする価値観がうかがえた。

現実としては中国人を選びたくて選ぶわけではなく、選ばないといけないから。私は国籍を無視できる人ではない。(C)

来日まで中国で教育を受けて、既にオリジナル文化体系ができていた。日本人とどう付き合うかを習ったが、それはただのソーシャルスキルだよ。(F)

第 4 節 考察

4.1 自称カテゴリの選択と二文化との関わり

リサーチクエスションの 1) は自称カテゴリの選択とその理由、2) は二文化への関わりからの観点からみた文化変容方略の判断、であった。選択理由の語りと二文化への関わり方の語りは多数の重なりがあったため、あわせて考察していく。二文化との関わりを数値化した平均値による 4 類型の判断は、自称カテゴリとの明らかな対応関係を示していなかった。では自称カテゴリはどのように選ばれ、それは彼らの二文化への関わりとどう関連するのか。

今回の調査対象者は、日本の高等教育機関と日系企業で何年も過ごし、幅広く日本社会と接して日本社会のルールを学習する機会を持ってきた。彼らの二文化への志向性には、日本文化を受容しつつも母文化を顧みる傾向が認められる。また母国では社会人としての経験がないとして、統合人の選択に躊躇する語りがみられた。彼らの社会人経験は日本限定で、二文化の体験は等しくはなく、就労を通じての社会経験はホスト文化に偏る。日本の大学院を修了後、日本で就職した人々は、その理由として母国より高収入を得られること、自己実現できることなどを挙げるという (Komai, 2001)。日本の職場が彼らを引きつけると同時に、日本の国策でも高度外国人材の受け入れを進めている。こうした背景から、今回の調査対象者の社会人経験が日本に偏る事態が生じ、文化変容のあり方にも影響したと推測される。この方針のもとで、日本での新卒者の就職が増えれば、職業場面でのホスト文化の受容は高まっていくだろう。

滞日年数の長期化につれて、日本人との交友意欲が減少したとする語りは興味深い。こうした中国籍高度外国人材にとって、仕事以外で日本人と接する機会は必ずしも豊富ではなく、ホストとの対人関係の発展は限定的とみられる。高井 (1995) では、在日留学生は来日以後時間が経つと、同胞からホストへと依存するサポート源が切り替わるとされるが、本調査では社会人になっても同胞への依存がみられた。また、エスニック文化を維持しつつ、中国国内の社会現象を客観的にみようとす姿勢もみられた。

さらに、自称カテゴリで中国人を選んだ3名は出身や生育環境を理由にした。坪谷 (2008) では、中国に帰国する意志があるが帰国プランが曖昧な者を「永続的ソジョナー」中国人と呼ぶ。3人のうち2名はこれに該当したため、帰国意志と「中国人」意識の強さは対応が弱いといえる。統合人を選んだ3名は、日本社会は国籍を大事にするため超越は無理だと述べていた。ホスト社会の認知の仕方が、主観的選択に関わってくる可能性が指摘できる。

4.2 超越志向についての解釈

リサーチクエスションの3)は超越志向が主体的に選ぶ概念として確認できるか、4)は超越志向が自称カテゴリで選ばれる場合、超越志向をどう解釈するか、また二文化とどう関わるのか、であった。これらをあわせて以下に考察していく。自称カテゴリに超越志向の選択者がいたことから、中国籍高度外国人材においても超越志向が認められたといえる。しかし在日コリアン研究 (李・田中, 2010 ; Lee & Tanaka, 2017) で指摘されたような既存カテゴリへの抵抗感は認められず、二文化を越える認識に関して、2つのエスニックグループから異なる理解の仕方をしているように思われる。

在日コリアン研究における国際人 (原尻, 1989)、二文化人 (福岡, 1993)、自由人 (李・田中, 2010 ; Lee & Tanaka, 2017) などの議論では、日韓という既存カテゴリへの複雑な感情を背景にした脱カテゴリ的な発想がうかがわれる。超越志向が文化変容方略とどのような関係にあるかを調べた李・田中 (2010) では、Berry et al. (1989) の文化変容方略の中の「周辺化」を「自由人的態度」として再定義している。だが今回の調査では、異文化体験や英語

力などを地球人として必要な素質とみて超越志向を自称し、二文化に閉じずにより大きな舞台上で活躍したいとの希望で超越志向を好む者もみられ、脱カテゴリー的というより発展的な意味合いが込められている。なお、自称カテゴリーとして「周辺化」を設けてはいなかったが、数値で Berry et al. (1989) の文化変容方略 4 分類に分けてみた。したがって、「周辺化」は実際に主観的に選ばれない (Berry, 1976) のかは今回の研究では検証しなかった。だが、今回の結果から自称カテゴリーで超越志向を選んだ 3 人に関して、二文化についての自己認識との関わり度合いの数値でみると、「周辺化」に分類された人はいなかった。つまり、超越志向を持つ人は、ホスト文化とエスニック文化、両方とも希薄な状態ではないことを示唆している。

第 5 節 今後の課題

本章では、中国出身元留学生は、職場では同化し、社会文化的にも馴化が進んでいるが、中国人意識が強くホストとの対人関係は限定的で、領域によって文化変容方略を使い分ける滞在の仕方が浮かび上がってきた。第 3 章と同様に、従来の異文化適応研究では所定の基準で 4 分類に囚われず、二文化を受容し維持するという内実として、発展的な意味合いが含まれる二文化を越える志向性の様相がみえてきた。同じ二文化を越える志向性だが、在日コリアンで確認された自由人はより脱カテゴリー的な志向性のため、今回の超越志向とは別な概念であることによって、今後異文化適応との関係を検討する際に、「自由人」の尺度 (Lee & Tanaka, 2017) をそのまま用いるのは不適切だろう。

さらに、第 3 章でも少し言及されたが (例えば、No. 3)、長期滞在者たちは、ホスト文化を受容しながら中国と比較し、エスニック文化を維持しながら母国を客観的にみる。こうした俯瞰的な視点が、Berry et al. (1989) の文化変容方略の 4 分類にはないため、新たな発見だといえよう。しかし、永住者や元留学生が超越志向や二文化への批判的な視点を持っているとみるなら、それはより大きなサンプルでも確認できるのだろうか。また、これらの文化的志向性が異文化適応といかなる関係を持っているのか、次章ではその読み解きをすべく、調査手法を変えて検討をしていく。

第5章 越境者文化意識と主観的ウェルビーイング——日本在住中国出身長期滞在者の場合——

第1節 研究の背景と目的

第3章と第4章では、面接調査の手法で、日本に住んでいる中国出身長期滞在者における二文化を越える志向性「超越志向」の存在が確認された。さらに、在日コリアンとは異なり、在日中国人の超越的志向性においては、既存の二文化カテゴリへの抵抗感は希薄で、二文化を越えてその先へ進化するような拡張的、発展的な意味合いを含んでいたことがわかった。

ただし、「超越志向」だけで、日本にいる中国出身者の文化的志向性は説明しきれない。彼らへの面接調査では、母文化の維持とホスト文化の受容という従来見出されてきた文化意識も確認された。例えば、調査対象者には、中国にはルーツがあることや、中国人であることを捨てるべきではないと述べた人がいた。ホスト文化に関しては、家の外では日本人っぽく振る舞いをすると言及した人がいた。さらに、二文化への批判的な視点を持った文化観がみられた。例えば、近年の中国の企業文化に賛成できない、日本にも改善してほしいところがあるなどと述べられた。以上のようなホスト文化の受容、エスニック文化の維持、そして二文化を持ちながら俯瞰する文化観、さらに二文化を越えた発想は、国境線を越えて異文化と出会った越境者に特有の意識といえよう。

二文化を越えた発想を含めた越境者たちの文化意識は、質的研究による探索で一部が明らかになったに過ぎず、量的測定を用いた把握には着手されていない。本研究では、日本で暮らす中国出身長期滞在者が越境によって形成してきた、二文化への志向性及び二文化を越えた志向性のあり方を総体として捉え、越境者文化意識の尺度化を試みる。その妥当性及び信頼性を検証することを本研究の1つ目の目的とする。

さらに第2章では、日本に居住する中国出身長期滞在者の主観的ウェルビーイングと文化変容方略との関連をみた。ホスト文化に力点が置かれるほど、主観的ウェルビーイングが良いとの結果が明らかになった。しかし、文化変容方略は二文化に限定するため、二文化を越えた文化意識はどのように主観的ウェルビーイングと関係するかが不明である。

序章にも挙げた先行研究の結果だが、オーストラリアで働く中国出身高度人材においては、「周辺化」の人々の仕事満足度は相対的にみて最低ではなかった (Lu et al., 2012)。著者たちは、この結果を中国文化でもなく、オーストラリア文化でもない、「第三の文化アイデンティティ」によるものと解釈していた (Lu et al., 2012)。つまり、この「第三の文化アイデンティティ」を持つことによって、適応の状態が悪いと予測された「周辺化」は、予測されたほど適応が悪くなかったと解釈されていた (Lu et al., 2012)。日本に長期にわたって暮らす中国出身者を越境者として捉え、彼らの越境者文化意識と異文化適応との関係を探ることを2つ目の研究目的とする。

したがって、本章では、日本にいる中国出身長期滞在者における越境者文化意識の尺度を開発し、その後、越境者文化意識と異文化適応との関連を明らかにする。研究1では、これ

までの面接調査から得たデータに基づき、オリジナルの越境者文化意識尺度を作成し、妥当性と信頼性を検証する。研究2では、第2章と同様に、主観的ウェルビーイングを心理的適応の状態を把握する指標として用い、越境者文化意識と主観的ウェルビーイングとの関係を確認する。

第2節 研究1——越境者文化意識尺度の開発と妥当性・信頼性の検証

2.1 研究の目的

本研究において、越境者の文化意識の因子構造の検討には、5因子構造を想定する。エスニック文化もホスト文化も、それぞれに対する肯定的、否定的な捉え方は単純な一次元ではなく、それぞれ質的に異なる意識であると予想する。また、二文化にこだわらない超越的な文化意識は、二文化の濃淡とは異なる次元で芽生えるものとみている。

仮に Berry et al. (1989)のモデルに準じて、文化への意識は2軸それぞれの一次元の高低で表現できるものとみるなら、エスニック文化とホスト文化は各1因子にまとまるだろう。そして、Berry et al. (1989)のモデルでは、二文化への意識の希薄さで定義される「周辺化」が、二文化にこだわらない意識を全て吸収できるなら、超越的な意識が独立した因子を構成することはないだろう。越境者たちの文化意識は2軸で説明し尽くせるのか、それとも他の文化意識を想定する余地があるのか、という問いに対する示唆が得られよう。

越境者文化意識に焦点を当てた研究は未開拓なため、妥当性検討には、地球レベルの意識に焦点を当てた研究である地球市民の尺度 (Reysen & Katzarska-Miller, 2013) を部分的に活用する。地球市民というあり方を自認する、地球市民アイデンティティ (Reysen & Katzarska-Miller, 2013) は、アメリカでの調査をもとにしたもので、国籍を問わない地球的スケールでの社会感を持つ自己認識を指す。さらに Reysen & Katzarska-Miller (2013)では、地球規模の問題意識と責任感から行動する人を地球市民と考え、そのアイデンティティ、認知行動的な特徴、その存在に関する他者の承認及び自己のグローバルな意識という3要素を測定している。第3章と第4章において在日中国人の超越志向は「地球人」などと表現されるため、地球市民はこの越境者文化意識に関する構成概念妥当性の手がかりを提供するだろう。

こうして越境者たちの文化意識を尺度にすることによって、Berry et al. (1989)の文化変容方略モデルが注目してきた二文化への意識を精緻化し、さらに二次元モデルでは説明できなかった超越的な意識を加えて、越境者文化意識全体が測定できるようになる。

2.2 越境者文化意識尺度原案の作成

第3章と第4章で言及した日本で暮らす中国出身長期滞在者19名を対象に、在日中国人の文化意識に関して半構造化面接の結果を使用した。うち永住者など10名の結果を第3章から、高度人材となった元留学生9名の結果を第4章から引用した。面接調査を行った際に、まず Berry et al. (1989) の2軸に沿って、エスニック文化とホスト文化への捉え方や関わり方を聞いた。その上で、二文化を越える志向性が中国出身者にあるかどうか、あるならどのような

ものかを尋ねた。

結果をみると、エスニック文化の維持というカテゴリを説明する語りには、「中国人であることを捨てていない意識」に加えて、「中国をクリティカルにみる意識」が読み取れる。ホスト文化の受容というカテゴリの説明においても、「日本文化を日常生活に取り入れようという意識」と「ホスト社会に対して批判的にみる意識」の語りがみられる。つまり、エスニック文化には維持と客観視、ホスト文化にも受容と相対化の意識が含まれていたことになる。今回はこれらを両文化への認識の深化と捉え、文化意識に関する吟味を詳細化する意図から、維持や受容に加えて、両文化への客観視ないしは相対視の視点も想定する。二文化を越えた見方については、日中以外の他文化に対する尊重や関心などが語られていたことから、これらを「二文化を越える意識」として尋ねる着想を得た。

質問項目の作成にあたっては、第3章と第4章のローデータから上記に該当する内容を探し出し、それらをもとに44項目を作成した。さらに在日コリアン研究(李・田中, 2010)における自由人の概念から、「国籍でひとくくりにされることなく、1人の個人としてみてほしい」という1項目を加えた。面接調査の結果をカテゴリ化して、Table 5.1にまとめた。

Table 5.1 越境者文化意識に関する質問項目と例

カテゴリー	質問項目	具体例の一部 (下線が引かれた具体例はローデータから直接引用したものである。)
中国人であることを捨てていない意識	1.自分は世界のどこにいても中国人であると思う。 2.自分のルーツは中国にあると思う。	どんなに長く [日本に] 住んでいても、自分は中国人だと思う。(No. 3)
	3.自分のものごとのとらえ方の基準は中国にあると思う。 4.自分の考え方や価値観は中国のものに基づいている。	われわれは育ちの環境は中国だったので、やはり中国人の考え方が多い。(No. 7)
	5.国際的なスポーツの試合では、中国のチームを応援する。 6.世界のどこであれ、中国人が活躍していると聞くと、うれしい。	中国人であることをかなり誇りに感じるだろう。例えば、軍事パレードがあったり、中国が何かを打ち上げて、それが全世界に報道されたりすると、中国はとても強い国だと感じる。(C)
	7.人生の最後の時期は中国で過ごしたい。 8.中国人であることに誇りを感じる。	来世があるとしたら、また中国人になりたい。中国の情緒というか、うまく言えないけど、中国人として生まれるのが本当に良いことだと思う。(No. 5)
	10.中国本土の人々の生活を良くすることに貢献したい。 9.中国の伝統的な価値観が中国本土で失われていることを悲しく思う。	<u>[新年の挨拶やテーブルマナーの] ような伝統的なエチケットやマナーは、中国文化の重要な要素であるが、徐々に失われつつあるように感じる。(No.9)</u>
	中国をクリティカルにみる意識	11.中国の改善してほしいところに、中国を出てから気づいた。
12.当然だと思っていた中国での物事の進め方には欠点があることに気づいた。		中国文化の現状について、企業文化など賛同できない部分もある。(E)
13.中国の常識が、他国の常識と同じとは限らない。 14.中国大陸の中国人が当たり前だと思っていることに、疑問を感じるようになった。		長年の日本滞在を通して、物事を遂行するのに、中国人が好きな「近道」を選ばなくなった。(B)
15.●●の物事の進め方や考え方を見習うべき点が中国にはあると思う。		<u>中国に帰るとしたら、(中略)日本人が持っている習慣のようなものを、中国現地の人たちに当てはめてしまう。(G)</u>
16.中国では何においても競争が激しすぎる 17.中国での競争についていこうとすると、辛い思いをす	<u>中国の親は苦しみすぎていると思う。子供と一緒に勉強して、幼稚園から競争して、1万人が応募して300人が受かるような幼稚園があって、みんな競争して場所を確保するとか、そういう</u>	

	ることが多い	ことをやっている。私はそれがあまりにも疲れていると思う。日本のほうが楽だと思う。(E)
れ 日 本 文 化 を 日 常 生 活 に 取 り 入 れ よ う と い う 意 識	18.●●で当たり前とされる考え方が理解できる。	日本人とよく接するので、多少日本人の言い方、考え方を理解できるようになった。時々彼らに習って仕事をする。(中略)こんなに長く日本に滞在しているので、慣れなくてもしょうがないよね。(No.7)
	19.●●での、公共の場におけるマナーがわかる。 20.中国はやっても問題にならないが、●●ではいけないことは、自分はしない。	滞在の年数が長くなって、やはり郷に入っては郷に従えことが大事だろう。例えば、家を出たら、礼儀やマナーを日本人っぽくする。例えば、家を出たら、礼儀やマナーを日本人っぽくする。(No. 2)
	21.●●と中国の習慣で、異なっている点を説明できる。	こういうこと[日本人っぽい仕草]ができると、ホスト社会に溶け込みやすく、分離されない。(No. 4) 中国人は外食して騒ぐことが多いけど、日本人は気を遣っている。(No. 6)。
	22.●●の人々は、中国的な考え方を理解してくれないことがある。	彼ら[日本人]が[出来事を]コメントする時、間違いなく自国やアメリカを悪く言うことはない。十中八九、彼らはまず中国を貶める。(G)
	23.●●の人付き合いの仕方に合わせて、●●の人々と付き合うことができる。 24.●●の慣習に合わせて振る舞うことができる。	日本人と一緒にいる時に、生活習慣や考え方について気をつけることが多い。(D)
	25.●●にも悪い面はあると思う	恐らく日本はそんなに包摂性がないかもしれない。(A) 日本人は多少上の目線から人を見ている。(E)
批 判 的 に み る 意 識	26.●●の良いところが説明できる 27.●●の社会は素晴らしい社会だと思う	日本に来て初めて、いい意味でも悪い意味でも、日本の印象がはっきりした。(E)
	28.●●の人々について、「こうしたらよいのに」と指摘したくなるようなことがある 29.●●の価値観を押し付けられるのは嫌だ(考えるだけで嫌)	このホスト社会を尊重するので、ルールを理解するが、やはり心の中では、もっと柔軟性あってほしい。(No. 3)
	31.民族の違いは、些細なことだと思う 30.●●の人に対して持っていたイメージが全員にあてはまるわけではないとわかった	私たちは皆地球上の一員であるという共通性を強調している。私が地球から来たことは、私が中国人から来た人、あるいは私が〇〇省から来た人と同じような感覚がする。(中略)みんなが実は地球上の人だ。(No. 3)
	32.出身国にこだわらずに生きていきたい 33.国境を意識せずに活動したい 34. 国境線は地球上に必要ないと思う	[国際人であれば]、子供たちがアイデンティティを形成する際に、特に心配しなくても済む。(No.6) 私はボーダレスにより近い。中国と日本だけではなく、私は英語ができるから、私にとっての世界は制限がない。(E)
意 識	35.国籍でひとくくりされることなく、1人の個人とし	在日コリアン「自由人」の概念から作った項目

てみてほしい	
36.世界中の様々な国の文化に触れ、理解したいと思う 37.世界中の様々な国の人の、それぞれの考え方を知りたい	地球人や国際人として、もっと外国の文化に触れるべきだったし、もっといろいろなことを経験すべきだったと思っている。(G)
38.文化の違いを乗り越えて、問題解決に取り組むべきだ	(仕事や日常生活では、日本人に) 伝統的な考え方でみられたことがあり、要求されることがある。このような状況がある場合、私は冗談で「私は地球人だ、私は国際人だ」と言う。このような呼称で気まずいことを解決する。私はこのような呼び方が好き。時々、国籍が異なることで喧嘩の元になる。それなら、事前にリスクを避ければ良いと思う。(No. 9)
39.いいところも悪いところもあるという点で、どこの国もかわらない	日本人の知り合いが増えてきて、[中国人と日本人には] 多くの共通点があると思う。昔は、日本人は厳密とっていたけれど、いい加減にする人も多いと気づいた。(A)
41.自分と相手の文化が異なっていると、一方を完全に無視するのはよくないと思う 43.自分と相手の国が異なっていると、対立する必要はないと思う 44.自国の文化や価値観を大切にしながら、他の国の文化や価値観を否定せずにいることができる 40.中国の文化とは異なる文化を持つ国や地域があっても、相手の文化を尊重する 42.心を許せそうな相手なら、国や民族が違って、友達になれると思う	最近、国同士で競争することに飽きてしまった。[地球人といえば]みんな紛争を捨てて、平和的な感じ。(A)
45.同じ地球に住む以上、世界中の人々は地球の問題の当事者として協力しあうべきだと思う	われわれはインターネットの時代に生きているから、他の国、他の文化にも影響されていると思う。仕事上で何か問題がある場合、これまでの二十何年間の経験に基づいて、国籍と関係なく一人の人間としてどう解決すべきかが重要。(H)

2.3 方法

2.3.1 調査対象者

第2章と同様の理由で、滞り期間が3年以上の中国出身者を調査対象にした。オンラインによるアンケート調査を行った。399名からオンラインにてアンケートが返送された。日本または中国の国籍を持つ、社会人の成人に属性を絞るため、留学生29名、技能実習生1名、18歳未満3名、国籍を中国と日本以外の「その他」を選んだ人1名を除いた。協力を承諾しなかった6名、適当に回答した1名も除いた。残る合計358名の回答を分析の対象とした。2回目の調査では185名から回答を得た。1回目と共通の回答者は125名であった。

1回目の調査の調査対象者の属性をTable 5.2に示した。平均年齢は38.4歳 ($SD=10.2$)で、平均滞り年数は14.3年 ($SD=8.1$)である。また、平均来日年齢は24.1歳 ($SD=5.9$)で、18歳未満で来日した人は20名いたが、日本生まれの人はいなかった。中国籍が90.5%を占め、そのうち50.3%の人が日本の永住権を有していた。大卒以上の学歴の人が84.1%で、既婚者が全体の67.9%を占め、日本語力の上級者が72.1%であった。

2.3.2 調査内容

(1) 越境者文化意識尺度

上記Table 5.1で示した45項目について5段階で評定を求めた。具体的に、中国人であることを捨てていないことを表す「自分は世界のどこにいても中国人であると思う」や「自分のルーツは中国にあると思う」など10項目がある。中国をクリティカルにみることができるようになったことを表す「中国の改善してほしいところに、中国を出てから気づいた」や「当然だと思っていた中国での物事の進め方には欠点があることに気づいた」など7項目がある。移住先の社会の振る舞いや規則を理解し、それに合わせた振る舞いができるようになったことを表す「●●で当たり前とされる考え方が理解できる」と「●●での、公共の場におけるマナーがわかる」など7項目がある。移住先の悪いところもみえてきたことを表す「●●にも悪い面はあると思う」や「●●の人々について、『こうしたらよいのに』と指摘したくなるようなことがある」など5項目を作った。「二文化を越える意識」を示す「●●の人に対して持っていたイメージが全員にあてはまるわけではないとわかった」や「民族の違いは、些細なことだと思う」など16項目を設けた。

教示文を「現在居住している国・地域（例：日本）での、あなたの思いや考えについて、お尋ねします。次のそれぞれの項目は、あなたご自身にどれくらい当てはまりますか。『1 あてはまらない』、『2 あまりあてはまらない』、『3 どちらともいえない』、『4 ややあてはまる』、『5 あてはまる』の中から、あなたご自身の考えに最も近いもの一つを選んでください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、感じたことをそのままお答えください。なお、●●には、あなたが現在住んでいる国・地域の名前（例：日本）をあてはめて考えてください。」とした。

数字が大きいほど当てはまることを意味する。ホスト国名は●●として表記し、「●●には、

現在住んでいる国・地域の名前（例：日本）をあてはめて考えてください」と指示した。

(2) 地球市民尺度

Reysen & Katzarska-Miller (2013) の地球市民アイデンティティ尺度の 3 つの構成要素を用いた。1) 地球市民のアイデンティティを自らが認識しているかどうかを尋ねる 1 因子、2) 回答者を地球市民だと周囲が認めているか、自身にグローバルな意識があるかを尋ねる 2 因子、3) 地球市民としての認知行動的な特徴の該当を尋ねる 6 因子、である。以上の合計 20 項目について、5 段階で評定を求めた。教示文を「以下の文はあなたご自身にどのくらいあてはまりますか。『1 あてはまらない』、『2 あまりあてはまらない』、『3 どちらともいえない』、『4 ややあてはまる』、『5 あてはまる』の中から、ご自身にあてはまるものを選んでください」とした。数字が大きいほど当てはまることを意味する。

2.3.3 調査手続き

2022 年 11 月～2023 年 2 月に Google Form を用い、調査者の知人を通じて WeChat で URL を配布した。本研究の実施にあたり、データの厳重な管理や匿名性を守ることを約束した上で、参加・中断の自由について説明をした。研究と倫理的配慮の説明を読んで協力を承諾した人から回答を得た。岡山大学大学院社会文化科学研究科・法務研究科倫理審査委員会で審査を受けた（承認番号：社_2022_15）。

本調査の実施にあたっては、日本に在住する複数の華僑華人団体のリーダーにアンケート調査の概要を説明し、それぞれの団体の WeChat グループで調査を案内できるかどうかを打診した。打診時に許可をもらった僑団リーダーのみにアンケート調査のリンクを送り、僑団リーダーを通して、各僑団の WeChat グループに Google Form によるアンケート調査フォームへのリンクを送ってもらった。

なお、本研究では、越境者文化意識尺度を新たに作成してその信頼性・妥当性を検討するという目的を含むことから、同一の回答者に 2 回回答してもらった。1 回目の調査は、2022 年 11 月～12 月の間に実施され、2 回目の調査はその一ヵ月後の 2022 年 12 月～2023 年 1 月の間に行われた。謝金は、2 回のアンケート調査に回答した人へ 1000 円分の QUO カードを郵送した。

2.3.4 分析方法

構成概念妥当性を検討するため、1 回目の調査で探索的因子分析を行い、因子構造を探る。予測した理論的な因子構造と一致するかどうかで、構造的妥当性をみる。2 回目の調査で確認的因子分析を行い、1 回目で得た因子構造の安定性を確認する。基準関連妥当性については、「地球市民」の構成要素との相関関係によって確認する。信頼性を検討するには、1 回目の調査において各下位因子のクロンバック α 係数を求め、内的整合性をみる。統計解析には SPSS (Ver. 28) を用いる。

2.4 結果

2.4.1 越境者文化意識

(1)探索的因子分析

1 回目の回答 ($N=358$) を用いて、探索的因子分析を行った。天井効果がみられたのは「中国の常識が、他国の常識と同じとは限らない」、「心を許せそうな相手なら、国や民族が違ってても、友達になれると思う」など、16 項目であったが、オリジナル尺度の構成項目を確認する意味で、入れたまま因子分析を行った。45 項目に対して最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況 ($14.80 \rightarrow 4.52 \rightarrow 2.42 \rightarrow 1.74 \rightarrow 1.53 \rightarrow 1.32 \rightarrow 1.25 \rightarrow 1.01 \rightarrow 0.96$) からは 8 因子解とすることも可能であったが、いずれの因子にも負荷量が.40 に満たない項目があった。繰り返して因子分析を行い、最終的な結果を Table 5.3 に示す。

最終的に 5 因子が生成された。第 1 因子は「心を許せそうな相手なら、国や民族が違ってても、友達になれると思う」、「自国の文化や価値観を大切にしながら、他の国の文化や価値観を否定せずにいることができる」など 9 項目で構成され、自らの文化や価値観を大切にしながらも、他の国や地域の文化を否定せず、対立ではなく協力する志向性を持つことから「他文化との共存志向」と命名した。

第 2 因子は「中国人であることに誇りを感じる」と「自分のルーツは中国にあると思う」など 9 項目で構成され、考え方や物事の見方の基準が中国にあり、中国人であることを誇りとしていることから、「母国へのルーツ認識」と命名した。

第 3 因子は「●●の人付き合いの仕方に合わせて、●●の人々と付き合うことができる」、「●●の慣習に合わせて振る舞うことができる」など 6 項目で構成され、ホスト文化に合わせて、ホストメンバーの考え方を理解できたりする項目から成るため、「ホスト文化への合流」と命名した。

第 4 因子は「当然だと思っていた中国での物事の進め方には欠点があることに気づいた」、「中国大陸の中国人が当たり前だと思っていることに、疑問を感じるようになった」など 6 項目で構成され、中国の社会現象に疑問を覚え、母国の欠点を認識していることから「自文化の客観視」と命名した。

第 5 因子は「●●にも悪い面はあると思う」と「●●の良いところが説明できる」など 4 項目からなり、中国と対比して日本の社会を評価する視線を持つことから「ホスト文化の相対化」と命名した。

上記 5 つの下位尺度の信頼性係数を算出ところ十分高かったことから、それぞれ平均点を算出して分析に用いた（「他文化との共存志向」 $M=4.36, SD=0.58, \alpha=.93$ ；「母国へのルーツ認識」 $M=3.92, SD=0.64, \alpha=.86$ ；「ホスト文化への合流」 $M=3.92, SD=0.67, \alpha=.88$ ；「自文化の客観視」 $M=3.77, SD=0.69, \alpha=.81$ ；「ホスト文化の相対化」 $M=4.15, SD=0.62, \alpha=.89$ ）。

Table 5.2

調査対象者の属性 (N=358)

性別		配偶者	
男性	29.1%	中国人	68.3%
女性	70.9%	日本人	23.0%
その他	0.0%	帰化華人	6.2%
年齢（歳）：平均値（SD）	38.4 (10.2)	その他	2.5%
日本滞在期間（年）：平均値	14.3 (8.1)	最終学歴	
来日年齢（歳）：平均値（SD）	24.1 (5.9)	小学校・中学校	0.8%
国籍		高等学校	4.5%
中国	90.5%	専門学校・短大	10.6%
日本	9.5%	大学	32.4%
在留資格		修士	39.7%
永住	50.3%	博士	12.0%
技術・人文知識・国際業務	26.9%	日本語のレベル	
高度専門職	7.4%	どのような場面でもまったく不自由はない	27.4%
家族滞在	6.2%	どのような場面でもだいたい不自由はない	44.7%
日本人配偶者等	4.3%	日常生活には不自由はない	22.1%
技能	0.3%	日常生活にも不自由がある	5.3%
その他	4.6%	全く使えない	0.6%
婚姻状況			
結婚していない	28.2%		
結婚している	67.9%		
その他	3.9%		

Table 5.3

越境者文化意識の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転， $N=358$ ）

	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
他文化との共存志向 ($\alpha=.93$)						
42. 心を許せそうな相手なら、国や民族が違ってても、友達になれると思う	.92	.02	-.09	.09	-.03	.81
44. 自国の文化や価値観を大切にしながら、他の国の文化や価値観を否定せずにいることができる	.91	-.03	.07	-.12	-.08	.71
43. 自分と相手の国が異なっているとしても、対立する必要はないと思う	.89	-.07	.01	.02	-.04	.74
40. 中国の文化とは異なる文化を持つ国や地域があっても、相手の文化を尊重する	.88	-.04	.07	.06	-.09	.78
45. 同じ地球に住む以上、世界中の人々は地球の問題の当事者として協力しあうべきだと思う	.86	.00	-.03	-.07	.01	.66
39. いいところも悪いところもあるという点で、どの国もかわらない	.78	.02	-.15	-.04	.25	.75
41. 自分と相手の文化が異なっているとしても、一方を完全に無視するのはよくないと思う	.77	-.03	.02	.06	.04	.70
38. 文化の違いを乗り越えて、問題解決に取り組むべきだ	.54	.05	.14	-.03	-.09	.34
33. 国境を意識せずに活動したい	.49	-.13	.19	.02	.04	.39
母国へのルーツ認識 ($\alpha=.86$)						
8. 中国人であることに誇りを感じる	.01	.79	.12	-.19	-.02	.64
2. 自分のルーツは中国にあると思う	.04	.72	-.04	-.04	.02	.53
4. 自分の考え方や価値観は中国のものに基づいている	-.06	.70	.06	.00	-.09	.43
6. 世界のどこであれ、中国人が活躍していると聞くと、うれしい	.13	.67	.07	-.05	.01	.56
5. 国際的なスポーツの試合では、中国のチームを応援する	.01	.66	-.16	.08	.11	.49
1. 自分は世界のどこにいても中国人であると思う	.22	.63	-.03	-.06	.01	.53
3. 自分のものごとのとらえ方の基準は中国にあると思う	-.21	.63	-.07	.16	-.05	.33
7. 人生の最後の時期は中国で過ごしたい	-.19	.59	-.01	.06	-.01	.30
10. 中国本土の人々の生活を良くすることに貢献したい	.05	.51	.13	-.01	-.02	.32
ホスト文化への合流 ($\alpha=.88$)						
23. ●●の付き合いの仕方に合わせて、●●の人々と付き合いができる	.02	.05	.97	-.01	-.16	.79
24. ●●の慣習に合わせて振る舞うことができる	-.02	-.02	.96	-.05	-.04	.80

19. ●●での、公共の場におけるマナーがわかる	.15	-.01	.54	-.03	.12	.50
21. ●●と中国の習慣で、異なっている点を説明できる	.02	.07	.54	.03	.19	.54
20. 中国はやっても問題にならないが、●●ではいけないことは、自分はしない	.14	.05	.44	.11	.06	.46
18. ●●で当たり前とされる考え方が理解できる	.05	-.14	.40	.24	.01	.37
自文化の客観視 ($\alpha=.81$)						
12. 当然だと思っていた中国での物事の進め方には欠点があることに気づいた	.07	.12	.09	.71	-.11	.60
14. 中国大陸の中国人が当たり前だと思っていることに、疑問を感じるようになった	-.05	-.20	.07	.69	-.03	.50
15. ●●の物事の進め方や考え方を見習うべき点が中国にはあると思う	.08	.03	.04	.64	.05	.55
16. 中国では何においても競争が激しすぎる	.00	.06	-.05	.63	-.07	.34
17. 中国での競争についていこうとすると、辛い思いをすることが多い	-.08	-.04	-.07	.62	.02	.40
11. 中国の改善してほしいところに、中国を出てから気づいた	.11	.18	.05	.49	.13	.54
ホスト文化の相対化 ($\alpha=.89$)						
25. ●●にも悪い面はあると思う	.00	-.05	.08	-.12	.93	.81
26. ●●の良いところが説明できる	-.02	-.07	.35	.01	.61	.71
29. ●●の価値観を押し付けられるのは嫌だ (考えるだけで嫌)	.12	.10	-.13	.15	.42	.32
22. ●●の人々は、中国的な考え方を理解してくれないことがある	-.02	.07	.30	.06	.41	.47
累積説明率	33.47	43.94	48.92	52.77	54.72	
$\chi^2(401) = 924.42$ ($p < .001$)						
因子間相関		.36	.61	.52	.66	
			.19	.10	.45	
				.58	.62	
					.49	

(2) 確認的因子分析

次に抽出された各因子間の関係を検討するため、2回目のデータ ($N=185$) で確認的因子分析を行った。確認的因子分析には、SPSS Amos 28 を使用した。適合度指数は、 $\chi^2(484) = 1087.92$ 、GFI=.85、AGFI=.81、TLI=.90、NFI=.86、CFI=.92、RMSEA=.06 であり、1回目の調査で得られた結果と同様の 5 因子構造が確認された。

2.4.2 越境者文化意識と地球市民における相関関係

1 回目の調査で得た越境者文化意識 5 因子と地球市民 9 因子 (Reysen & Katzarska-Miller, 2013) に関する記述統計、信頼性係数及びこれらの相関関係を Table 5.4 に示す。

越境者文化意識の 5 因子と、地球市民アイデンティティの他者の承認及び自己のグローバルな意識という 2 因子との間では、「母国へのルーツ認識」と他者からの承認である「環境規範」の間で有意な相関がみられなかった。その他は、全ての組み合わせで有意な正の相関関係が示された。

越境者文化意識の 5 因子のうち「自文化の客観視」の 1 因子のみが、地球市民アイデンティティとの間で有意な弱い正の相関関係を示した。越境者文化意識 5 因子と、地球市民アイデンティティの認知行動的な特徴である向社会的行動 6 因子の間では、「母国へのルーツ認識」と「グループ間の共感」の間で有意な相関がみられなかった他は、全ての組み合わせで有意な正の相関関係が示された。

Table 5.4

地球市民モデルと越境者文化意識 5 因子の相関係数 (N=358)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
先行要素																
1.環境規範	3.35	.87	.79													
2.グローバルアウェアネス	3.67	.68	.73	.37**												
地球市民																
3.地球市民アイデンティティ	2.92	1.14	.92	.57**	.44**											
所産																
4.グループ間の共感	3.78	.77	.70	.36**	.60**	.45**										
5.多様性を大切に	3.81	.87	.77	.33**	.51**	.39**	.66**									
6.社会的正義	3.99	.70	.49	.23**	.35**	.24**	.41**	.50**								
7.環境の持続可能性	4.33	.68	.79	.24**	.34**	.14**	.35**	.45**	.65**							
8.グループ間の助け合い	3.64	.80	.40	.24**	.36**	.31**	.38**	.41**	.53**	.44**						
9.行動に対する責任	3.87	.79	.70	.39**	.51**	.41**	.47**	.56**	.53**	.53**	.64**					
越境者の文化意識																
10.他文化との共存志向	4.36	.58	.93	.17**	.37**	.04	.46**	.48**	.54**	.60**	.29**	.39**				
11.ホスト文化への合流	3.92	.67	.88	.14**	.37**	.03	.38**	.35**	.41**	.40**	.23**	.28**	.63**			
12.自文化の客観視	3.77	.69	.81	.16**	.26**	.13*	.33**	.27**	.35**	.38**	.15**	.23**	.49**	.55**		
13.ホスト文化の相対化	4.15	.62	.89	.14**	.32**	-.02	.36**	.32**	.46**	.50**	.22**	.30**	.64**	.66**	.49**	
14.母国へのルーツ認識	3.92	.64	.86	.07	.20**	.01	.10	.13*	.35**	.32**	.27**	.25**	.28**	.18**	.10	.37**

* $p < .05$; ** $p < .01$

2.5 考察

2.5.1 妥当性の検討

1回目の調査結果を用いて探索的因子分析を行った結果、5因子が抽出された。5因子での累積寄与率は54.72%であった。先行研究をもとに理論的に想定した5因子の構造が裏書きされ、構造的妥当性が示された。

Berry et al. (1989) は、母文化維持の肯定、及びホスト文化受容の肯定の度合いのみで変容方略を定義した。しかし今回の結果から、こうした1次元の問題としてみるより、母文化に対しても、ホスト文化に対しても、維持や受容とは別に、批判的な視点の芽生えが越境者には生じていることが指摘できる。さらに、今回の分析からは、他文化との共存志向という、母文化に閉じるのでも、ホスト文化に同化するのでもない、二文化を越える文化意識の存在が量的調査でも確認された。この志向性の持ち主を、Berry et al. (1989) のモデルでいう「周辺化」、すなわち母文化の維持度が低くホスト文化の受容度も低い者、と同じと見なすことは適切でないと考えられる。

「I.他文化との共存志向」の構成項目から、日本で暮らす中国出身長期滞在者にとって、二文化を越えた文化的志向性のありようは、自分が相対する交流相手の文化を尊重することに力点が置かれていることがわかる。一方で、世界中の様々な国の文化に触れて理解したいなどの文化一般的な価値意識は含まれず、個人の交流を念頭に置いたようにみえる。在日コリアンの自由人では、「自分」、「おれ」といった一人称視点で表現する人がいた(李・田中, 2010)。本研究でも、1人の個人としてみてほしいという脱文化的な意識を尋ねたが、残ることはなく、個人ベースの脱文化意識は希薄と考えられた。

確認的因子分析では、1回目の調査の分析結果と同様の5因子構造が確認された。因子構造モデルのデータへの適合性は統計学的な許容範囲を示したため、因子構造からみた構成概念妥当性があるといえる。

越境者文化意識のうち「I. 他文化との共存志向」については、地球市民の構成要素との間に、有意な正の相関が多くみられたことから、この部分の基準関連妥当性が支持されよう。越境者文化意識のうち、日本と中国の二文化に関する意識と地球市民の間には、部分的に有意な正の相関がみられたが、その解釈についてはさらなる検討を要する。

2.5.2 信頼性の検討

越境者文化意識の下位尺度の α 係数が十分に高かったことから、十分な内的整合性を有する尺度であると判断される。

第3節 研究2——越境者文化意識と主観的ウェルビーイング

3.1 研究の目的

第2章では、文化変容方略と主観的ウェルビーイングとの関係を見た。幸福実感については、「統合」と「同化」が「分離」より有意に高かった。達成実感については、「統合」と「同化」は「分離」と「周辺化」より有意に高かった。カナダやアメリカのような比較的移民が多く、社会の多文化共生の度合いも高い移民国家における調査結果によると、「統合」が最も好適応に繋がり、「周辺化」が最も不適応に繋がる（例えば、Berry, 1997; Berry et al., 2006）。日本ではこの定説と異なり、「統合」と「同化」が同様に適応的にみられた。さらに、在日コリアン研究などから発想をもらい、Berry et al. (1989) が設定した4分類だけで、越境者たちの文化的意識を読み取ることは不十分だと想定した。第3章と第4章では、既存の枠組みに頼らず、実際の意識を反映させるため質的研究を行った。

そして、本章の研究1では、越境者はそもそも文化をどう捉えているのか、どのような意識を持っているのかを調べるため、尺度を作り因子構造を分析した。そこでは、ホスト文化とエスニック文化の二者択一を越えた認識、「他文化との共存志向」が確認された。また、ホスト文化とエスニック文化への批判的な視点も確認された。これらの知見からは、文化意識と異文化適応の関係を読み解くには、二文化への志向性を類型化する文化変容方略の発想だけでは不十分であることがいえよう。したがって、二文化を越える志向性や、批判的な見方の心の機能も想定する必要がある。よって、研究2では、越境者たちの文化的志向性と主観的ウェルビーイングの関連を調べる。本研究も、第2章と同様に、移民における成功を測る主な指標の一つと言われる主観的ウェルビーイング (Kushnirovich & Youngmann, 2017) を用いて、日本で暮らす中国出身長期滞在者の異文化適応に注目する。

5因子のうち、「母国へのルーツ認識」と「ホスト文化への合流」は、文化変容方略を構築する「エスニック志向」と「ホスト志向」と類似しているようにみえるが、今回の越境者文化意識尺度は「意識」に焦点を当て作った尺度であり、意識レベルと行動レベルの両方を測定する Ward & Kennedy (1994) の尺度とは異なっている。よって、越境者文化意識の5因子と文化変容方略4分類とどう関わるかが未詳であり、研究2で検討する必要がある。

日本に住む中国出身長期滞在者にとって、「他文化との共存志向」は、相手の文化を尊重するという特徴がある。エスニック文化とホスト文化に囚われない意味では、「自由人」(李・田中, 2010) 及び「第三の文化的アイデンティティ」(Lu et al., 2012) と類似する部分がある。「自由人」は在日コリアンにとって、日本人や韓国人のような決められたカテゴリに起因する、葛藤を克服するための手段として用いられる可能性がある (Lee & Tanaka, 2017)。そして、「第三の文化アイデンティティ」は「周辺化」の人々の仕事満足度において、ほかの文化変容方略を取る人々との差を縮小する効果があるかもしれないという (Lu et al., 2012)。果たして、「他文化との共存志向」を含めた越境者たちの文化的志向性が、主観的ウ

ウェルビーイングとどう関わらるだろう。本研究では、具体的に以下の仮説について検証する。

二文化を越える志向性が、在日コリアン研究では、葛藤を和らげる効果があり、在豪中国出身技術者の研究では、「周辺化」を改善する効果があると報告されたことから、「他文化との共存志向」が高いほど、主観的ウェルビーイングが高いと予測できる。よって、仮説1を「『他文化との共存志向』において、高群は低群より、主観的ウェルビーイングが良好である。」とする。

在日コリアン研究によると、韓国人意識が高いほど、幸福感が向上するという(李・田中, 2017)。このことから自文化への意識が高いほど、幸福感が高いことが予測できる。仮説2を「『母国へのルーツ認識』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である」とする。

そして日本にいるフィリピン出身の実習生研究では、日本文化を重視する程度が低いほど、メンタルヘルスが悪化するリスクが高いという(前田, 2018)。ホスト文化を取り入れることと、主観的ウェルビーイングの向上が関連することが予測できる。よって、仮説3を「『ホスト文化への合流』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である」とする。

さらに、下位因子の「自文化の客観視」と「ホスト文化の相対化」の質問項目をみると、それぞれの得点が高い人は、両文化を熟知する人々であると考えられる。例えば、「自文化の客観視」には「当然だと思っていた中国での物事の進め方には欠点があることに気づいた」などの項目が含まれている。これは、自文化をよく理解した上で、ホスト文化やその他の文化と比較した後の気づきと考えられる。同様に、「ホスト文化の相対化」には「●●にも悪い面はあると思う」や「●●の良いところが説明できる」などの項目が含まれている。これらは、ホスト文化をよくわかっていることの証拠だろう。よって、「統合」の人々は「自文化の客観視」と「ホスト文化の相対化」の得点が高いと予測する。さらに、先行研究では、両文化を取り入れる「統合」が最も好適応の文化変容方略であるため(例えば、Berry et al., 2006)、両文化を批判的にみることが出来る人のほうが、主観的ウェルビーイングが高いと予測できる。よって、仮説4を「『自文化の客観視』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である」とする。そして、仮説5を「『ホスト文化の相対化』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である」とする。

3.2 方法

3.2.1 調査対象者

調査対象者の募集方法は研究1と同様である。

3.2.2 尺度

(1) 越境者文化意識尺度

研究 1 における探索的因子分析で得た 5 因子 34 項目の越境者文化意識尺度を用いる。

(2) 主観的ウェルビーイング

第 2 章で使用した「主観的幸福感尺度」(伊藤他, 2003) を用いた。全ての質問に対して、4 件法で測定した。数値が大きいほど当てはまることを意味する。

3.2.3 調査の手続き

調査の手続きに関しては、研究 1 と同様である。

3.2.4 分析方法

統計解析には SPSS (Ver. 28) を用いた。2 回とも回答してくれた 125 名のデータを分析した。属性に関しては、1 回目の結果から抽出した。越境者文化意識と文化変容方略との関連を確認するため、1 回目のデータを用いて、一元分散分析を行った。主観的ウェルビーイングと越境者文化意識との関連を調べるため、2 回目のデータを用いて t 検定を行った。

3.3 結果

3.3.1 調査対象者の属性

質問紙への回答を依頼して 2 回とも回答したのは 125 名であった。調査対象者の属性を Table 5.5 に示した。平均年齢は 40.0 歳 ($SD=11.4$) で、平均滞日年数は 15.3 年 ($SD=9.2$) である。また、平均来日年齢は 24.5 歳 ($SD=5.5$) で、18 歳未満で来日した人は 15 名いたが、日本生まれはいなかった。中国籍が 87.2% を占め、そのうち 50.5% が日本の永住権を有していた。大卒以上の学歴の人が 89.6% で、既婚者が全体の 74.4% を占め、日本語力の上級者が 74.4% であった。研究 1 の一部であるため、研究 1 のデータの特徴を反映しているといえよう。

Table 5.5

調査対象者の属性 (N=125)

性別		配偶者	
男性	28.0%	中国人	72.0%
女性	72.0%	日本人	19.4%
その他	0%	帰化華人	7.5%
年齢 (歳) : 平均値 (SD)	40.0 (11.4)	その他	1.1%
日本滞在期間 (年) : 平均値	15.3 (9.2)	最終学歴	
来日年齢 (歳) : 平均値 (SD)	24.5 (5.5)	小学校、中学校	0%
国籍		高等学校	3.2%
中国	87.2%	専門学校・短大	7.2%
日本	12.8%	大学	27.2%
在留資格		修士	47.2%
永住	50.5%	博士	15.2%
技術・人文知識・国際業務	29.4%	日本語のレベル	
高度専門職	8.3%	どのような場面でもまったく不自由はない	23.2%
家族滞在	7.3%	どのような場面でもだいたい不自由はない	51.2%
日本人配偶者等	1.8%	日常生活には不自由ない	22.4%
その他	2.8%	日常生活にも不自由がある	2.4%
婚姻状況		全く使えない	0.8%
結婚していない	21.6%		
結婚している	74.4%		
その他	4.0%		

3.3.2 越境者文化意識と文化変容方略との関連

1 回目の質問紙調査データ (N=358) を用いて、文化変容方略の 4 分類を独立変数とし、越境者文化意識の 5 因子を従属変数として、一元配置分散分析を行った。その結果、越境者文化意識の 5 因子において、主効果がいずれも有意となった (他文化との共存志向、 $F(3, 354)=4.98, p=.002$; 母国へのルーツ認識、 $F(3, 354)=14.24, p<.001$; ホスト文化への合流、

$F(3, 354) = 11.97, p < .001$; 自文化の客観視、 $F(3, 354) = 3.55, p = .015$; ホスト文化の相対化、 $F(3, 354) = 4.76, p = .003$ 。

続いて、多重比較 (Bonferroni 法) を実施したところ、他文化との共存志向については、「統合」と「同化」が「周辺化」より有意に高かった (Figure 5.1)。母国へのルーツ認識については、「統合」と「分離」が「周辺化」と「同化」より有意に高かった (Figure 5.2)。ホスト文化への合流については、「統合」が「分離」より有意に高く、「同化」と「分離」が「周辺化」より有意に高かった (Figure 5.3)。自文化の客観視については、「統合」が「周辺化」より有意に高かった (Figure 5.4)。ホスト文化の相対化について、「統合」が「周辺化」より有意に高かったことがわかった (Figure 5.5)。

Figure 5.1

他文化との共存志向の群間比較

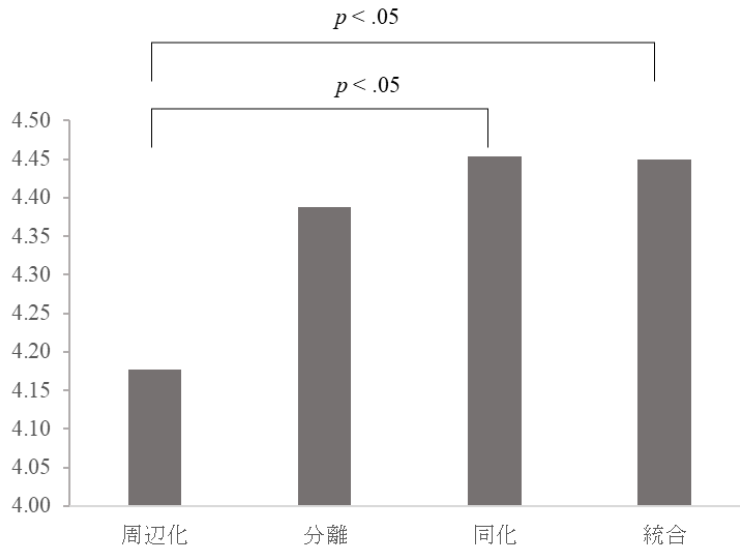


Figure 5.2

母国へのルーツ認識の群間比較

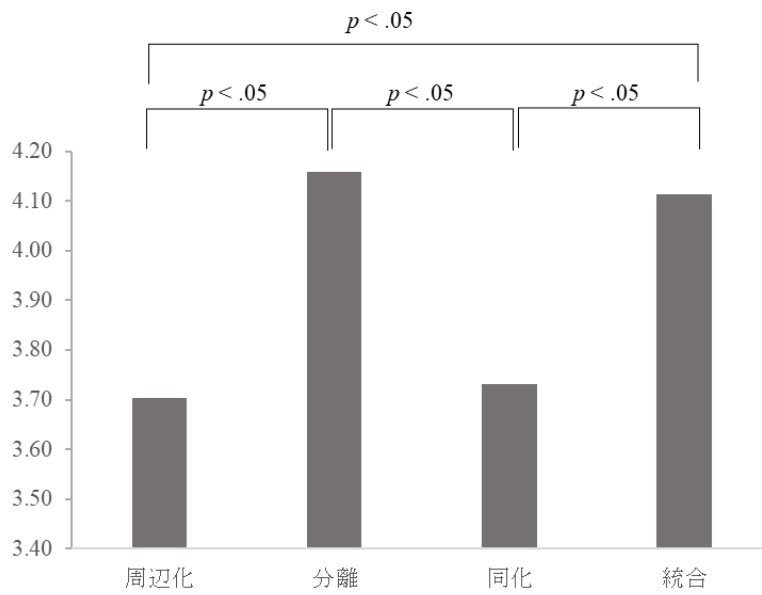


Figure 5.3

ホスト文化への合流の群間比較

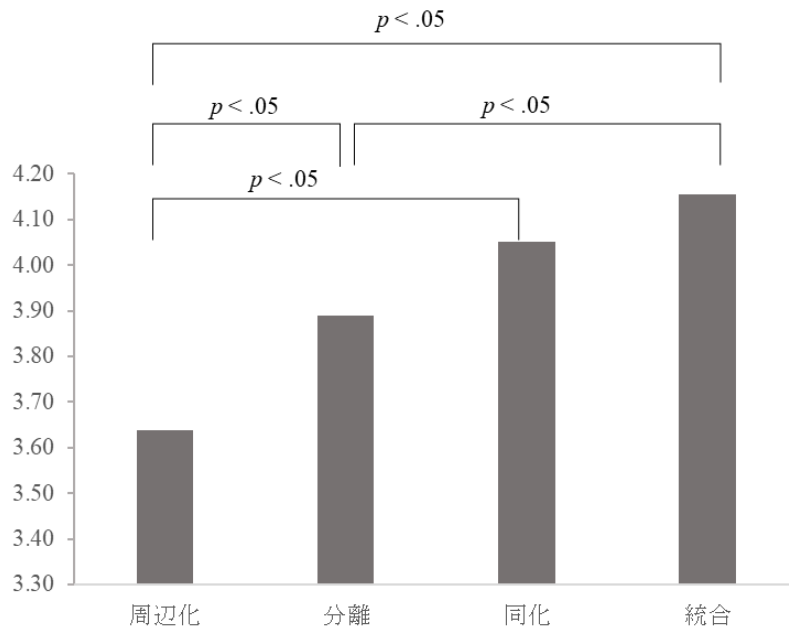


Figure 5.4

自文化の客観視の群間比較

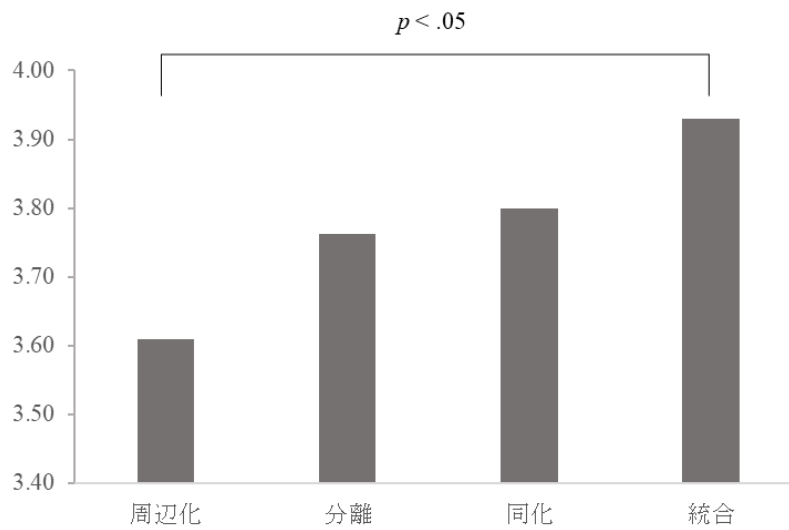
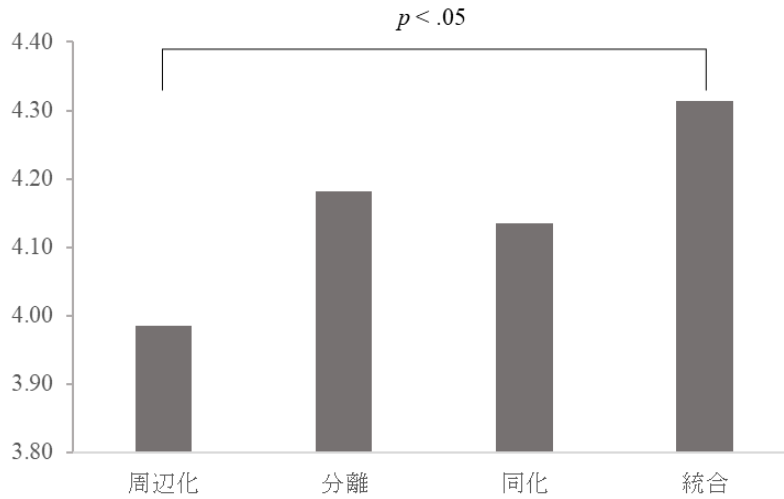


Figure 5.5

ホスト文化の相対化の群間比



3.3.3 主観的ウェルビーイングについての結果

2 回の質問紙調査で得た 125 名のデータを用いて、「主観的ウェルビーイング」と越境者文化意識 5 因子との相関分析を行った結果、「主観的ウェルビーイング」と有意な相関を持つ越境者文化意識の因子は、「他文化との共存志向」($r = .28, p < .01$) 及び「ホスト文化への合流」($r = .24, p < .01$) であった (Table 5.6)。

Table 5.6

主観的ウェルビーイングと越境者文化意識 5 因子の記述統計量と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5
1 主観的ウェルビーイング	3.01	.41					
2 他文化との共存志向	4.43	.48	.28**				
3 母国へのルーツ認識	3.95	.65	.01	.12			
4 ホスト文化への合流	4.07	.55	.24**	.55**	.11		
5 自文化の客観視	3.94	.53	.00	.32**	-.12	.48**	
6 ホスト文化の相対化	4.23	.53	.15	.62**	.28**	.67**	.46**

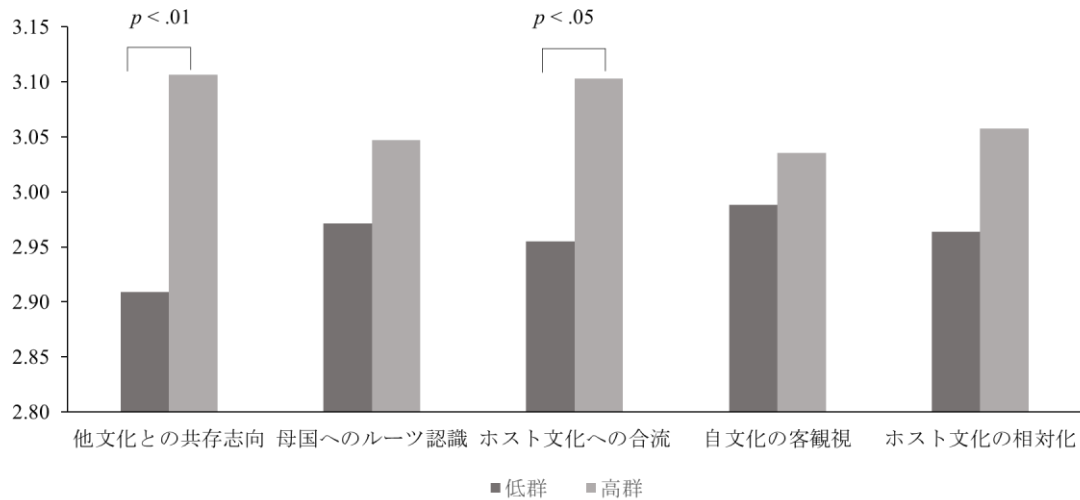
** $p < .01$

越境者文化意識の 5 因子における高低群間では、次のような有意差がみられた。「他文化

との共存志向」($t(123)=2.74, p<.01$)と「ホスト文化への合流」($t(123)=1.96, p<.05$)では、高群が低群より有意に主観的ウェルビーイングが高かった。しかし、「母国へのルーツ認識」、「自文化の客観視」、「ホスト文化の相対化」の3因子では、有意な差はみられなかった(Figure 5.6)。

Figure 5.6

主観的ウェルビーイングの群間比較



3.4 考察

3.4.1 越境者文化意識と文化変容方略

「周辺化」は「同化」と「統合」よりも「他文化との共存志向」の得点が有意に低かったことから、「周辺化」が「他文化との共存志向」を特徴とする人たちであるとは解釈できないことがわかった。Lu et al. (2012) で推測した「第三文化アイデンティティ」や自由人（李・田中，2010）と異なり、「他文化との共存志向」は「周辺化」が伴っている現象とは考えにくい。第4章の面接調査でも言及されたが、今回の量的調査でも日本にいる中国出身長期滞在者の二文化を越える志向性が、両文化とも希薄な周辺化ではないと考えるのが適切であろう。文化への意識が単に希薄であることと、ホスト文化とエスニック文化を越えていく意識があることは異なるといえよう。

さらに、日本文化と共存できる人たちは、中国文化に閉じこもる人たちより、両文化以外の文化との共存意識も高いことが明らかになった。これは、「他文化との共存志向」が高い人は、母文化ではない文化に慣れていることを示唆している。「他文化との共存志向」と「ホスト文化への合流」、「ホスト文化の相対化」、「自文化の客観視」の間に正の相関がみられたことから、中国出身長期滞在者にとっての「他文化との共存志向」は、自他双方の文化を理解できるようになることで、高まる可能性が考えられる。

「母国へのルーツ認識」においては、「統合」と「分離」が、「周辺化」と「同化」より有

意に高かった。この結果から、エスニック志向が高いほど、母国へのルーツ認識が高いことが示唆される。

「ホスト文化への合流」においては、「統合」が「分離」と「周辺化」より高いことから、ホスト志向を実践している人のほうが、ホスト文化への合流意識も高いことが示唆された。一方、「分離」が「周辺化」より高い結果もみられた。これは、自文化を意識している人は、ホスト文化への合流を実践することにも、自覚的にならざるを得ない可能性を示している。文化というものへの意識があるかないかで、「ホスト文化への合流」においては、違いが出るということが示唆された。

「自文化の客観視」と「ホスト文化の相対化」においては、「統合」が「周辺化」より高かった。これは、「統合」の人々が、俯瞰的な視点を持っており、母文化に対しても、ホスト文化に対しても、批判的にみることが可能なことが示唆されている。この点からも、自他双方の文化について、どちらか片方のみをポジティブに評価するのではなく、相対化して自他双方の文化を理解することが、異なる文化圏で適応する上では必要であることがわかる。

越境者文化意識の 5 つ下位因子のいずれにおいても、「統合」の得点が有意に高かった。「統合」の人々は、ホスト文化に合流できることや、エスニック文化を維持できるだけではなく、両文化の批判もできるため、熟知の文化意識を持つことが彼らの特色といえよう。しかしながら、単に文化意識が希薄というだけで分類される「周辺化」の実態は、まだ明確になっておらず、今後の課題といえる。そして、在日コリアンの「自由人」志向は、脱文化として考えられるのに対し、在日中国出身長期滞在者の「他文化との共存志向」は、汎文化的で博愛的な志向性といえよう。「他文化との共存志向」は、在日コリアンの「自由人」志向とは異なるものであることがわかる。文化意識をしっかり持ち、その先へ行くというのが、在日中国出身長期滞在者の姿であろう。

3.4.2 越境者文化意識と主観的ウェルビーイング

本研究では、日本在住中国出身長期滞在者において、「他文化との共存志向」が高い人は低い人よりも、主観的ウェルビーイングが良好であることがわかった。よって、仮説 1 の『「他文化との共存志向」において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である』が支持された。自国文化や価値観を大切にしながらも、他の国や地域の文化を否定せず、対立ではなく協力する志向性を持つ人は、より幸せを感じていることが示唆された。「他文化との共存志向」の構成項目から、当該因子の得点が高い人々は、前向きで、他の文化を尊重できる人々であることがわかる。このような人々は心の余裕がある人々とも考えられる。ここでの主観的ウェルビーイングが「他文化との共存志向」の結果なのか、それとも他文化を尊重できることが心の安定の現れなのかは不明であり、更なる調査が必要となる。

さらに、「ホスト文化への合流」が高い人は低い人よりも、主観的ウェルビーイングが良

好であった。仮説3の『『ホスト文化への合流』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である』が支持された。これは第2章の結果の裏書きといえる。日本というホスト社会において、ホストの文化意識を強く持つことが、幸福感を得ることに繋がることが示唆される。言い換えれば、「非移民国家」(Sam & Berry, 2010)である日本で幸せに暮らす人においては、ホストメンバーと同様の振る舞いを取り入れている傾向があるといえる。ホストへの合流意識がある人は、ホスト社会に馴染んでおり、安定的といえよう。

一方、母国へのルーツ認識は、主観的ウェルビーイングにおいて、有意差がみられなかった。よって、仮説2の『『母国へのルーツ認識』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である』は支持されなかった。日本で生活する上で、自国への誇りや自信は、主観的ウェルビーイングに繋がるものとはいえなかった。

そして、中国の文化を客観的にみられることも、日本の文化を相対的にみられることも、主観的ウェルビーイングにおいては、高群と低群の間で有意な差がみられなかった。よって、仮説4の『『自文化の客観視』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である』、及び仮説5の『『ホスト文化の相対化』において、高群が低群より、主観的ウェルビーイングが良好である』は支持されなかった。日本で生活する上で、批判的に両文化をみることが可能であることは主観的ウェルビーイングに大きく関わるものとはいえない。エスニック文化及びホスト文化に対して批判的にみられる人々は、両文化を熟知する「統合」の人々となる可能性が高いにもかかわらず、主観的ウェルビーイングには大きく関わらなかった。これは、日本社会の同化圧力の強さと繋がるかもしれない。第2章では、主観的ウェルビーイングはエスニック文化を保持するかどうかに関係なく、「統合」の良さは突出しないと論じた。本研究の結果もそれを裏書きする。「統合」の人々の主観的ウェルビーイングが他の文化変容方略より有意に高いとされない限り、両文化に対する批判的な視点は、主観的ウェルビーイングと大きく関わらないだろう。

第4節 総合考察と今後への展望

研究1においては、海外にいる中国出身者の越境者文化意識を測定する尺度を試作し、日本にいる中国出身長期滞在者のデータを分析し、尺度の妥当性及び信頼性を検証した。研究2においては、越境者文化意識と文化変容方略の関連、そして越境者文化意識と主観的ウェルビーイングとの関連を確認した。

今回の量的調査においては、二文化を越える文化的意識「他文化との共存志向」が越境者文化意識の一つの構成因子として確認された。さらに、ホスト文化やエスニック文化への批判的な視点を持っていることも、越境者文化意識の構成因子であることが確認された。よって、二文化に限定した文化変容方略モデル(Berry et al., 1989)が、個人の文化意識を読み解くのに不十分であることがわかった。文化的意識は複雑で、ホスト志向及びエスニック志向

だけで、個人の文化意識は測れないことが明らかになった。

さらに、「自由人」(Lee & Tanaka, 2017) や「第三の文化アイデンティティ」(Lu et al., 2012) といった自己認識から発想を得て、研究1で出た因子「他文化との共存志向」が高いほど、主観的ウェルビーイングが高いことを検証した。「他文化との共存志向」の高い人は低い人よりも、主観的ウェルビーイングの得点が有意に高いことから、自国文化や価値観を大切にしつつも他の国や地域の文化と対立せず、協力する姿勢を持つ人は、より幸福を感じていることが示唆された。両文化が併存する「統合」だけではなく、両文化を越えていく意識があったほうがより幸せであることが本研究の発見といえよう。

本研究に残された課題は以下である。1つ目は、越境者文化意識尺度の項目を精緻化することである。越境者文化意識尺度は、意識に焦点を当てた尺度であるにもかかわらず、「ホスト文化への合流」のほうには、「●●の人付き合いの仕方に合わせて、●●の人々と付き合うことができる」、「●●の習慣に合わせて振る舞うことができる」などの行動レベルの項目と意識レベルの項目の混在がみられた。これは、尺度開発の際に、面接調査で得た結果に基づいて質問項目を作成したためである。エスニック文化に関しては、記憶の中の故郷に基づき、意識レベルのことが語られたのに対して、ホスト文化に関しては目の前の現実に基づいて、意識レベルと行動レベル両方が語られた。よって、エスニック文化かホスト文化かによって、語られたことのレベルが異なった。今後修正版を作成する際には、意識のみに絞って測定することも一つの案であろう。さらに、二文化を越える志向性に関しては、他文化への親和性を尋ねているが、英語能力のような個人の能力などは尋ねていない。こうした個人特性や環境評価についての項目を加えた総合的検討も、修正版に加えたい。

2つ目の課題としては、本調査には、高学歴の人が多かった点で調査対象者の属性が限定的であったといえる。今回の調査対象者にとって、「他文化との共存志向」は、地球規模で活躍したい、他文化を尊重して、平和的にみんなと仲良くしたいという志向性であったと推察される。外国で高度人材となれる能力を有している者は高度な専門性を獲得している、すなわち、より上のレベルの学歴を有しているが、本研究で得られた結果は少なくともこのような人々に該当するというレベルにとどまる。同様の志向性が、高度人材以外の中国人にもみられるかを調べるため、今後の調査では対象を広げる必要があるだろう。

3つ目は、他国の二文化に囚われていない現象（例えば、国際人や地球市民）と本研究で見出された「他文化との共存志向」との相違については明らかになっていないため、比較検討することである。このような比較によって、文化的意識の複雑さがわかるだろう。そして、二つ以上の文化と接する際に、越境者などが、どのように文化的態度を集約するか、あるいは選択するかについてもより明白になることが期待できる。

4つ目の課題は、分析方法である。本研究は初歩的な探索であったため、*t* 検定のみを行ったが、「他文化との共存志向」などの志向性が、主観的ウェルビーイングの原因なのか、

結果なのか、他の分析方法でさらなる検討をする必要がある。そして、本研究では、ポジティブ心理学に焦点を当てたため、主観的ウェルビーイングのみを取り上げたが、今後ネガティブ感情の側面、例えば抑うつなども視野に入れるべきである。さらに、越境者たちの異文化適応を研究する際には社会経済的側面も重要だと考えられるため、継続的に検討する必要がある。

第6章 結論

6.1 本研究で得られた知見のまとめ

本稿では日本に住んでいる中国出身長期滞在者の異文化適応について、文化変容方略及び二文化を越える志向性と主観的ウェルビーイングとの関連性の観点から論じてきた。本章では、研究の総括を行う。まず、研究の流れに沿って知見をまとめ、今回得られた示唆を整理したい。序章における「Figure 1.2 研究の全体像 (1)」に対応し、それぞれの章で得られた知見を簡潔に書き加え、「Figure 6.1 研究の全体像 (2)」に示した。

序章では、研究の背景として、日本にいる中国出身長期滞在者を対象とした異文化適応研究の必要性について論じた。海外では文化変容方略 (Berry et al., 1989) が異文化適応を研究する際によく使われる概念ではあるが、二文化に限定されているという指摘もある。二文化を越える志向性が中国出身長期滞在者に存在するかどうかを確認した上で、その機能を探る研究が必要とされる。本稿では、在日中国人が異文化適応するための探索的研究を行うこととし、文化変容方略と主観的ウェルビーイングの関連、二文化を越える志向性の有無、二文化を越える志向性の機能の3つの観点から検証を行った。

まず、越境者たちが慣れない海外生活により精神的健康を損ないやすいことから、1つ目の研究目的を「日本にいる中国出身長期滞在者における文化変容方略と主観的ウェルビーイングとの関連を探ること」とした。量的手法の質問紙調査によって検討し、その結果は第2章で考察された。中国出身長期滞在者にとって好適応に繋がる文化変容方略は、「統合」と「同化」両方である。「統合」だけではなく、「同化」も同程度に好適応であるということは、ホスト社会の移民への態度の特徴及び、調査対象者の長期滞在というステータスから解釈できる。海外で多く検証されてきた統合が有利との定説は、日本最大のエスニックグループでは支持されなかった。一方、主観的ウェルビーイングについては、下位因子によって異なるが、「分離」または「分離」及び「周辺化」の人々の主観的ウェルビーイングが有意に低いことが示された。つまり、エスニック文化に傾くことは、心理的適応の低さに繋がる。さらに、ホスト志向を測定する項目には、日本の生活習慣に馴染んでいるかどうかや、日本語を不自由なく使えるかどうかを尋ねる項目が採択された。在日中国出身者においては、ホストの社会文化に上手く馴染むことが主観的ウェルビーイングの獲得には重要と考えられた。

次に、文化変容方略モデル (Berry et al., 1989) には限界があることを出発点として、二文化を越える志向性を探索した。2つ目の研究目的「日本にいる中国出身長期滞在者における二文化を越える文化的志向性の有無及びその様相を確認する」については、具体的な情報を得ることができる聞き取り調査がふさわしいと考え、在日中国出身長期滞在者に、二文化との関わり及び二文化を越える志向性について質的手法による調査を行った。

第3章では、まず、長年日本に滞在してきた永住者などに焦点を当て検討した。彼らの二文化との関わりから見れば、永住者たちは留学生と違い、時間をかけてホスト文化を学習してきたという特徴がみられた。それによって永住者は、公的な場面において、日本式のやり方に準じた振る舞いをとることができる。一方、食生活のような、より私的な場面では、中国式のやり方を好んでいた。つまり、領域によって、異なる文化変容方略が使われていることが確認された。そして、永住者は相手が中国人か日本人かによって、接し方を変えていた。このように、自称カテゴリと関係なく、場面に応じて、行動を日本式と中国式の間で自由に切り替えることができるのが、日本に長期滞在する中国人の振る舞いにおける特徴といえよう。さらに、二文化を越える文化的志向性を、自称カテゴリとして選んだ人がいたことから、永住者における二文化を越える志向性の存在が確認された。これは超越志向と命名し、中国文化及び日本文化を拡張した文化的意識である。中国文化や日本文化に囚われたくない、二文化を超越した文化的志向性を描き出した本研究からは、従来の留学生の異文化適応研究にはない知見が得られたと考えられる。また、文化的な基盤を韓国・朝鮮に持っており、文化的には日本人とは異なっていることを自覚しているながらも、コリアンであることが理由で差別を受けるため、コリアンであることを隠して、日本人らしく振る舞わなければならない、日本人とコリアンの両方のカテゴリに葛藤を抱き、その葛藤から自由になりたいという意味で、「自由人」という概念が生成された在日コリアンとは大きく異なる、二文化を越える志向性を中国人が持っていることが示された点でも本研究は意義深い。

永住者における二文化との関わりや二文化を越える文化的志向性を探索した後、調査対象者の範囲を広げ、永住者の予備軍といえる日本で高度外国人材となった元留学生を対象に、同様の検討を行った（第4章）。元留学生は、幅広く日本社会と接し、日本社会のルールを学習する機会を持ってきたが、母国での社会人経験が少ないため、ホスト文化寄りの文化的志向性が明らかになった。そして二文化との関わりについての具体的な語りの中から、日本文化を受容しつつも母文化を顧みる、母文化を維持しながら、日本文化と比較する傾向がみられた。つまり、クリティカルに二文化をみていることが明らかになった。友人関係の観点からみれば、仕事以外で日本人と接する機会は必ずしも豊富でなく、ホストとの対人関係の発展は限定的と考えられた。また、超越志向は元留学生にも確認された。これは二文化を発展させる志向性であり、英語やインターネットの駆使といった個人能力が含まれた。さらに、二文化への志向性についての自己評価をみる際に、超越志向を選んだ人は、「周辺化」に分類されなかった。よって、超越志向は二文化の希薄状態ではなく、Rudmin & Ahmadzadeh (2001) が指摘するように「周辺化」の埋め合わせでもないことが示唆された。

第3章と第4章において、越境者の文化的志向性に焦点を当てたが、在日中国人を対象とした心理学研究では、二文化を越える志向性はいうまでもなく、文化変容方略についての言及も少ない。本研究は日本社会で生活する外国出身者が、母文化と日本文化を越える志向

性、そしてその志向性と異文化適応の関連についての研究の先行例として意味がある。上記2つの質的調査では、二文化を越える志向性を探索したが、二文化との関わりについての語りも多数得られた。越境者の文化的志向を単なる二文化を越える志向性でみることが不十分であることがわかった。また、在日中国出身者にとって、超越志向は在日コリアン研究で見出された「自由人」と異なり、二文化を拡張させる、発展させる性質を持つと考えられた。よって、異文化適応との関連を検討する際に、新たな尺度を開発する余地があることがわかった。

第5章の研究1では尺度を開発し、その妥当性と信頼性を考察した。越境者文化意識は「他文化との共存志向」、「母国へのルーツ認識」、「ホスト文化への合流」、「自文化の客観視」と「ホスト文化の相対化」という5因子によって構成された概念であることが明らかになった。二文化を越える文化的志向性が1つの下位因子、「他文化との共存志向」として確認された。本稿における3つ目の研究目的に沿って、二文化を越える志向性と主観的ウェルビーイングとの関連を探索した。

より具体的に、中国出身者の文化的志向性がどのように心理的適応と関わるかを明らかにするため、越境者文化意識の5因子と主観的ウェルビーイングとの関連を確認した。それに先立ち、主観的ウェルビーイングと越境者文化意識との関連を確認した。調査4で示した通り、「他文化との共存志向」が「周辺化」と同一のものではないことが示唆された。そして、中国出身長期滞在者において、「他文化との共存志向」が高ければ主観的ウェルビーイングが高いこと、他の文化を否定せず共に生きていける意識が良好な心理的適応と繋がることが明らかになった。

6.2 本研究の限界と今後の課題

本研究は在日中国出身長期滞在者における異文化適応の初期的な探索的研究であったため、以下のような研究の限界と課題がある。

質問紙調査に関しては、調査1は307名、調査4は358名における調査結果であり、日本全土にいる中国出身長期滞在者を代表しているとはいえない。悉皆調査の実施は困難であり、今回は母語と同胞ネットワークを活用したが、サンプルは限られた範囲に留まる。今後はより大きなサンプルで、性別や年齢、居住期間、学歴、日本語レベルなどの統制をした上で調査を行い、日本における中国出身者の文化変容方略、二文化を越える志向性と心理的適応に関わるそれぞれの影響の大きさについての検討が望まれる。面接調査に関しては、調査2と調査3を併せて、日本に滞在する19人における調査の結果であった。それはそのまま一般化、普遍化されるものではない。こちらも日本全土で暮らす中国出身者を代表しておらず、今回の調査対象者から得られた限定的な知見に過ぎない。

今後の課題として、以下4点を挙げる。1つ目は、越境者文化意識尺度の質問項目の精選

である。二文化を越える意識として、親和的な他文化への見方や対人的な姿勢は尋ねたが、世界での活躍の要件となる個人の能力や資質に関する認識は尋ねていない。第4章では、超越志向を語る際に、「英語ができるから、行動範囲は中国と日本に制限されなくてもよい」との語りがみられた。世界での通用性に繋がる能力を反映する項目を入れることが考えられる。さらに、意識レベルの項目と行動レベルの項目との混在もみられたため、行動レベルの項目を削除すべきである。今後、質問項目を厳選したり、改良したりして尺度を洗練させる必要がある。

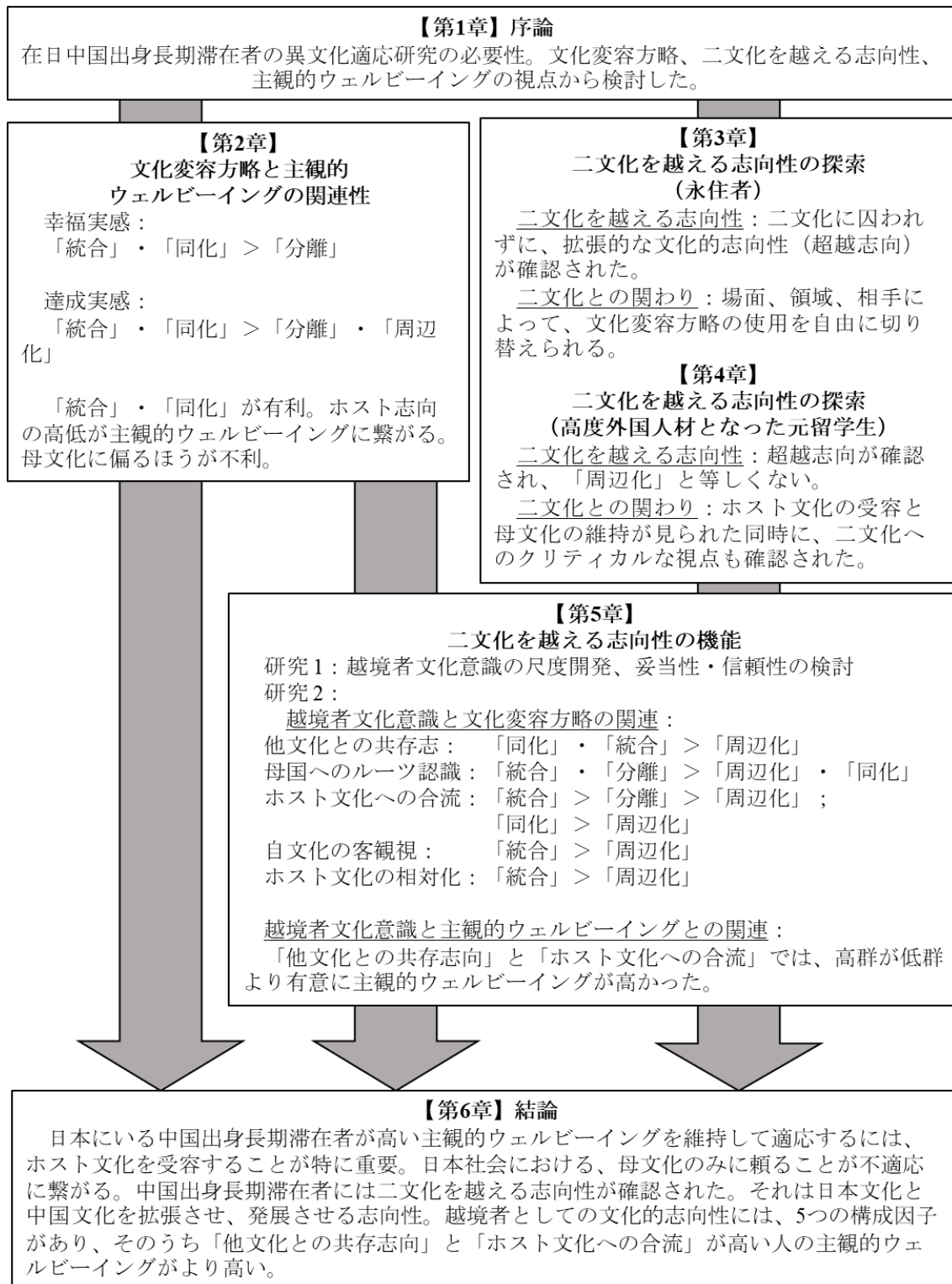
2つ目の課題は、在日コリアン研究で見出された「自由人」(李・田中, 2010) との相違のより詳細な検討が必要となる。同じ受け入れ社会である、日本での在日外国人の滞在の仕方や社会的環境と、異文化滞在者の意識との関連の検討が必要かもしれない。

3つ目の課題は適用性の検討である。もとにしたインタビューの人数は限られており、滞在資格からみれば永住者と高度人材のみとなっている。中華料理人のような、立場の異なる人であれば、また異なる視点から語られるかもしれない。今後、異なるステータスで滞在する中国出身者においても同様の結果が得られるかは検証の余地がある。また、本研究では日本に在住する中国人が対象であったが、ホスト社会が異なれば、二文化との関わり方も二文化を越える志向性も異なる視点から語られるかもしれない。したがって、日本以外の国や地域に暮らす中国人を対象とした検討も必要だろう。

最後に、本稿では主観的ウェルビーイングを心理的変数として取り上げたが、今後の研究では、自己効力感などの多様な心理的変数を取り上げていく必要がある。さらに、他の国・地域に居住する中国出身の越境者文化意識が、主観的ウェルビーイングといかなる関連を持つのか、調査範囲の拡大とあわせて、異文化滞行者と滞在社会の多様な関係や、地域比較の観点を組み込むことも考えなければならないだろう。

Figure 6.1

研究の全体像 (2)



引用文献

- Alegria, M., Shrout, P. E., Woo, M., Guarnaccia, P., Sribney, W., Vila, D., Polo, A., Cao, Z., Mulvaney-Day, N., Torres, M., & Canino G. (2007). Understanding differences in past year psychiatric disorders for Latinos living in the US. *Social Science & Medicine*, 65(2), 214-230.
- Anderson, J. R., & Guan, Y. (2018). Implicit acculturation and the academic adjustment of Chinese student sojourners in Australia. *Australian Psychologist*, 53(5), 444-453.
- Au, A. Y. W., Garey, J. G., Bermas, N., & Chan, M. M. (1998). The relationship between acculturation and job satisfaction among Chinese immigrants in the New York city restaurant business. *International Journal of Hospitality Management*, 17(1), 11-21.
- Barry, D. T. (2001). Development of a new scale for measuring acculturation: The East Asian Acculturation Measure (EAAM). *Journal of Immigrant Health*, 3(4), 193-197.
- Berry, J. W. (1970). Marginality, stress and ethnic identification in an acculturated Aboriginal community. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 1(3), 239-252.
- Berry, J. W. (1976). *Human Ecology and Cognitive Style*. Wiley.
- Berry, J. W. (1992). Acculturation and adaptation in a new society. *International Migration*, 30, 69-85.
- Berry, J. W. (1997). Immigration, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology*, 46(1), 5-34.
- Berry, J. W. (2006). Contexts of acculturation. In D. L. Sam, & J. W. Berry (Eds.), *The Cambridge Handbook of Acculturation Psychology* (pp. 27-42). Cambridge University Press.
- Berry, J. W. (2019). *Acculturation: A Personal Journey Across Cultures*. Cambridge University Press.
- Berry, J. W., & Hou, F. (2016). Immigrant acculturation and wellbeing in Canada. *Canadian Psychology*, 57(4), 254-264.
- Berry, J. W., Kalin, R., & Taylor, D. (1977). *Multiculturalism and Ethnic Attitudes in Canada*. Ministry of Supply and Services.
- Berry, J. W., Kim, U., Minde, T., & Mok, D. (1987). Comparative studies of acculturative stress. *International Migration Review*, 21(3), 491-511.
- Berry, J. W., Kim, U., Power, S., Young, M., & Bujaki, M. (1989). Acculturation attitudes in plural societies. *Applied Psychology*, 38(2), 185-206.
- Berry, J. W., Phinney, J. S., Sam, D. L., & Vedder, P. (2006). Immigrant youth: Acculturation, identity, and adaptation. *Applied Psychology*, 55(3), 303-332.
- Berry, J. W., & Sabatier, C. (2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural*

- Relations*, 34(3), 191-207.
- Boski, P. (2008). Five meanings of integration in acculturation research. *International Journal of Intercultural Relations*, 32(2), 142-153.
- ト 雁 (2017) . 在日中国人看護師の異文化適応問題に関して——現場調査のデータ分析より—— 淑徳大学研究紀要総合福祉学部・コミュニティ政策学部, 51, 117-130.
- Chan, P. C., Tsang, C. T., Tse, A. C., Wong, C. C., Tang, H. N., Law, W. Y., Lau, C. Y., Lit, T. C., Ng., Y. C., & Ho, M. (2022). Psychological Well-being and Coping Strategies of Healthcare Students during the Prolonged COVID-19 Pandemic. *Teaching and Learning in Nursing*, 17(4), 482-486.
- Chen, S. X., Benet-Martínez, V., & Harris Bond, M. (2008). Bicultural identity, bilingualism, and psychological adjustment in multicultural societies: immigration-based and globalization-based acculturation. *Journal of Personality*, 76(4), 803-838.
- Chia, A. L., & Costigan, C. L. (2006). A person-centred approach to identifying acculturation groups among Chinese Canadians. *International Journal of Psychology*, 41(5), 397-412.
- Choi, Y., Park, M., Lee, J. P., Yasui, M., & Kim, T. Y. (2018). Explicating acculturation strategies among Asian American youth: Subtypes and correlates across Filipino and Korean Americans. *Journal of Youth and Adolescence*, 47(10), 2181-2205.
- de Saissy, C. K. M. (2009). Acculturation, self-efficacy and social support among Chinese immigrants in Northern Ireland. *International Journal of Intercultural Relations*, 33(4), 291-300.
- Diener, E. D., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49(1), 71-75.
- Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2003). Personality, culture, and subjective well-being: Emotional and cognitive evaluations of life. *Annual Review of Psychology*, 54(1), 403-425.
- 江畑 敬介・曾 文星・江川 緑 (1992) . 中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ (第 3 報) ——文化受容的側面—— 社会精神医学, 15, 186-195.
- 福岡 安則 (1993) . 在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ—— 中公新書
- Gatina, L. (2016). Does money buy happiness? Financial and general well-being of immigrants in Australia. *Journal of Behavioral and Experimental Economics*, 63, 91-105.
- 葛 文綺 (2007) . 中国人留学生・研修生の異文化適応 溪水社
- 郷司 寿朗 (2018) . 元留学生外国人社員の職場での異文化適応に関する研究——同化と異化の志向性選択の経験と意味に注目して—— 多文化関係学, 15, 19-34.
- 龔 佳奕 (2018) . 多文化就労場面における中国人看護師の適応実態に関する調査 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書, 334, 67-73.
- 過 放 (2002) . 留学生 可児 弘明・斯波 義信・游 仲勲 (編) 華僑・華人辞典 (p. 825) 弘文堂

- 過 放 (1999) . 在日華僑のアイデンティティの変容——華僑の多元的共生—— 東信堂
- Gupta, A., Leong, F., & Valentine, J. C. (2013). A meta-analytic study: The relationship between acculturation and depression among Asian Americans. *American Journal of Orthopsychiatry*, 83(2-3), 372-385.
- 原尻 英樹 (1989) . 在日朝鮮人の生活世界 弘文堂
- 法務省 (2015) . 高度人材のための新しい在留資格の創設について 法務省だよりアカレンガ, 48, 1. Retrieved April 24, 2024 from <https://www.moj.go.jp/KANBOU/KOHOSHI/no48/1.html>
- 堀毛 一也 (2019). ポジティブなこころの科学——人と社会のよりよい関わりをめざして——サイエンス社
- 一條 玲香 (2015) . 在住中国人女性の異文化適応における困難とサポート要因——日本人と結婚した中国人女性の PAC 分析を通して—— 心理臨床学研究, 33(1), 59-69.
- 伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子・川浦 康至 (2003) . 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74 (3), 276-281.
- 江 志遠・野島 一彦 (2012) . 在日中国人就学生の文化受容態度とメタルヘルスとの関連 心理臨床学研究, 30(5), 715-723.
- 吉 沅洪 (2003) . 日中比較による異文化適応の実際 溪水社
- Keyes, C. L., Shmotkin, D., & Ryff, C. D. (2002). Optimizing well-being: the empirical encounter of two traditions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82(6), 1007-1022.
- Kim, B. S. K., & Alamilla, S. G. (2017). Acculturation and enculturation: A review of theory and research. In A. M. Czopp & A. W. Blume (Eds.), *Social Issues in Living Color: Challenges and Solutions from the Perspective of Ethnic Minority Psychology: Societal and Global Issues* (pp. 25–52). Praeger/ABC-CLIO.
- Kim, U. (1984). *Psychological Acculturation of Korean Immigrants in Toronto: A Study of Modes of Acculturation, Identity, Language, and Acculturation Stress* (Unpublished M.A. thesis). Queen's University.
- Kirmayer, L. J., & Minas, H. (2000). The future of cultural psychiatry: an international perspective. *The Canadian Journal of Psychiatry*, 45(5), 438-446.
- 小泉 かさね (2021). 大学における研究室コミュニティへの参加の実態と課題——理系研究室での留学生の正統的周辺参加に着目して—— 教育学研究, 88(2), 273-284.
- Komai, H. (2001) . *Foreign Migrants in Contemporary Japan*. Trans Pacific Press.
- Koneru, V. K., De Mamani, A. G. W., Flynn, P. M., & Betancourt, H. (2007). Acculturation and mental health: Current findings and recommendations for future research. *Applied and Preventive Psychology*, 12(2), 76-96.

- Kushnirovich, N., & Youngmann, R. (2017). Paths to success of Israeli immigrants from different countries of origin. *International Journal of Intercultural Relations*, 60, 51-59.
- 李 正姫・田中 共子 (2010) . 在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度とメンタルヘルス (1) ——文化的アイデンティティの自己認識に関する面接調査—— 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 30, 177-196.
- 李 正姫・田中 共子 (2017) . 在日コリアンのメンタルヘルスに影響する要因の検討——認知面と行動面から—— 応用心理学研究, 42, 265-266.
- Lee, J. H., & Tanaka, T. (2017). Superordinate identity in Zainichi Koreans (Koreans Living in Japan). *IAFOR Journal of Psychology & the Behavioral Sciences*, 3(1), 49-60.
- Lee, J. H. & Tanaka, T. (2019). Acculturation attitudes among Zainichi Koreans living in Japan. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 44(3), 162-170.
- Leong, F. T., & Chou, E. L. (1994). The role of ethnic identity and acculturation in the vocational behavior of Asian Americans: An integrative review. *Journal of Vocational Behavior*, 44(2), 155-172.
- 李 原翔・佐野 秀樹 (2009) . マイノリティの学業達成・文化変容およびカウンセリン 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 60, 193-202.
- Liu, W. M., Pope-Davis, D. B., Nevitt, J., & Toporek, R. L. (1999). Understanding the function of acculturation and prejudicial attitudes among Asian Americans. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 5(4), 317-328.
- Lu, Y., Samaratunge, R., & Härtel, C. E. (2012). The relationship between acculturation strategy and job satisfaction for professional Chinese immigrants in the Australian workplace. *International Journal of Intercultural Relations*, 36(5), 669-681.
- 前田 憲次 (2018) . フィリピン人技能実習生のメンタルヘルスに関連するリスク要因——文化変容方略に着目して—— 国際保健医療, 33 (4), 303-312.
- Marin, G., & Gamba, R. J. (1996). A new measurement of acculturation for Hispanics: The Bidimensional Acculturation Scale for Hispanics (BAS). *Hispanic Journal of Behavioral Sciences*, 18(3), 297-316.
- Masgoret, A. M., & Ward, C. (2006). Culture learning approach to acculturation. In D. L. Sam, & J. W. Berry (Eds.), *The Cambridge Handbook of Acculturation Psychology* (pp. 58-77). Cambridge University Press.
- 箕口 雅博 (1996) . 国帰国者家族の適応と援助——二世青年・児童の場合を中心に—— 青少年問題, 43(4), 16-23.
- 長松 奈美江 (2022) . 移民のメンタルヘルス——移住後のストレス要因と社会関係に注目して—— 永吉 希久子 (編) 日本の移民統合——全国調査から見る現況と障壁 (pp.

163-185) 明石書店

- 中野 祥子・田中 共子・奥西 有理 (2017). 在日ムスリム留学生の異文化滞在に伴う困難の変容——国立大学理工系学生 5 名の 2 年間を振り返る事例分析—— 異文化間教育, 46, 140-151.
- Nesdale, D., & Mak, A. S. (2000). Immigrant acculturation attitudes and host country identification. *Journal of Community & Applied Social Psychology, 10*(6), 483-495.
- 岡村 佳代・文 吉英・加賀美 常美代 (2016). 多文化就労場面における韓国人元留学生の異文化間葛藤と解決方略 高等教育と学生支援お茶の水女子大学紀要, 7, 106-119.
- Okunishi, Y., & Tanaka, T. (2011). Social skills and cross-cultural adaptation of international students in Japan. *Progress in Asian Social Psychology Series: Individual, Group and Cultural Processes in Changing Societies, 8*, 76-92.
- 尾ノ井 美由紀・早川 和生 (2003). 在日中国人の身体的・精神的健康度と生活習慣——H 市における健康ニーズ実態調査から—— 日本地域看護学会誌, 5(2), 70-78.
- 大竹 恵子 (2020). 健康 北村 英哉・内田 由紀子 (編) 社会心理学概論 (pp. 307-324) ナカニシヤ出版
- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M. J. (1936). Memorandum for the study of acculturation. *American Anthropologist, 38*(1), 149-152.
- Reysen, S., & Katzarska-Miller, I. (2013). A model of global citizenship: Antecedents and outcomes. *International Journal of Psychology, 48*(5), 858-870.
- Rudmin, F. W. (2003). Critical history of the acculturation psychology of assimilation, separation, integration, and marginalization. *Review of General Psychology, 7*(1), 3-37.
- Rudmin, F. W., & Ahmadzadeh, V. (2001). Psychometric critique of acculturation psychology: The case of Iranian migrants in Norway. *Scandinavian Journal of Psychology, 42*(1), 41-56.
- Ryff, C. D., & Keyes, C. L. M. (1995). The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology, 69*(4), 719-727.
- Ryff, C. D., & Singer, B. H. (2008). Know thyself and become what you are: A eudaimonic approach to psychological well-being. *Journal of Happiness Studies, 9*(1), 13-39.
- Sam, D. L., & Berry, J. W. (2010). Acculturation: When individuals and groups of different cultural backgrounds meet. *Perspectives on Psychological Science, 5*(4), 472-481.
- Shim, G., Freund, H., Stopsack, M., Kämmerer, A., & Barnow, S. (2014). Acculturation, self-construal, mental and physical health: An explorative study of East Asian students in Germany. *International Journal of Psychology, 49*(4), 295-303.
- 出入国在留管理庁 (2024a). 在留外国人統計 (旧登録外国人統計) 統計表 出入国在留管理庁 Retrieved April 18, 2024 from

- https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html
出入国在留管理庁 (2024b). 在留資格一覧表 出入国在留管理庁 Retrieved April 24, 2024
from <https://www.moj.go.jp/isa/applications/status/qaq5.html>
- 出入国在留管理庁 (2024c). 留学生の日本企業等への就職状況について 出入国在留管理
庁 Retrieved April 24, 2024 from
https://www.moj.go.jp/isa/applications/resources/10_00013.html
- 高井 次郎 (1995). 日本人との交流と在日留学生の異文化適応 異文化間教育, 8, 106-116.
- 田中 共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ
出版
- 譚 璐美・劉 傑 (2008). 新華僑 老華僑——変容する日本の中国人社会—— 文藝春秋
- te Lindert, A., Korzilius, H. P., Stupar-Rutenfrans, S., & Van de Vijver, F. J. (2022). The role of
perceived discrimination, intergroup contact and adoption in acculturation among four Dutch
immigrant groups. *International Journal of Intercultural Relations*, 91, 297-310.
- 坪谷 美欧子 (2008). 「永続的ソジョナー」 中国人のアイデンティティ——中国からの日
本留学にみる国際移民システム—— 有信堂高文社
- Vogt, G. (2014). Foreign workers in Japan. In J. D. Babb (Ed.), *The SAGE Handbook of Modern
Japanese Studies* (pp. 567-582). Sage.
- Ward, C. & Kennedy, A. (1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and sociocultural
competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*,
18(3), 329-343.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1996). Crossing cultures: The relationship between psychological and socio-
cultural dimensions of cross-cultural adjustment. In J. Pandey, D. Sinha & D. P. S. Bhawuk (Eds.),
Asian Contributions to Cross-Cultural Psychology (pp. 289-306). Sage.
- Ward, C., Fox, S., Wilson, J., Stuart, J., & Kus, L. (2010). Contextual influences on acculturation
processes: The roles of family, community and society. *Psychological Studies*, 55(1), 26-34.
- 呉 小玉 (2014). 地域に暮らす中国人母子の健康ニーズと看護支援のあり方——異文化共
生の視点から—— 保健の科学, 56(4), 233-238.
- 巖 善昭・林 恭平・渡辺 能行・小笹晃太郎・東 あかね・青池 晟・松永 栄・川井 啓市 (1989).
在日中国人に対する社会医学的調査-2-健康,保健などについて 日本公衆衛生雑誌,
36(12), 839-844.
- 張 慧婧 (2013). 名古屋華僑社会——その歴史と現状—— ブイツーソリューション
- Zhang, N., & Dixon, D. N. (2003). Acculturation and attitudes of Asian international students toward
seeking psychological help. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 31(3), 205-
222.

Zheng, X., Sang, D., & Wang, L. (2004). Acculturation and subjective well-being of Chinese students in Australia. *Journal of Happiness Studies*, 5, 57-72.

朱 慧玲 (2013) . 日本華僑華人社会の変遷——日中国交正常化以後を中心として—— 日本僑報

付表 1 調査 1 の質問紙 (日本語版)

在日中国人の適応状況に関する調査

こんにちは。私は趙師哲と申します。中国天津の出身です。現在愛知淑徳大学では助教として勤めています。異文化コミュニケーションに関する授業を担当しております。また、岡山大学社会文化科学研究科で博士後期課程に属しています。日本に在住する、日本で就労する中国人の適応状況やメンタルヘルス状況について研究しております。

日本で生活することは安易なことではないと痛感しています。時々大きなストレスを感じます。貴方の適応状況及びメンタルヘルスの状況を簡単に教えていただきたいです。調査の結果は今後の日本における外国人向けの異文化適応トレーニングやメンタルヘルス指導の実践にて使う予定です。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

本調査はおよそ 15 分かかります。アンケート調査に参加する、参加しない、途中でやめることはすべて自由です。あなたの選択を尊重します。いつでもやめることはできます。私について、及びこの研究について、ご不明なところがありましたらいつでもご連絡ください。提供してくれた個人情報や考え方などについて、秘密保持を厳守します。第三者に絶対提供しません。論文執筆の差異に、データを使うことがあります。個人情報(氏名、年齢、性別、在留資格等々)を使わないことに誓います。貴方は今回の調査に参加したことを誰にも教えないことを誓います。貴方は調査の進み具合や結果を問い合わせる権利があります。本調査を実施するため、私は愛知淑徳大学グローバル・コミュニケーション学部の倫理審査を受けました。審査の番号はグロウコム申第 2018-3 となります。アンケートが回収された後に、謝礼として 500 円の図書カードを贈呈します。

アンケートの言語について、日本語か中国語を選ぶことができます。リラックスして、質問項目に答えてください。

なお、今後インタビュー調査を行う予定がありますので、ご興味があれば、連絡先を教えてくださいと幸いです。

WeChat ID/メールアドレス/電話番号

愛知淑徳大学
グローバル・コミュニケーション学部
助教 趙師哲
メール : zhaosz@asu.aasa.ac.jp
WeChat : shi-zhe-zhao

(一) あなたご自身についてお尋ねします。あてはまるものをクリックしてください。なお、「その他」を選んだ場合は、答えを文字で記入してください。正解はございませんので、あなた自身のお考えをそのままお答えください。

1 性別を選んでください

①男 ②女 ③その他

2 あなたの年齢をご記入ください () 歳

3 何歳の時に日本に住み始めましたか () 歳

4 日本での滞在年数を選んでください

①1年未満 ②1年以上～3年未満 ③3年以上～5年未満 ④5年以上～10年未満 ⑤10年以上～15年未満 ⑥15年以上～20年未満 ⑦20年以上～30年未満 ⑧30年以上

5 あなたの国籍を選んでください ①中国 ②日本 ③その他 ()

6 あなたの在留資格を選んでください

①永住 ②留学 ③技術・人文知識・国際業務 ④技能 ⑤技能実習 ⑥家族滞在 ⑦日本人の配偶者等 ⑧その他 ()

7 婚姻の状況

①結婚していない ②結婚している ③その他

②をクリックした方→ 結婚相手の国籍は a 中国人 b 日本人 c 帰化華人 d その他

8 最終学歴

①小・中学校 ②高等学校 ③専門学校・短大 ④大学 ⑤修士 ⑥博士

9 あなたの日本語レベルに一番近いものを1つ、を選んでください

①どのような場面でもまったく不自由はない

②どのような場面でもだいたい不自由はない

③日常生活には不自由ない

④日常生活にも不自由がある

⑤全く使えない

(二) 現在の日常生活について、お尋ねします。次の内容は、あなたにどれくらい当てはまりますか。「1 あてはまらない」「2 あまりあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 ややあてはまる」「5 あてはまる」の中から、最も近いものを一つクリックしてください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、思った通りにお答えください。

1. 中国の祝日や記念日を祝っている

2. 家では、日本の一般の家庭と同じように和食、洋食、中華を食べる

3. 家では、他の料理より中国の食べ物をよく食べる

4. 日本の生活習慣に馴染んで暮らしている
5. 在日中国人は中国人との結婚が望ましいと思う
6. テレビ・インターネットや中国人からの情報で、中国の政治や社会のことをよく知っている
7. 中国人と付き合いときに、ありのままの自分でいられる
8. 日本に住んでいるので、日本に帰化してもかまわないと思う
9. 中国風の生活習慣を守って暮らしている
10. 日本人との集まりに、積極的に参加している
11. 一人で外食する時は、中華料理を食べたい
12. 読み書きも含めて日本語を不自由なく使える
13. 自分はやっぱり中国人だと感じる
14. 日本の祝日や記念日を祝っている
15. 中国人の親友がいる
16. 日本人と付き合いときに、ありのままの自分でいられる
17. 中国語で不自由なく会話ができる
18. 中国の国籍を守り続けるのは良いことだと思う
19. 周囲の人に、自分は中国人だと伝えている
20. 日本人の親友がいる
21. 一人で外食をする時は、中華料理以外の様々な食事がしたい
22. 自分は日本人とほとんど変わらないと感じる
23. 中国人の集まりに、積極的に参加している
24. 在日中国人が日本人と結婚するのは望ましい
25. 日本のテレビや新聞・雑誌を通じて、日本の政治や社会のことをよく知っている
26. 周りから見れば、私は日本人と区別が付かないと思う

(三) 次の内容は、あなたにどれくらい当てはまりますか。最も近いものを一つクリックしてください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、思った通りにお答えください。

1. あなたは人生が面白いと思いますか
1 全くそう思わない 2 あまりそうは思わない 3 ある程度は 4 非常に
2. 過去と比較して、現在の生活は
1 全く幸せでない 2 あまり幸せでない 3 まあまあ幸せ 4 とても幸せ
3. ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか
1 全く幸せでない 2 あまり幸せでない 3 まあまあ幸せ 4 とても幸せ

4. ものがとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか
- 1 全くできない 2 ほとんどできない 3 ときどきはできる 4 だいたいできる
5. 危機的な状況（人生を狂わせるようなこと）に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか
- 1 全く自信はない 2 あまり自信はない 3 ある程度は 4 非常に
6. 今の調子でやっていけば、これから起きることにとも対応できる自信がありますか
- 1 全く自信はない 2 あまり自信はない 3 ある程度は 4 非常に
7. 期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか
- 1 全くそうは思わない 2 あまりそうは思わない 3 ある程度は 4 非常に
8. これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか
- 1 全くうまくいっていない 2 あまりうまくいっていない 3 まあまあ 4 非常に
9. 自分がやろうとしたことはやりとげていますか
- 1 全くできていない 2 ほとんどできていない 3 ときどき 4 ほとんどいつも
10. 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか
- 1 全く感じていない 2 あまり感じていない 3 ある程度は 4 非常
11. 将来のことが心配ですか
- 1 全く心配ではない 2 あまり心配ではない 3 ある程度は 4 非常に
12. 自分の人生には意味がないと感じていますか
- 1 全く感じていない 2 あまり感じていない 3 ある程度は 4 非常に
13. 自分がまわりの環境と一体化していて、欠かせない一部であるという所属感を感じるがありますか
- 1 全く感じない 2 あまり感じない 3 ある程度は 4 非常に強く
14. 非常に強い幸福感を感じる時間がありますか
- 1 全くない 2 ほとんどない 3 ときどき 4 ととてもよく
15. 自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じるがありますか
- 1 全く感じない 2 ほとんどない 3 ときどき 4 ととてもよく

付表 2 調査 4 の質問紙（日本語版）

協力者の皆様へ

この度は突然のご協力のお願いで失礼いたします。山口大学教育支援センター助教の趙師哲（ちょう してつ）と申します。中国天津の出身で、現在、海外に在住する中国出身者が居住地での適応や、海外に居住する自分自身についてどのように感じているのかといった点に関心をもって研究を行っております。

外国で生活するのは容易なことではなく、現地の社会に慣れるには大きな努力が必要になることもあるでしょう。そこで今回の調査では、海外で居住する中国大陸出身の皆さんに、海外での生活にどのように適応しているか、そして、海外に居住するご自身についてどのように感じ、どれほど幸福を感じるかについてうかがいたいと考えております。そこで日本で 3 年以上滞在、かつ「留学」「技能実習」以外のビザで滞在する皆様のご協力を頂きたいと思えます。調査の結果は今後の海外に住んでいる中国出身者向けのサポートや現地の多文化共生教育の実践に役立てて参ります。ご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

本研究では 2 回にわたる匿名式のアンケート調査を実施します。回答時間にはそれぞれ約 15 分かかります。第 2 回は 1 回目の調査終了後から一か月ほど後に実施します。また、アンケートへの回答は自由で、回答なさらない場合でも、何ら不利益は生じません。また、途中で回答をやめることも可能です。

提供していただいた個人情報については、研究目的にのみ使用します。これらの情報を管理するにあたっては秘密保持を厳守し、第三者に提供することは決してありません。学会発表や論文執筆の際に、集約したデータや分析した結果を使用することがありますが、その際は、回答者の個人情報（年齢、性別など）や、誰がどのような内容の回答を行ったかを特定できない形に加工することを徹底いたします。

本調査は、岡山大学大学院社会文化科学研究科・法務研究科研究倫理審査委員会にて倫理上問題がないか審査を受け、その承認のもとで実施されます。ご不明な点やその他調査に関する結果等の問い合わせにつきましては、下記のメールアドレスに、いつでもご連絡ください。

謝礼としましてささやかではありますが、2 回のアンケートへの回答完了をもって、郵送にて 1000 円の QUO カードを贈呈します。なお、1 回のみ回答の場合は、謝礼の贈呈は出来かねますのでご了承ください。ご多忙のところ恐れ入りますが、ご協力のほどなにとぞよろしくお願いいたします。

なお、回答にあたっては、正解などはございませんので、リラックスしてお答えください。今回のアンケートにご協力を頂ける場合は、「同意」ボタンを押して、回答を始めてください。よろしくお願い申し上げます。

山口大学教育支援センター助教

趙 師哲

連絡先：zhaoshizhe58@gmail.com

本研究への参加に同意していただける場合、「同意」ボタンを押してください。なお、Gmail アドレスをお持ちの方は、メールアドレスが自動的に表示されることがありますが、研究者側には一切表示されませんので、ご安心ください。

【一回目の質問紙調査】

まず、あなたの回答者 ID を作成します。例にならって、あなたの生年月日と携帯電話番号の下 4 桁を組み合わせた ID を作成し、回答欄にあなたの ID を入力してください。

例：5月9日生まれで、携帯電話番号の下4桁が1234の人の場合、IDは05091234

回答者 ID ()

(一) あなたご自身についてお尋ねします。あてはまるものをクリックしてください。なお、「その他」を選んだ場合は、答えを文字で記入してください。正解はございませんので、あなた自身のお考えをそのままお答えください。

1 性別を選んでください

①男 ②女 ③その他

2 あなたの年齢をご記入ください () 歳

3 何歳の時に日本に住み始めましたか () 歳

4 日本での滞在年数を記入してください () 年

5 あなたの国籍を選んでください ①中国 ②日本 ③その他 ()

6 あなたの在留資格を選んでください

①永住 ②留学 ③技術・人文知識・国際業務 ④技能 ⑤技能実習 ⑥家族滞在
⑦日本人の配偶者等 ⑧その他 ()

7 婚姻の状況

①結婚していない ②結婚している ③その他

②をクリックした方→ 結婚相手の国籍は a 中国人 b 日本人 c 現地の国籍に帰化

した華人 d その他

8 最終学歴

①小学校、中学校 ②高等学校 ③専門学校・短大 ④大学 ⑤修士 ⑥博士

9 あなたの日本語レベルに一番近いものを1つ、選んでください

- ①どのような場面でもまったく不自由はない
- ②どのような場面でもだいたい不自由はない
- ③日常生活には不自由ない
- ④日常生活にも不自由がある
- ⑤全く使えない

(二) 現在居住している国・地域におけるあなたの日常生活について、お尋ねします。次の内容は、あなたにどれくらい当てはまりますか。「1 あてはまらない」「2 あまりあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 ややあてはまる」「5 あてはまる」の中から、最も近いものを一つクリックしてください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、思った通りにお答えください。

- 1. 日本の生活習慣に馴染んで暮らしている
- 2. 在日中国人は中国人との結婚が望ましいと思う
- 3. テレビ・インターネットや中国人からの情報で、中国の政治や社会のことをよく知っている
- 4. 中国人と付き合うときに、ありのままの自分でいられる
- 5. 中国風の生活習慣を守って暮らしている
- 6. 一人で外食する時は、中華料理を食べたい
- 7. 読み書きも含めて日本語を不自由なく使える
- 8. 自分は日本人とほとんど変わらないと感じる
- 9. 周りから見れば、私は日本人と区別が付かないと思う

(三) 現在居住している国・地域(例：日本)での、あなたの思いや考えについて、お尋ねします。次のそれぞれの項目は、あなたご自身にどれくらい当てはまりますか。「1 あてはまらない」「2 あまりあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 ややあてはまる」「5 あてはまる」の中から、あなたご自身の考えに最も近いものを一つ選んでクリックしてください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、感じたことをそのままお答えください。なお、●●には、あなたが現在住んでいる国・地域の名前(例：日本)をあてはめて考えてください。

- 1. 自分は世界のどこにいても中国人であると思う

2. 自分のルーツは中国にあると思う
3. 自分のものごとのとらえ方の基準は中国にあると思う
4. 自分の考え方や価値観は中国のものに基づいている
5. 国際的なスポーツの試合では、中国のチームを応援する
6. 世界のどこであれ、中国人が活躍していると聞くと、うれしい
7. 人生の最後の時期は中国で過ごしたい
8. 中国人であることに誇りを感じる
9. 中国の伝統的な価値観が中国本土で失われていることを悲しく思う
10. 中国本土の人々の生活を良くすることに貢献したい
11. 中国の改善してほしいところに、中国を出てから気づいた
12. 当然だと思っていた中国での物事の進め方には欠点があることに気づいた
13. 中国の常識が、他国の常識と同じとは限らない
14. 中国大陸の中国人が当たり前だと思っていることに、疑問を感じるようになった
15. ●●の物事の進め方や考え方を見習うべき点が中国にはあると思う
16. 中国では何においても競争が激しすぎる
17. 中国での競争についていこうとすると、辛い思いをすることが多い
18. ●●で当たり前とされる考え方が理解できる
19. ●●での、公共の場におけるマナーがわかる
20. 中国はやっても問題にならないが、●●ではいけないことは、自分はしない
21. ●●と中国の習慣で、異なっている点を説明できる
22. ●●の人々は、中国的な考え方を理解してくれないことがある
23. ●●の人付き合いの仕方に合わせて、●●の人々と付き合うことができる
24. ●●の慣習に合わせて振る舞うことができる
25. ●●にも悪い面はあると思う
26. ●●の良いところが説明できる
27. ●●の社会は素晴らしい社会だと思う
28. ●●の人々について、「こうしたらよいのに」と指摘したくなるようなことがある
29. ●●の価値観を押し付けられるのは嫌だ（考えるだけで嫌）
30. ●●の人に対して持っていたイメージが全員にあてはまるわけではないとわかった
31. 民族の違いは、些細なことだと思う
32. 出身国にこだわらずに生きていきたい
33. 国境を意識せずに活動したい
34. 国境線は地球上に必要ないと思う
35. 国籍でひとくくりされることなく、1人の個人としてみてほしい

36. 世界中の様々な国の文化に触れ、理解したいと思う
37. 世界中の様々な国の人の、それぞれの考え方を知りたい
38. 文化の違いを乗り越えて、問題解決に取り組むべきだ
39. いいところも悪いところもあるという点で、どの国もかわらない
40. 中国の文化とは異なる文化を持つ国や地域があっても、相手の文化を尊重する
41. 自分と相手の文化が異なっていると、一方を完全に無視するのはよくないと思う
42. 心を許せそうな相手なら、国や民族が違って、友達になれると思う
43. 自分と相手の国が異なっていると、対立する必要はないと思う
44. 自国の文化や価値観を大切にしながら、他の国の文化や価値観を否定せずにいることができる
45. 同じ地球に住む以上、世界中の人々は地球の問題の当事者として協力しあうべきだと思う

(四) 以下の文はあなたご自身にどのくらいあてはまりますか。「1あてはまらない」「2あまりあてはまらない」「3どちらともいえない」「4ややあてはまる」「5あてはまる」の中から、ご自身にあてはまるものを選んでください。

1. 私にとって重要な人のほとんどは、地球市民であることが望ましいと考えている
2. 私が自分のことを地球市民といたら、私にとって重要な人のほとんどがそれを認めてくれるだろう
3. この世界における多様な文化がいかに社会的にかかわりあっているかを私は理解している
4. 私が自分の身近なところで行っている行動が、外国にいる人々にも影響するかもしれないことを意識している
5. 国際関係に影響を与えるような現代の社会情勢について、常に情報を得ていられるようにしている
6. 自分が外国の人々と繋がっていて、自分の行動が彼等に影響を及ぼすと信じている
7. 私は自分のことを世界市民と知っている
8. 私は自分のことを世界市民だと強く思っている
9. 私は他の国から来た人々に共感できる
10. どの国から来た人に対してでも、自分が相手の立場になって考えることができる
11. 異なる国から来た人々を知ることを目的にする団体に入るのが好きだ
12. この世界に存在するたくさんの文化について学ぶことに興味をもっている
13. 豊かな国は恵まれない国の人々を助けるべきだ

14. 医療、水道、食料、法的支援のような基本的なサービスは、住んでいる国に関わりなく、誰もが利用できるようにすべきだ
15. 人々は持続可能な環境を育むために、天然資源を保存する責任がある
16. 天然資源は物質的な富のためというよりもむしろ生活に必要なものを供給するために主に使われるべきだ
17. 機会があれば、私はその人の国籍に関わりなく援助を必要としている人たちを助きたい
18. もしもできるなら、私はあらゆる国の人々への援助を行うことに自分の人生をささげたい
19. 地球規模の問題に積極的にかかわることは、私の責任だと思う
20. 自分が能う限り、世界中の文化の違いを理解し尊重することに対して、私は責任があると思う

調査へのご協力、ありがとうございました。この研究では、調査を2回に分けて実施しており、みなさまには来月以降に実施する、後半の調査にもご協力をお願いする次第です。二回目のアンケートへのリンクに関する案内は、また所属する WeChat グループで配信しますので、WeChat のメッセージをご確認ください。2 回の調査両方にご回答いただいた方にはお礼を差し上げますので、次回の調査でも、なにとぞ回答のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

【二回目の質問紙調査】

前回のアンケートへのご協力、誠にありがとうございました。これから、二回目のアンケート調査が始まります。まず、前回入力した回答者 ID（あなたの生年月日と携帯電話番号の下 4 桁を組み合わせた 8 桁番号）を書いてください。例：5 月 9 日生まれで、携帯電話番号の下 4 桁が 1234 の人の場合、ID は 05091234

なお、一回目のアンケート調査に回答していない方の、二回目からの参加はできかねます。回答があっても、QUO カードの贈呈は致しかねます。

回答者 ID ()

(一) 【文化変容について】

1 回目のアンケートと同一のものをを用いる。

(二) 【越境者文化意識について】

1 回目のアンケートと同一のものをを用いる。

(三) 次の内容は、あなたにどれくらい当てはまりますか。最も近いものを一つクリックしてください。回答には、正しい答えや間違った答えはありませんので、思った通りにお答えください。

1. あなたは人生が面白いと思いますか
1 全くそう思わない 2 あまりそうは思わない 3 ある程度は 4 非常に
2. 過去と比較して、現在の生活は
1 全く幸せでない 2 あまり幸せでない 3 まあまあ幸せ 4 とても幸せ
3. ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか
1 全く幸せでない 2 あまり幸せでない 3 まあまあ幸せ 4 とても幸せ
4. ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか
1 全くできない 2 ほとんどできない 3 ときどきはできる 4 だいたいできる
5. 危機的な状況（人生を狂わせるようなこと）に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか
1 全く自信はない 2 あまり自信はない 3 ある程度は 4 非常に
6. 今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる自信がありますか
1 全く自信はない 2 あまり自信はない 3 ある程度は 4 非常に
7. 期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか
1 全くそうは思わない 2 あまりそうは思わない 3 ある程度は 4 非常に
8. これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか
1 全くうまくいっていない 2 あまりうまくいっていない 3 まあまあ 4 非常に
9. 自分がやろうとしたことはやりとげていますか
1 全くできていない 2 ほとんどできていない 3 ときどき 4 ほとんどいつも
10. 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか
1 全く感じていない 2 あまり感じていない 3 ある程度は 4 非常に
11. 将来のことが心配ですか
1 全く心配ではない 2 あまり心配ではない 3 ある程度は 4 非常に
12. 自分の人生には意味がないと感じていますか
1 全く感じていない 2 あまり感じていない 3 ある程度は 4 非常に

13. 自分がまわりの環境と一体化していて、欠かせない一部であるという所属感を感じる
ことがありますか
1 全く感じない 2 あまり感じない 3 ある程度は 4 非常に強く
14. 非常に強い幸福感を感じる時間がありますか
1 全くない 2 ほとんどない 3 ときどき 4 とてもよく
15. 自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じる
ことがありますか
1 全く感じない 2 ほとんどない 3 ときどき 4 とてもよく

2回にわたるアンケートへのご協力、心よりお礼申しあげます。2回の調査両方にお答え
いただいた方へお礼（QUOカード1000円分）をお送りしますので、送付先のご住所とお名
前を以下にご記入ください。なお、ご記入いただいた内容は、お礼をお送りするときのみに
用いられますので、受領書を頂き次第、データはすぐに廃棄することをお約束いたします。
なお、謝礼が不要であるという方は、「謝礼不要」と氏名・住所の記入欄に入力してくださ
い。